

エトス-25

58-1

58-1

例言

一 斯書ハコライヤ氏ノ著抜齒術ヲ基礎トシ尙ホガレツ

トソシ氏ノ齒科全書リツチ氏ノ齒科大全カーク氏并

ニヒルアラウン氏ノ手術書等ヲ參酌シテ編纂シタル

モノナリ

一 斯書學術上ノ譯語ハ先輩ノ用例ニ據ルト雖凡往々編

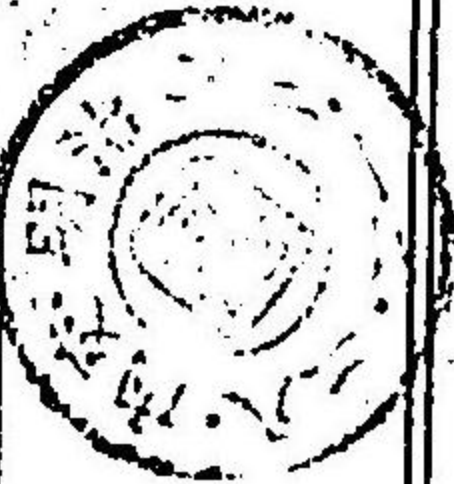
者ノ私力ニ創定セルモノアリ皆其下ニ原語ヲ插ミ以

テ對照ニ便シ其他之カ適當ノ譯語ナキモノハ暫ク假

字ヲ以テ原語ヲ記セリ

一 凡ソ名詞ニ假字ヲ用ヒタルモノ符標一ニ左ノ例ニ據

レリ



ニユーヨーク (地名) コライヤ (人名)
 下クトル (學位) 「カツダベルカ」(物名)
 一斯書本文ノ意義ヲ明瞭ナラシムルカ爲メ圖畫ヲ附ス
 而メ編者ノ意匠ニ成ルモノ、外ハ皆引用ノ著書ヨリ
 之ヲ轉載セリ
 一斯書素ト業務執筆ノ餘ニ成リ校訂未タ精カラス魯魚
 ノ謬恐クハ尙ホ多カラン謹ンデ博雅ノ教ヲ俟ツ耳

明治三十二年十月上浣

編纂者識

齒科學叢書 卷二

目次

第三篇 拔牙術

- 第一章 拔牙ニ關スル要項……………一、
- 第二章 拔牙器械并ニ操作法……………一一、
- 第三章 施術ノ方法并ニ順序……………二六、
- 第四章 上顎齒牙并ニ齒根拔去法……………三一、
- 第五章 下顎齒牙并ニ齒根拔去法……………四九、
- 第六章 乳齒拔去法……………七一、
- 第七章 亂排齒拔去法……………七五、
- 第八章 拔牙上ニ施スヘキ麻醉法……………八七、

第一節 全身麻醉法……………八七、

第二節 局處麻療法……………九二、

第四篇 拔牙ノ困難、偶發症

第一章 齒牙ニ關スル困難、偶發症并繼發症……………一〇三、

第二章 顎骨ニ關スル困難、偶發症并繼發症……………一〇〇、

第三章 軟組織ニ關スル困難、偶發症并繼發症……………一一八、

第四章 麻醉ヲ施シ拔牙スル際ニ生スル困難、偶發症并繼發症……………一三八、

第五章 雜種ノ困難、偶發症并繼發症……………一四七、

目次完

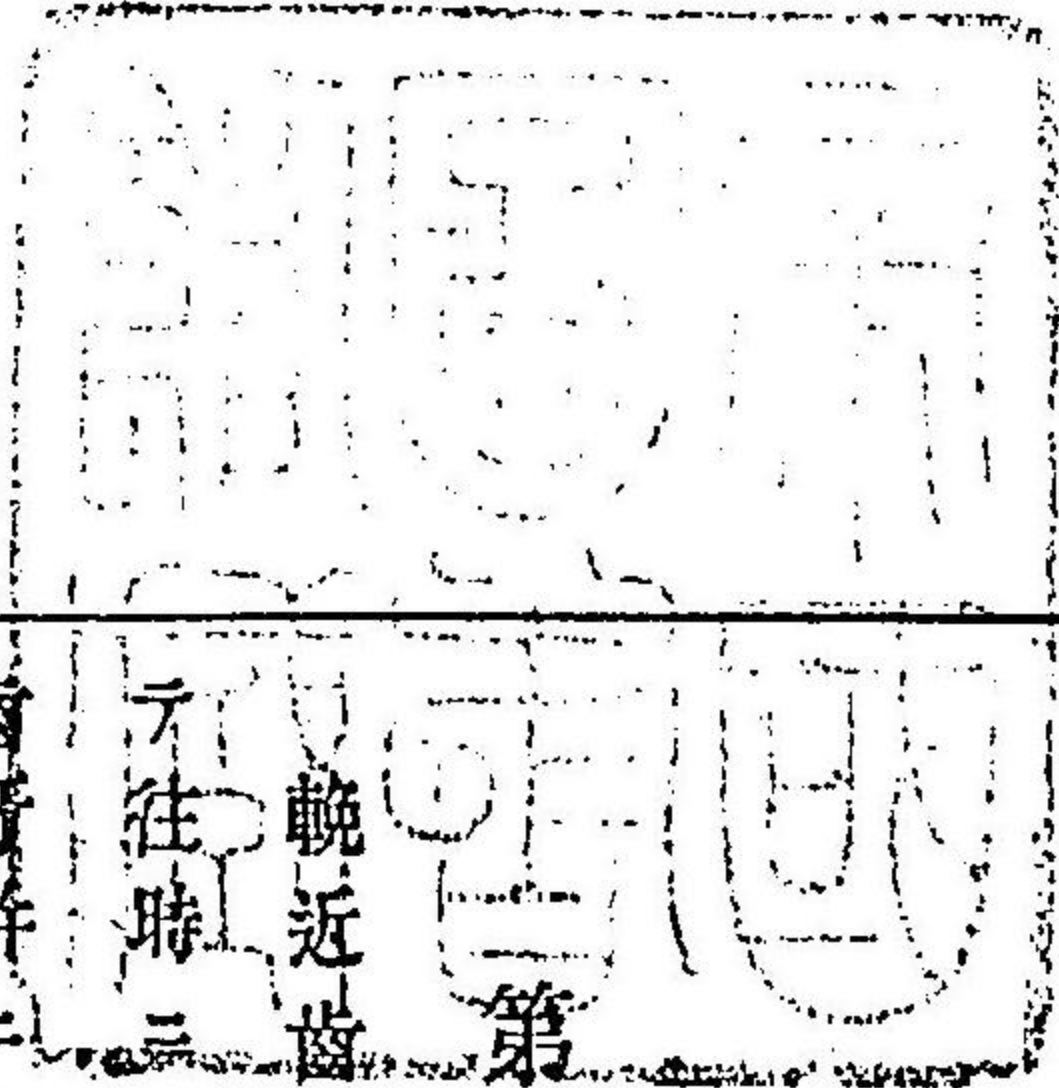
齒科學叢書卷二

齒科醫 荒木盛英 編纂

第三篇 拔牙術

第一章 拔牙ニ關スル要項

最近齒科ノ學日ニ益々發達シテ治術愈々精緻ヲ致シ隨テ往時ニアリテ拔去ノ外策ノ出ツル所ヲ知ラサリシ劇痛齒牙并ニ腐壞齒根ト雖モ今ヤ鎮痛藥及防腐劑ノ力ヲ藉リテ充填若クハ齒冠繼續術ヲ施シ得ルト寔ニ易々タルト共ニ治療ノ終極タル拔牙ノ如キハ力メテ之ヲ避クルニ至レリ然ルニ世上今尙ホ齒牙ノ癩棄セラル、モノ夥多ナルヲ



拔牙ニ關スル要項

拔牙ノ適應症

見ルハ果シテ何ニ因ルカ蓋シ世人多クハ齒牙ヲ愛惜スルノ念慮ニ乏シク或ハ之ヲ施術ノ過酷ナルヲ謬想シテ之ヲ自然ニ放擲スルカ故ニ漸々病勢ノ跋扈ヲ致シ遂ニ復救治スヘカラサルノ悲境ニ陥ルモノ比々トシテ然ラサルハナシ是レ豈ニ吾人齒科ノ業ニ從事スル者ノ袖手觀傍スヘキトナランヤ

齒牙及齒根拔去術ヲ應用スヘキ場合ハ實ニ左ノ如キ狀態ニ限レルモノトス

- 一、齶齠期ニ方リテ永久齒ノ萌生ヲ妨碍スル乳齒
- 二、吸收作用ニ因リテ齒根著シク短縮セルモノ
- 三、永久齒不當ノ地位ニ萌生シ爲メニ齒根ノ吸收ヲ停止サレタル乳齒

四、齶齠ノ際ニ於ケル刺戟或ハ痙攣ヲ豫防センカ爲メ

其乳齒

- 五、齒牙ノ亂排ヲ豫防シ或ハ矯正スルタメ
- 六、智齒ノ發生困難或ハ牙關緊急ヲ起セル場合
- 七、執拗ナル齒槽膿腫或ハ頬瘻ヲ起セルモノ
- 八、白垩質瘻ヲ有シ爲メニ神經痛ヲ起セルモノ
- 九、上顎竇蓄膿ヲ起セルモノ
- 十、齒髓息肉ヲ生シ或ハ齒齦息肉ヲ誘起セルモノ
- 十一、慢性齒根膜痙攣ニ罹リ縱令治療ヲ加フルモ漸々惡性ノ轉歸ヲ取ルヘキモノ
- 十二、骨瘍若クハ骨疽ヲ誘起セルモノ
- 十三、齒槽突起ノ瘦削ニ依リ著シク弛緩セルモノ及ヒ齒

槽突起ノ肥大ヲ有スルモノ

十四、百計救治法ノ盡キタル齒痛

十五、對合齒缺乏ノ爲メ漸々挺舉シテ弛緩甚シク或ハ咀嚼ノ障害ヲナスモノ

十六、顎ノ閉合ヲ妨碍スル智齒

十七、保存ノ目的ナキ折斷齒牙或ハ縱裂齒牙并ニ之カ爲

メ舌唇其他口内軟組織ヲ刺戟シテ惡性潰瘍ヲ生シタル時

十八、顔貌并ニ發音ヲ害スル過剩齒

十九、口腔外科手術ノ際其障碍トナルモノ

其他貧患者ニシテ治療費ノ負擔ニ堪ヘサル者、長時日ノ施術ヲ加ヘ能ハサル者、身體孱弱ニシテ長時間ノ施術ニヨ

拔牙ノ禁忌症

リ反テ不長ノ徵候ヲ呈スヘキ者等ニアリテハ往々拔牙ノ必要ヲ見ルコトアリ

拔牙術ヲ施スニ方リテ豫メ注意ヲ要スヘキモノアリ即チ患者ノ身體ヲ診シテ其健否ヲ知り高度ノ心臟病殊ニ瓣膜病、脂肪變性、及ヒ動脈硬化、出血素因ヲ有スル者即チ血友病、壞血病、紫斑病、血液病即チ貧血病、白血病、退實遜病、腺病其他尿毒症、全身梅毒、癩癩、諸種ノ腦病等ニ罹リ或ハ失血ニ因ル大衰弱并ニ妊娠ノ末期ニアリテハ須ラク之ヲ禁忌スヘシ

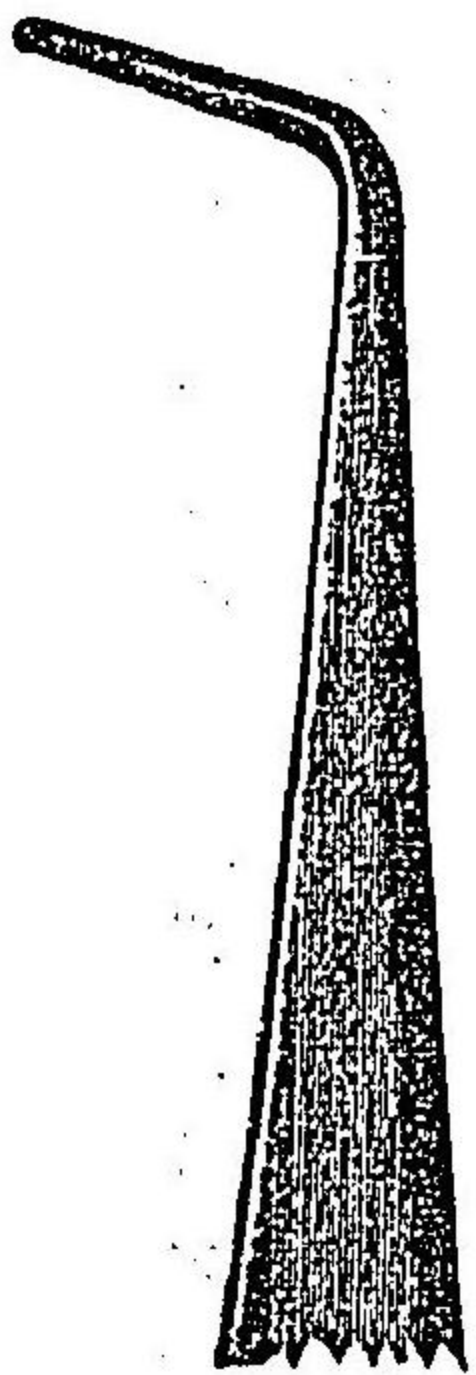
齒牙ノ検査

右診査ヲ終リ拔牙スヘク確定シタル時ハ先ツ齒牙ヲ精細ニ検査セサルヘカラス即チ是ハ強靱ナル筋肉ニ因リテ圍擁セラレアリト假定シ其拔去ニ方リ幾何ノ力量ヲ加ヘ

探針ノ圖

第一圖

テ可ナルカチ豫定シ、又齒根ノ場合ニ於テハ其邊縁ノ強弱如何ヲ試ムヘシ。蓋シ之ヲ行フニ最モ重要ナルハ第一圖ニ示スカ如キ探針 Probe. ノ類ナリ



術者并ニ患者ノ位置

次ニ攻究スヘキ要點ハ實ニ術者并ニ患者ノ位置ニアリトス即チ手術臺ハ之ヲ光線ノ充分透射スヘキ地位ニ固定シ、若シ手術臺ヲ有セサルハ機ニ望ミ普通ノ椅子ヲ以テ之ニ充テ或ハ兩脚ノ椅子ヲ相對向シテ据ヘ患者ノ頭ヲ支撐セシムル爲メ其一脚上ニ枕若クハ術者ノ左腕ヲ稽止セシムルヲ可トシ、患者ヲシテ手術ヲ施スニ最モ便ナル位置ニ坐セシメサルヘカラス

齒牙并ニ顎骨ノ解剖

術者モ亦容易ニ力ヲ供給シ得ヘキ適當ナル位置ヲ撰定セサルヘカラス。而シテ必要ニ際セハ患者ノ頭首ヲ確持セシメンカ爲メ術者ノ左腕ヲ以テ之ヲ圍擁シ併セテ左指ヲ用ヒテ左ノ如ク措置スヘシ

一、拔去スヘキ齒牙并ニ其近接部ヲ充分明視シ且ツ器械ノ送入ヲ便ナラシムヘク頰及ヒ他ノ軟組織ヲ擴張スヘシ

二、下顎ヲ支撐セシム

三、齒槽突起ヲ夾持シテ充分ナル力量ヲ加ヘシム

尙ホ各種ノ齒牙拔去ニ方リテ要スル地位等ハ更ニ第四、五、兩章ニ於テ説明スヘシ

拔牙術上直接ノ關係ヲ有シテ術者ノ豫メ講究セサル

齒根ノ形状

ヘカラサルモノハ實ニ齒牙并ニ顎骨ノ解剖ナリトス。然リ術者ニシテ其解剖ニ通曉スル所ナクンハ安ソ能ク其手術ヲ完フスルヲ得ンヤ。是ニ於テ乎予ハ左ニ數言ヲ費スノ已ムヲ得サルヲ知ル

蓋シ齒牙ヲ検査スル時ハ次ノ如キ齒根ノ區別アルヲ識得スヘシ即チ

- 一、單ニ圓錐形根ヲ有スルモノ
- 二、稍不齊ニシテ扁平或ハ彎曲齒根ヲ有スルモノ
- 三、多數根ヲ有スルモノ

第一ハ上顎前齒(永久齒及乳齒)并ニ下顎小白齒ヲ包括シ第二ハ下顎前齒、犬齒、永久齒及乳齒并ニ上顎犬齒、小白齒ヲ含有シ、上顎并ニ下顎ノ大白齒(永久齒及乳齒)ハ第三ニ屬シ

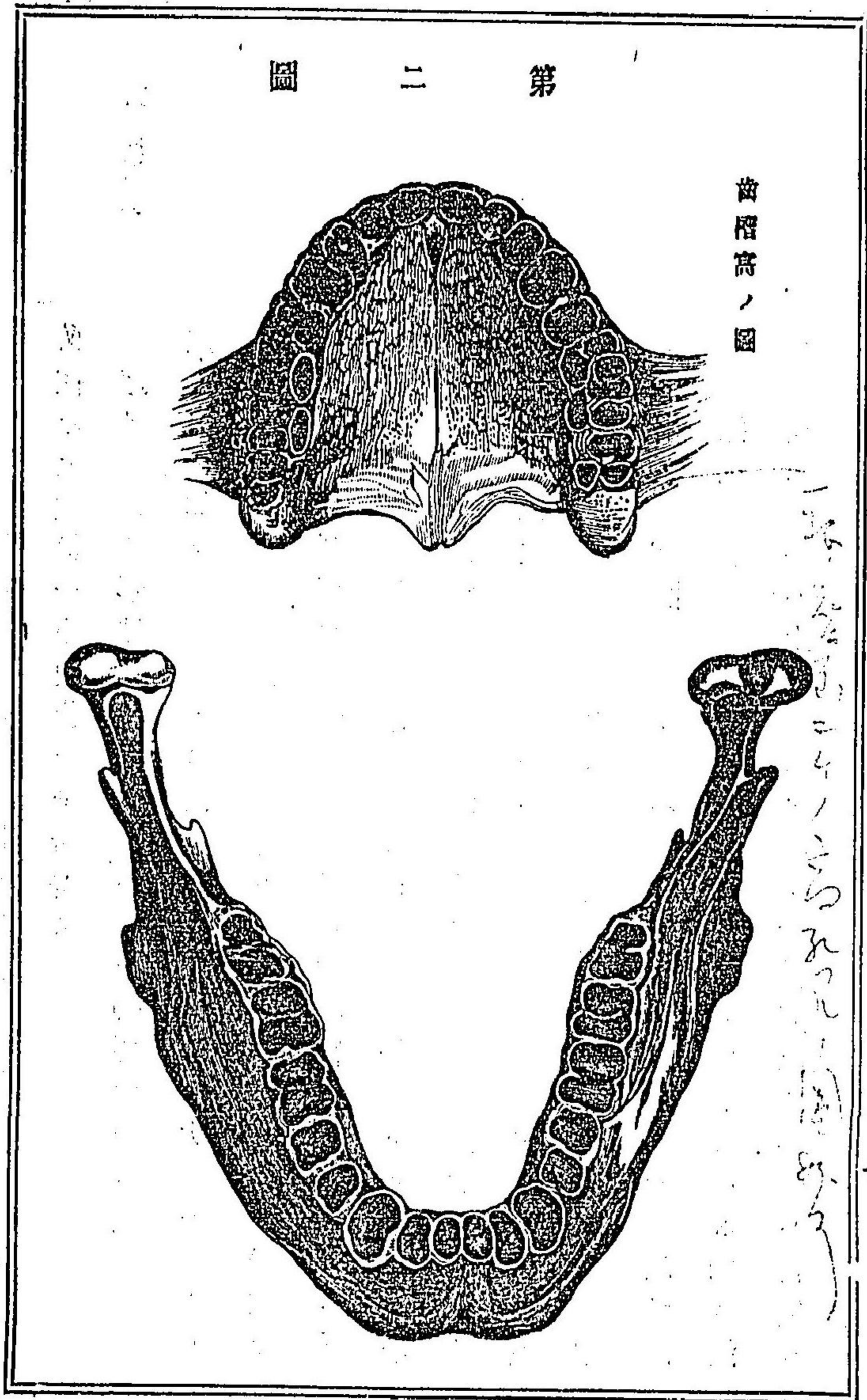
齒槽窩ノ排列解剖

又往々上顎第一小白齒ヲモ含蓄ス

豫メ齒根ノ形状ヲ察知スルハ最モ必要ナル事項ニシテ拔去力ヲ加フルノ際大ニ之カ方法ノ指導トナルモノナリ又手術ニ熟達シ其果ヲ收メント欲セハ齒槽窩ノ位置ヲ熟知スルヲ肝要ナリ。蓋シ第二圖ハ齒槽窩ノ普通排列ヲ表ハスモノナリト雖モ毎常必スシモ斯ル整然タル排列ヲ有スルモノニ非サルヲ以テ假令骨體ニ就テ充分ナル研究ヲ積ムモ實際之ヲ診定スルハ容易ノ業ニアラサルカ故ニ須ラク經驗ヲ積ンテ自得スルヲ要ス。而シテ齒槽窩ヨリ齒牙ヲ抽出スルノ際ニ方リテハ常ニ齒槽壁ノ或部分ニ於テ高度ノ抵抗ヲ有スルヲアルヲ臆起スルヲ良トス。尙ホ殊ニ注意ヲ要スヘキハ上顎骨ニアリテ齒槽突起ノ外壁ハ内壁ヨ

拔齒ニ關スル要項

齒槽窩ノ圖



第 二 圖

リ比較的薄質ナルト、犬齒ノ槽壁并ニ第三大白齒部ニ於ケル骨質ノ蜂巢織ナルトニアリ。又下顎ニアリテ第三大白齒或ハ往々第二大臼齒ヲ除キテ他ノ齒槽外壁ハ内壁ニ比シ其質菲薄ナルモノ、如ク第三大白齒槽窩ノ後壁ハ稍緻密ナリトス

第二章 拔齒器械并ニ操作法

齒牙ノ拔去ニ方リテ使用スヘキ器械ハ鉗子 Forcep. 挺子 Elevator. 鍵子 Key. 及ヒ螺旋拔齒器 Screw. 等ニシテ鉗子ハ鉗子或ハ釘拔鉗ノ大ナルモノヨリ成リ之ヲ三部ニ區別ス即チ齒牙ヲ鉗夾スヘキ部位ナル刃嘴、交叉點及ヒ把柄是ナリ。而シテ鉗子ノ性質タルヤ鍛鍊シタル鋼鐵ヨリ成リ其量輕

鉗子

拔齒器械并ニ操作法

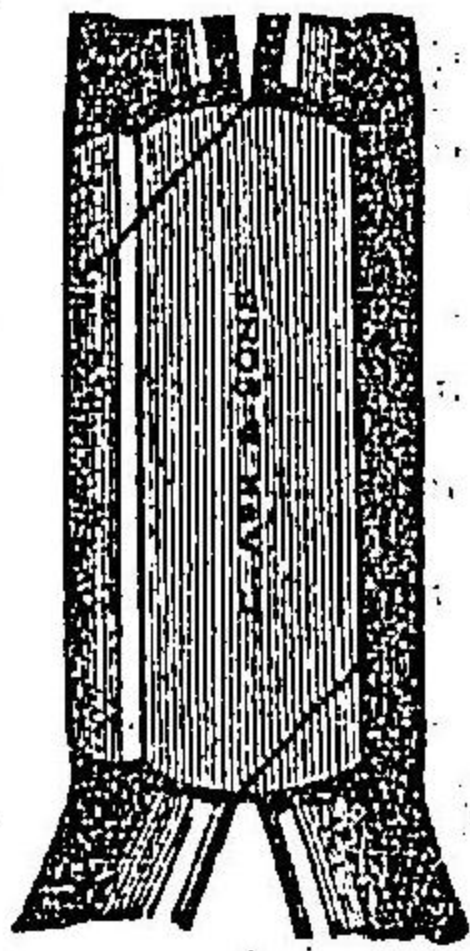
鉗子ノ種類

ク且ツ齒牙ヲ鉗夾スルノ際握力ニ因リテ屈撓セサル硬度
ナ有シ或ハ硬ニ失シテ腐碎拆斷スルノ虞ナカラシメ而モ
刃嘴ハ拔去スヘキ齒牙ノ形狀ニ適合シ鉗夾ニ方リ其齒冠
ニ恰當セサルヘカラサルナリ故ニ齒牙ノ解剖的形狀ニ準
シ各造構ヲ異ニシ其種類頗ル多シトス

刃嘴ヲ縱斷シテ其面ヲ視レハ薄キ楔狀ノ觀ヲ呈ス又關
節交叉式ニ二種アリ即チ第一種ハ鉗子ノ一半、他一半ノ孔
口ヲ貫通シ其中央部ニ於テ鉸釘ニ依リ結合シ(第三圖)第二

鉗子關節ノ圖

第三圖



種ハ兩半ノ側面相對シテ螺旋或
ハ鉸釘ニ依リ結合セラル(第四圖)
米國製鉗子ハ概ネ第一種ノ式ニ
據リ英國製ハ第二式ニ則ル而シ

全 兩者ノ得失

第四圖



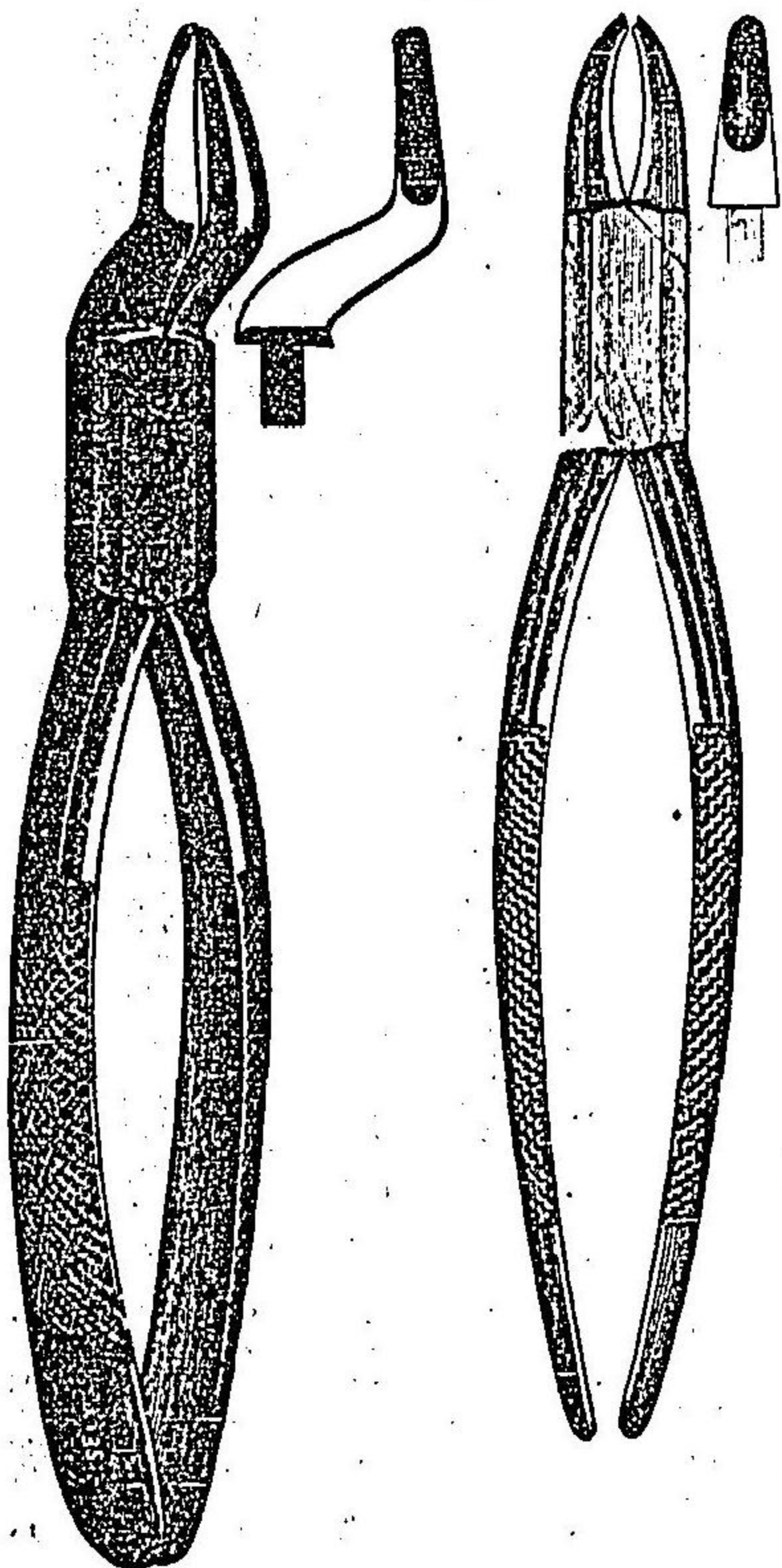
テ兩者各其特長アリ即チ後者ハ
容易ニ拭掃及ヒ消毒シ得ルノ利
益ヲ有シ且ツ輕微ノ側方運動ヲ
施シ得ヘシト雖モ弛緩シ易ク或
ハ脆弱ノ非難ナキヲ必トセス之ニ反シ前者ハ關節強實ニ
シテ側方運動ヲ加ルモ毫モ弛緩ノ虞ナシ然レモ消毒ノ
困難ヲ免レス且ツ其齒根鉗子ニアリテハ英國製ニ一籌ヲ
輸スト謂フヘシ蓋シ一得一失ハ事物ノ常數ナルヲ以テ術
者宜シク己ノ利トスル所ノモノヲ撰擇スヘキヤ論ヲ俟タ
ズ但シ我國ニ於テハ米國製鉗子多ク行ハル
柄脚ハ掌中ニ充分把握シ得ヘキ大サ并ニ形狀ヲ有シ且
ツ刃嘴ヲ齒牙ノ長軸ニ向ヒテ鉗夾シタル際唇部ヲ排シテ

上顎前部齒用鉗子之部

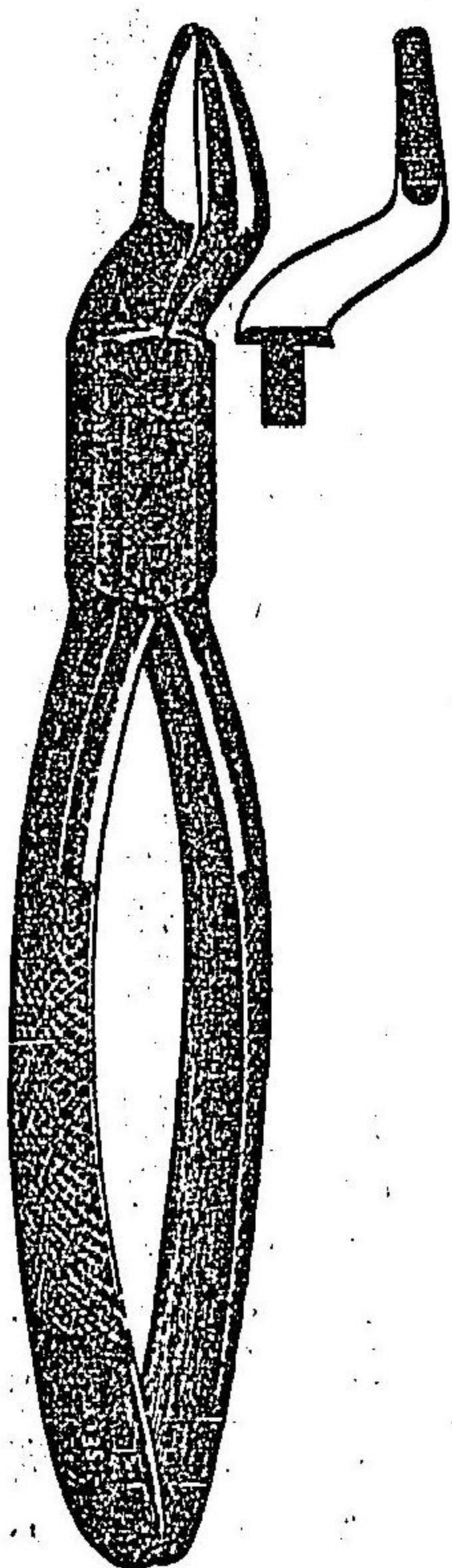
全銃鎗狀鉗子ノ圖

之ヲ保護シ得ヘキ裝置ヲ有セサルヘカラス
上顎前部齒用鉗子ノ刃嘴及ヒ柄脚ハ概ネ一直線ヲナセ
リ(第五圖)ト雖モ銃鎗狀ヲ呈スルモノ亦之アリコハ齒根拔
去ニ兼用スルヲ得ヘシ(第六圖)上顎后部齒用鉗子ニ於テハ

第五圖



第六圖

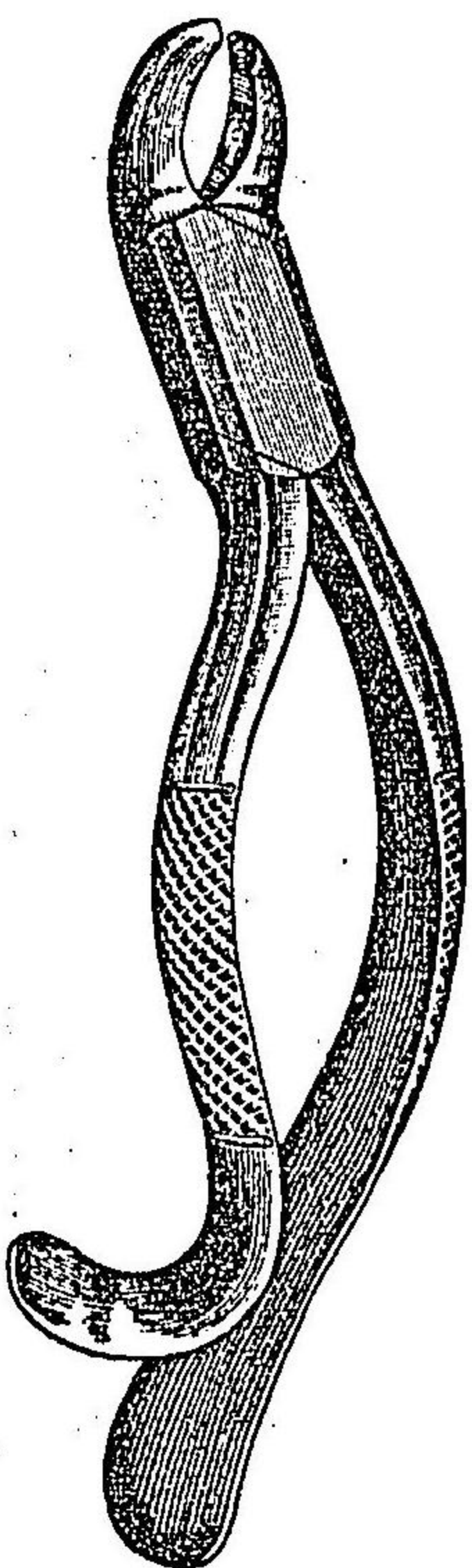


上顎后部齒用鉗子之圖

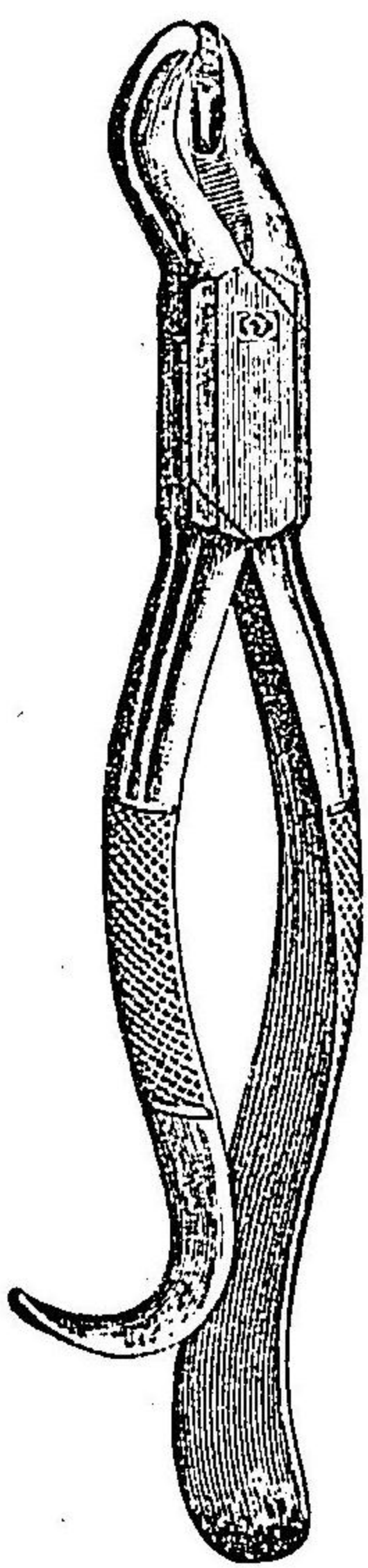
全銃鎗狀鉗子ノ圖

刃嘴并ニ柄脚ハ俱ニ彎曲シテ小サキ或ハ大ナル角度ヲ作
リ(第七圖)若クハ銃鎗狀ニ彎曲セリ(第八圖)而シテ下顎用鉗
子ニアリテハ其刃嘴ハ柄脚ヨリ九十度乃至百二十度ニ屈
曲シ其形狀ニ二種アリ即チ第一種ハ嘴狀ニシテ概ネ英國

第七圖

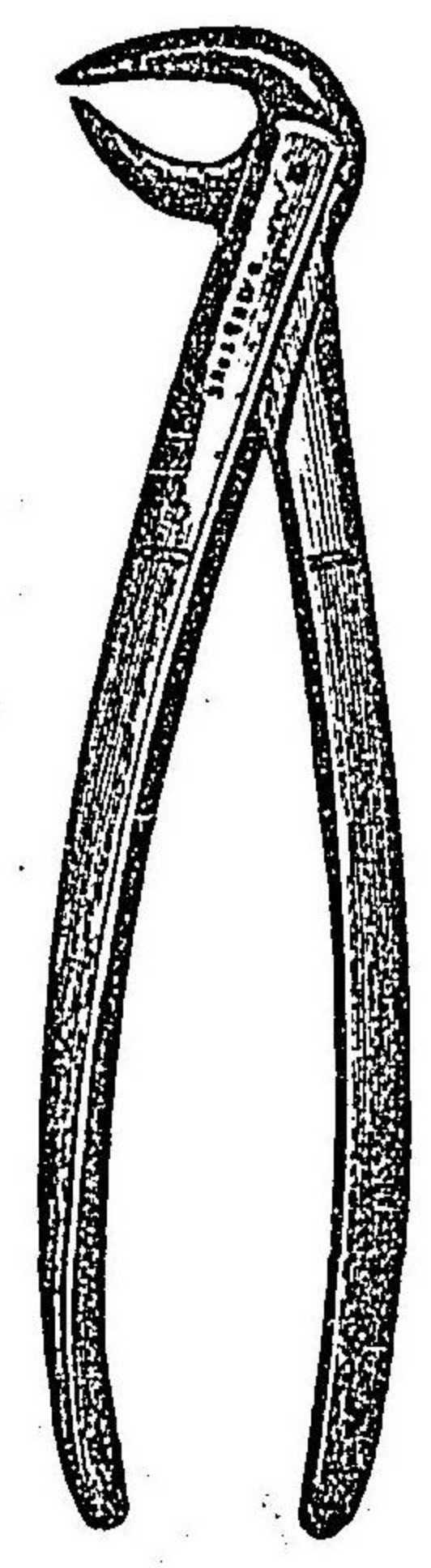


第八圖



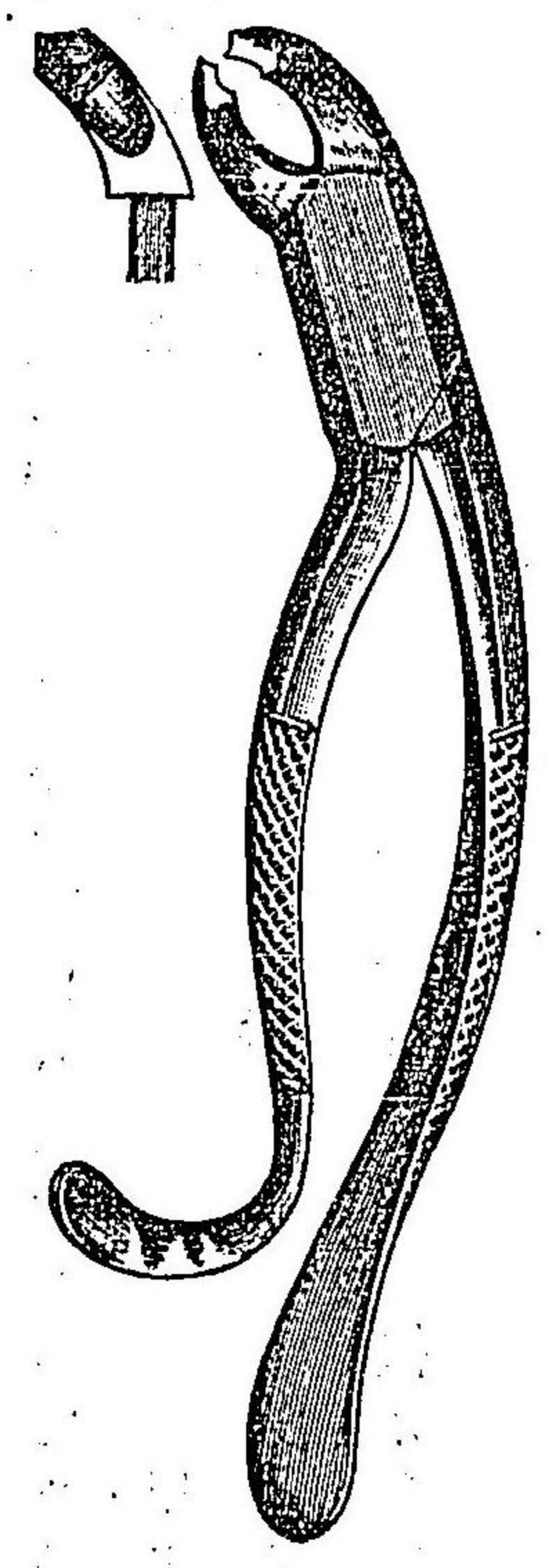
下顎後部齒用嘴狀鉗子ノ圖

第九圖



下顎後部齒用鉗子之圖

第十圖



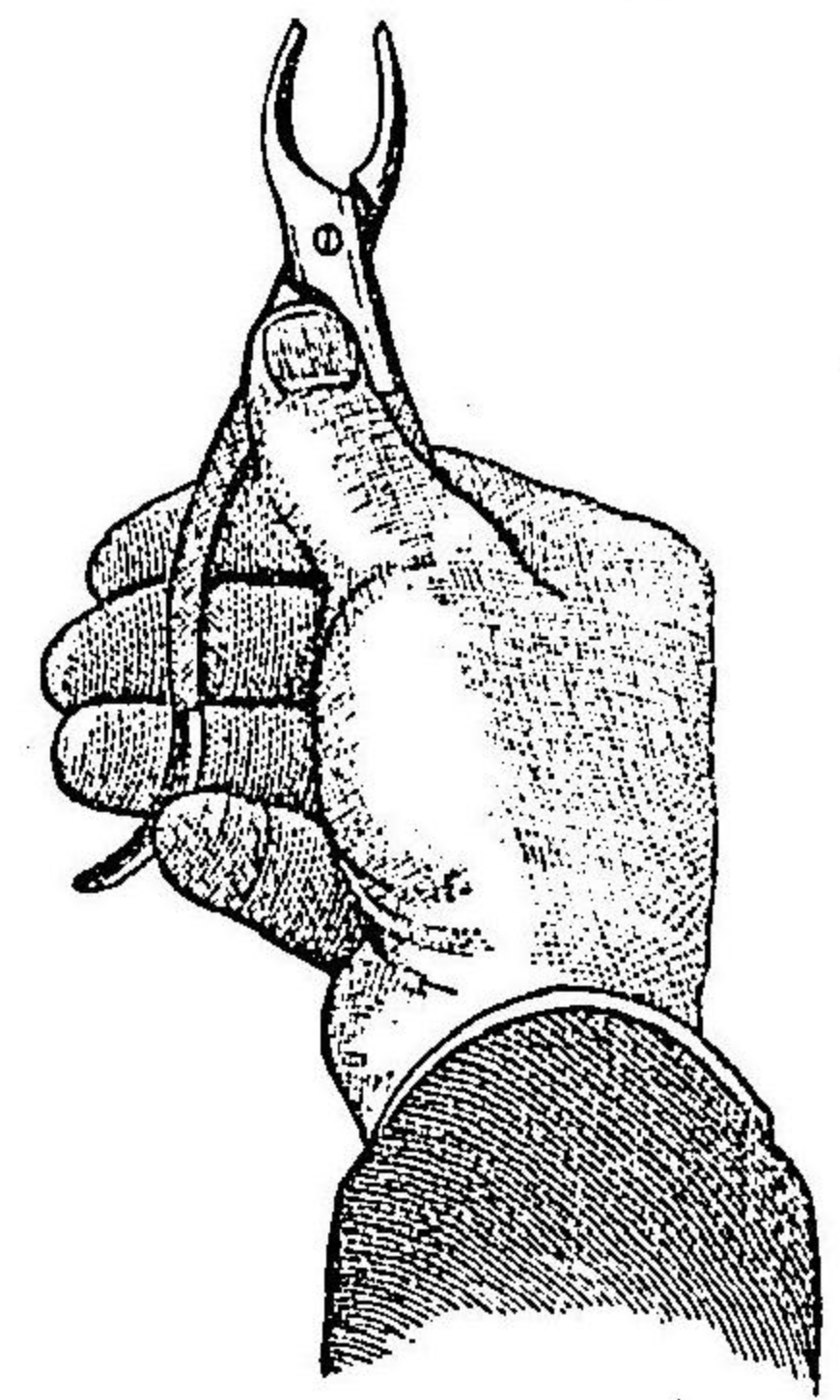
製ニ成リ刃嘴ヲ齒冠ニ鉗夾スルノ際、柄脚ハ齒槽突起ト直
角ヲナシ(第九圖)第二種ニ於テハ鉗用ノ際齒槽起線ト同一
線ヲ成セリ(第十圖)

把持法

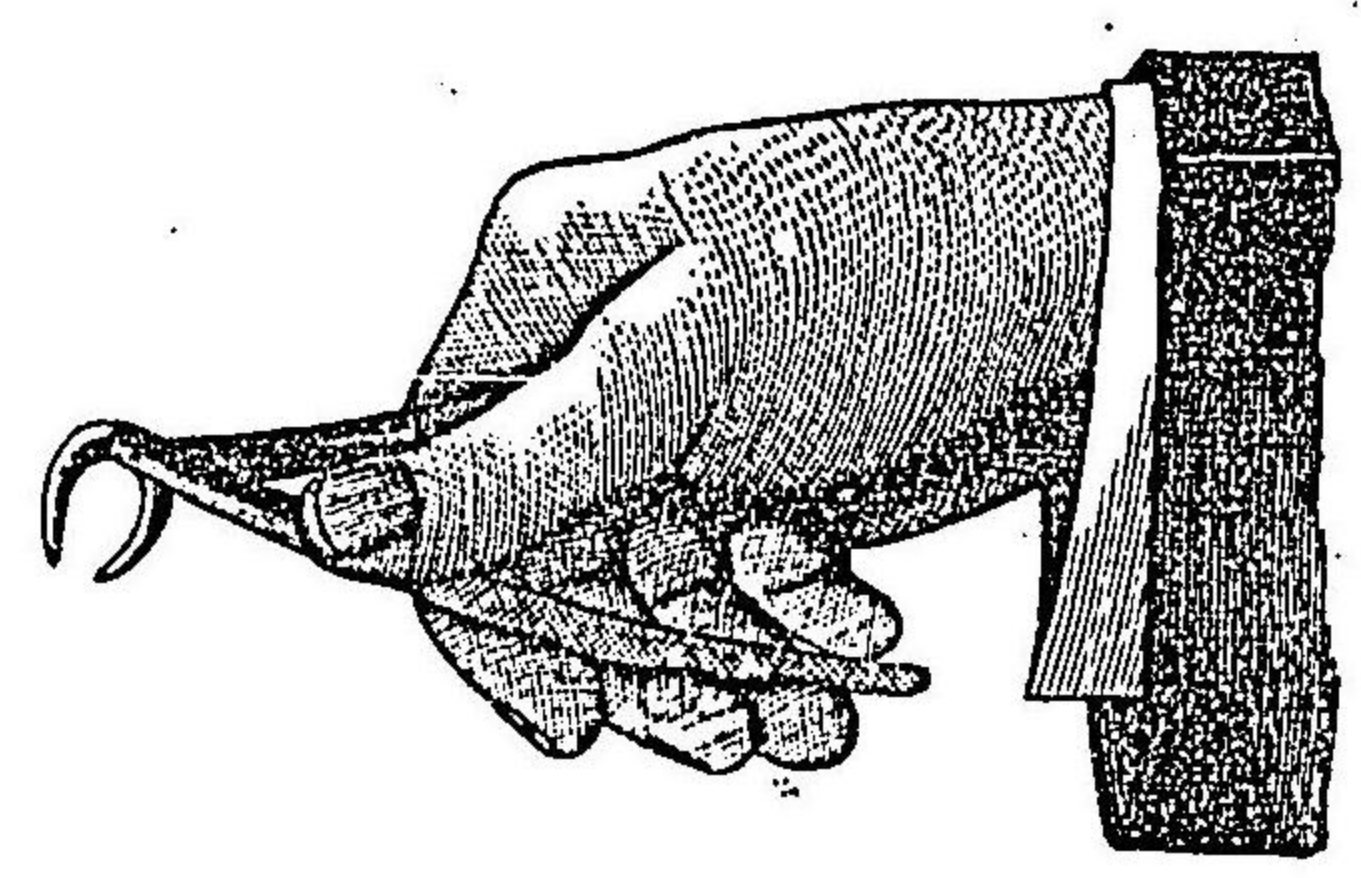
鉗子把持之圖

全

第十圖



第二十圖

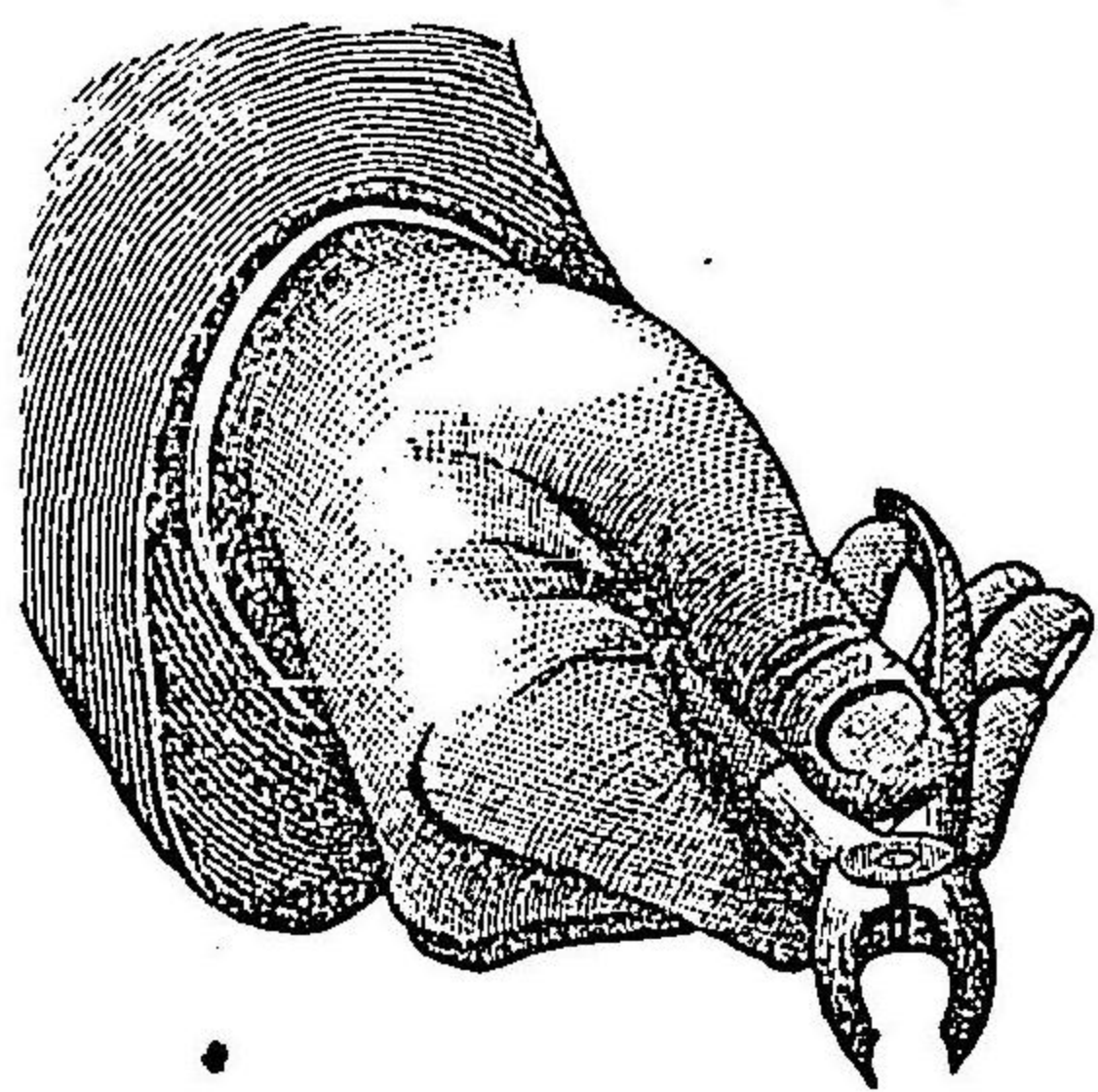


鉗子ヲ把持スヘキ状態ハ第十一、二十三圖ニ於テ示スカ如
ク充分柄脚ヲ掌面ニテ支ヘ且ツ他ノ脚端ハ掌面及ヒ掌丘
間ニ稽止セシムヘシ。而シテ手ハ
充分ニ力ヲ供給シ得ヘキ便宜ノ
位置ヲ取ラサルヘカラス
左圖ノ如ク拇指ヲ脚間ニ置ク

鉗子把持ノ圖

ハ其目的タル齒上ニ應用
スル鉗子ノ開閉ヲ自由ナ
ラシムルノミナラス刃嘴
ヲ深ク齒槽間ニ推進セシ
ムルノ主動者タラシムル
ニアリ。又齒牙ノ破碎ヲ防
カンカ爲メ筋肉或ハ拇指

第三十圖



挺子

ノ關節骨(不正方骨)ニ依リテ壓力ヲ妨碍セサル様注意シ豫
メ其柄脚間ニ拇指ノ丘頭ヲ止ムルヲ可トス何者若シ此注
意ヲ缺クキハ偶然齒牙ノ破碎ニ依リテ術者拇指ノ劇シキ
疼痛或ハ挫傷ヲ蒙ルノ虞ナシトセサレハナリ
挺子ハ二部ヨリ成ル柄子及ヒ刃嘴即チ是ナリ。而シテ柄

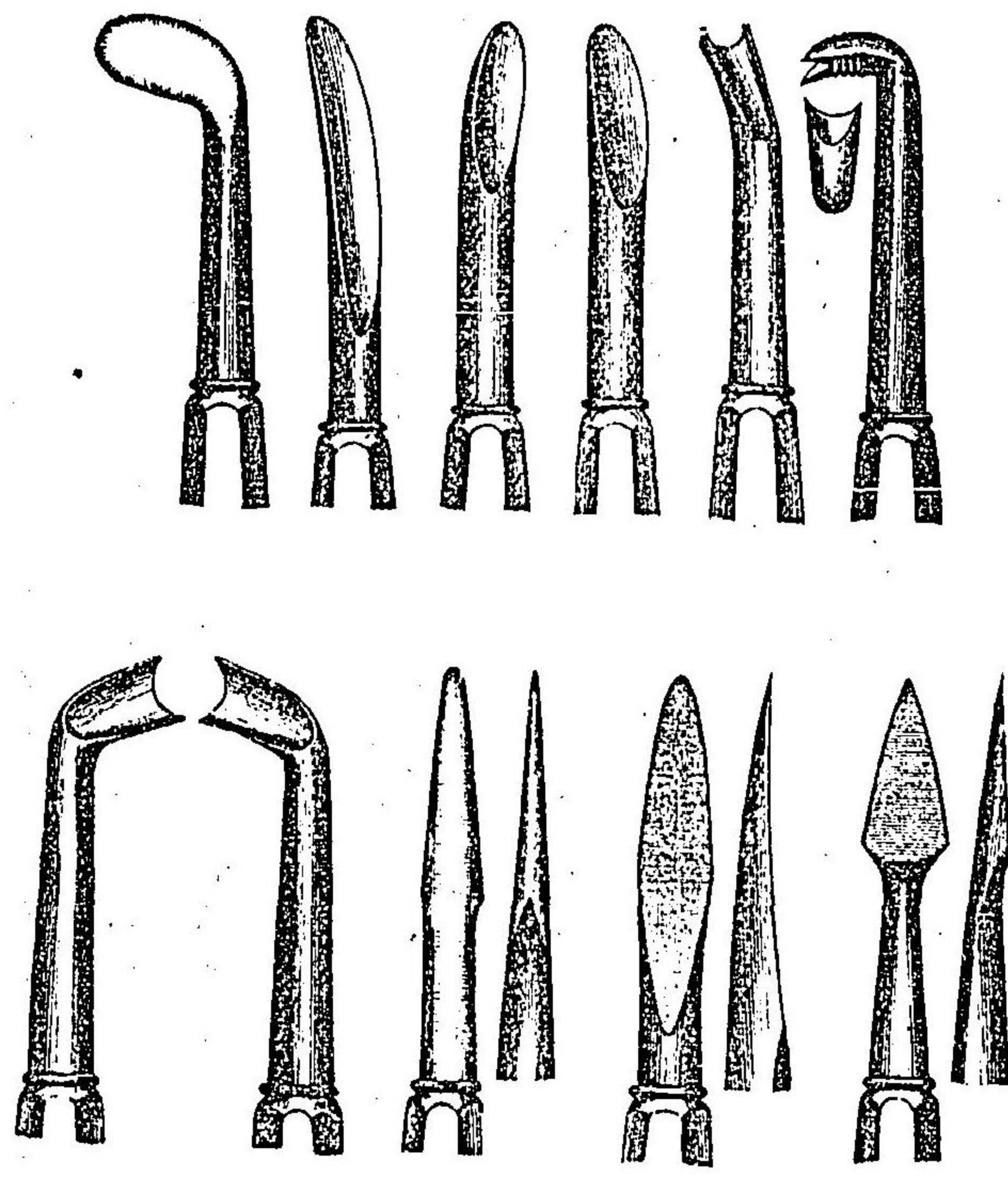
挺子ノ種類

子ハ常ニ木若クハ象牙ヨリ作り殆ト二吋ノ長サヲ有シ充
分掌中ニ把握シ得ヘキ適當ナル形狀ヲ成ス。又刃嘴ハ鍛鍊
シタル鋼鐵ヨリ製シ殆ト二吋ノ長サヲ有スルモノナリ
挺子ノ種類ヲ大別シテ二トナシ一ハ眞直ニシテ一ハ彎
曲セリ其前種ニ於テハ刃嘴ハ薄ク殆ト五分ノ一吋ノ幅ヲ
有シ一面凸隆シ他面ハ扁平ナルアリ。或者ハ兩面凸隆ナル
アリ或ハ一面凸隆シ他面ハ凹陷セルアリ又其嘴端ハ圓形
ナルアリ鎗狀ヲナスアリ。而シテ後種即チ彎曲セル挺子ニ
於テハ鋼鐵部ノ末端半吋ハ柄子ト殆ト直角ニ彎曲シ嘴端
ハ圓形ヲ呈シ或ハ彎形ヲ成セリ須ラク之ヲ第十四圖ニ徵
セヨ

其他挺子ニ種々ノ形狀ヲ有スルモノアリト雖モ皆其揆

挺子ノ圖

圖 四 十 第



挺子把持ノ圖

全

圖 五 十 第

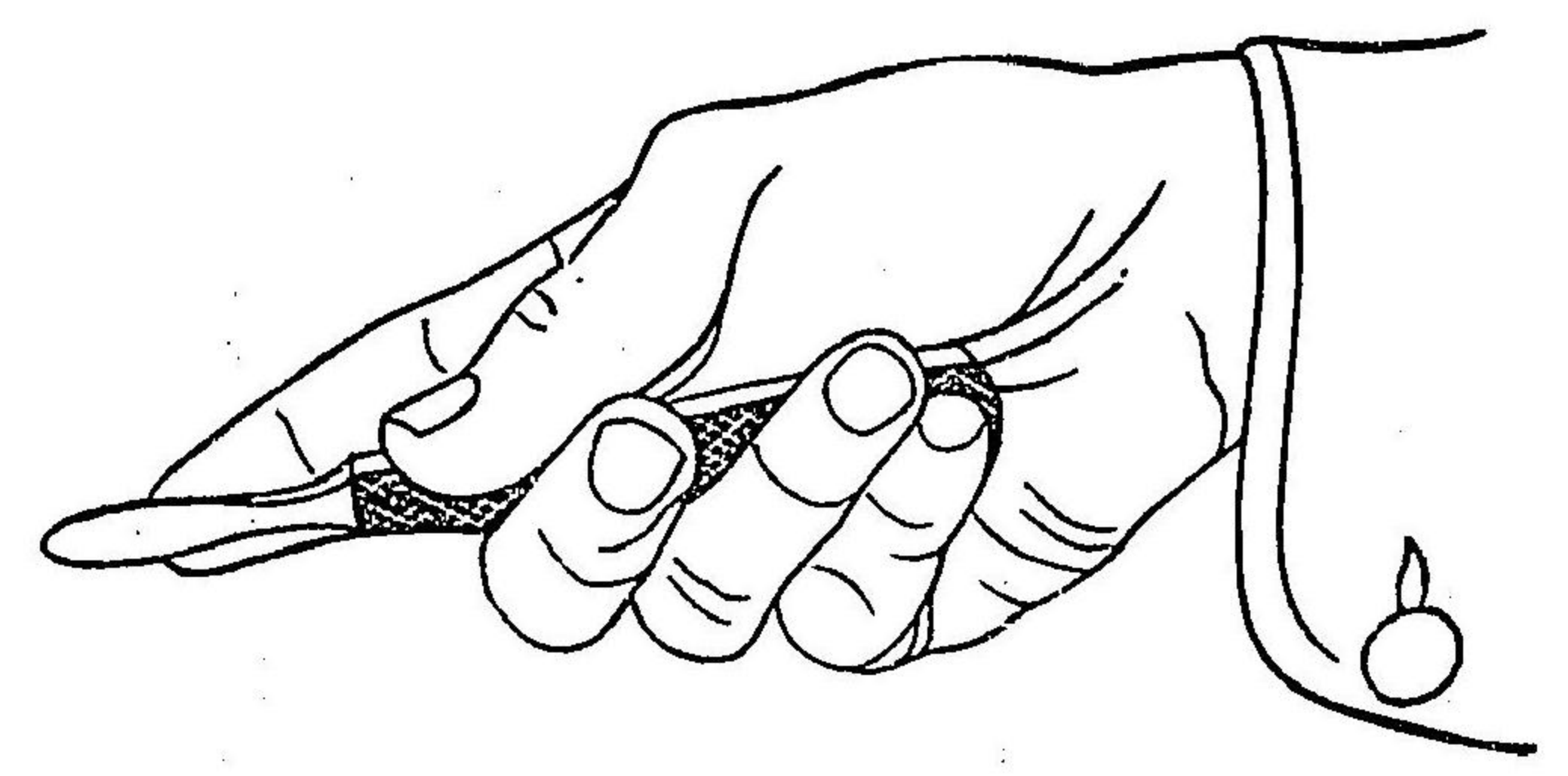
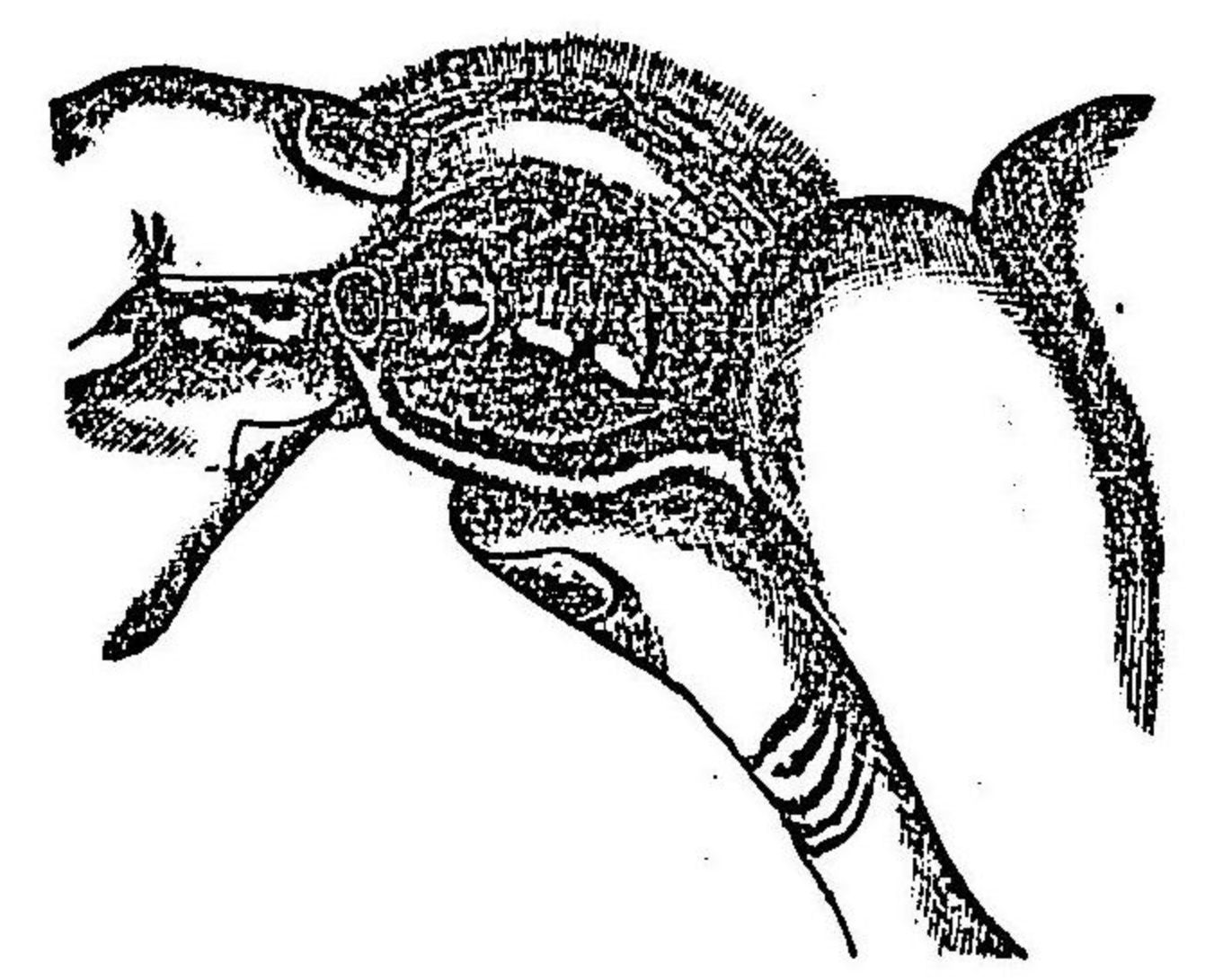


圖 六 十 第

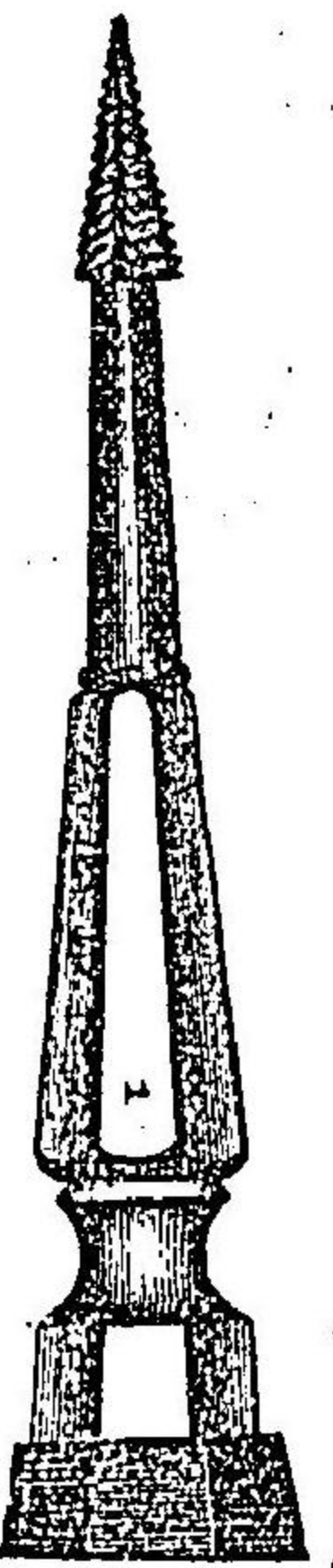


チ一ニスルヲ以テ敢テ玆ニ贅セス
 挺子ヲ把持スヘキ状態ハ之ヲ第十五圖ニ示セリ蓋シ柄
 子ハ充分掌面ニ確持シ第一指ハ刃嘴ニ沿フテ横へ且ツ器
 械ノ滑脱ヲ豫防センカ爲メ之ヲ其末端ニ近^ケ送致スヘシ。
 又或場合ニアリテハ左指ヲ以テ第十六圖ノ如ク保護スル
 ナ良トス

螺旋拔齒器

螺旋拔齒器ノ圖

圖七十第



螺旋拔齒器第十七、十八圖ハ使用スル稍、稀ナリト雖、深
 ク齒槽ニ埋没シタル齒根ヲ拔去スルニ須要ナリ即チ其尖
 端ヲ齒根管ニ螺入シ確乎タル支持ヲ得タル後チ除々ニ動

全

螺旋附鉗子

鍵子

圖八十第



搖旋回シテ齒根ヲ抽出スヘク。或ハ齒根ノ分裂スルニ至ル
 マテ其螺入ヲ持續シ次テ鉗子若クハ挺子ヲ以テ拔去スル
 ナ便トス

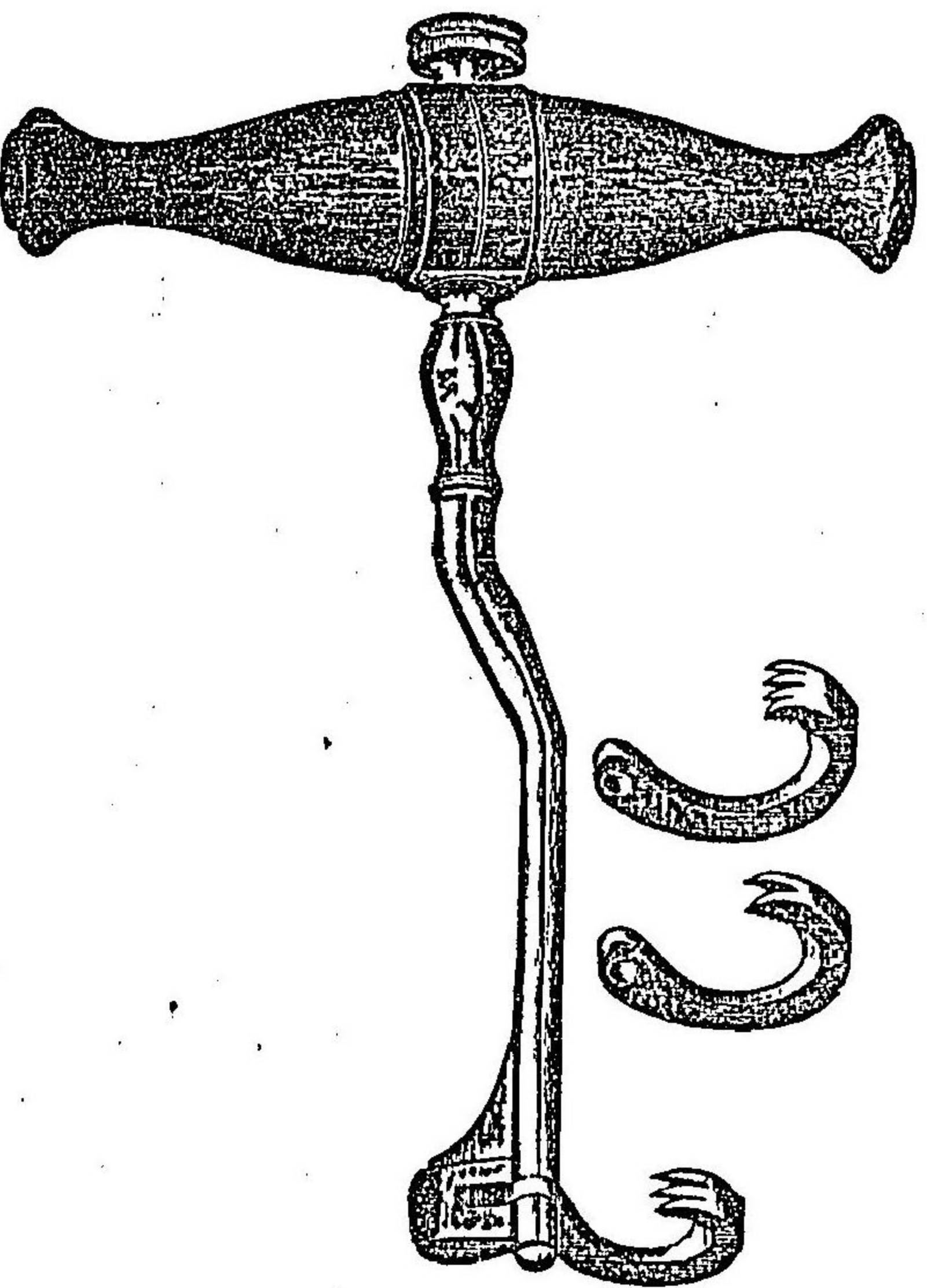
此他ダブス、ハリヘン兩氏ノ創意ニ成ル螺旋附鉗子アリ
 本器ハ螺旋子并ニ鉗子ニ様ノ目的ニ應用セラル、ノ便アリ

鍵子第十九圖ハ方今之ヲ使用スル者甚タ稀ナリト雖、
 尙ホ世上ニ殘存スルヲ以テ之ヲ説明ヲナス未タ必スシモ
 無益ニアラサルヘシ

蓋シ鍵子ハ把柄軸金枕金尖嘴ノ四部ヨリ成リ把柄ハ殆
ト三吋ニシテ軸ハ四吋ノ長サヲ有シ枕金ハ圓形ニシテ軸

鍵子ノ圖

圖 九 十 第



操作法

使用後ノ處置

ヨリ四分ノ三、一吋ノ長サヲ呈シ其厚度ハ二分ノ一吋ナリ。
又鈎ハ顎ノ外側ニ到達スヘキ長サヲ有シ且ツ充分ニ彎曲
シ力ヲ加フルノ際齒冠ニ抵觸シテ施術ヲ妨碍セサルヲ要
ス。而シテ鈎ハ第十九圖ニ示スカ如ク銳利ニシテ鍛質ナル
二箇或ハ三箇ノ尖端ヲ有スルモノナリ

其操作法ハ先ツ濕綿或ハ小布ヲ以テ枕金ヲ纏絡結紮シ
之ヲ内側ノ齒頸部ニ駐メテ支點タラシメ次テ尖頭ヲ外側
ノ齒頸部ニ當テ靜ニ軸ヲ内方ニ動カシ確固タル支持ヲ得
タル后直チニ其方向ニ反シテ力ヲ加ヘ以テ齒牙ヲ拔除ス
ルニアリトス

都テ此等ノ器械ヲ使用シタル后ハ悉ク其附着物ヲ清淨
シ充分ナル消毒ヲ施サ、ルヘカラス

第三章 施術ノ方法并ニ順序

鉗子ヲ以テ齒牙ヲ拔去スルニ方リ其手術ヲ三期ニ區別ス即チ

第一期 鉗子ヲ以テ齒牙ヲ鉗夾ス

第二期 膜ノ連繫ヲ斷チ且ツ齒槽ヲ擴張セシム

第三期 齒槽ヨリ齒牙ヲ抽出ス

第一期

第一期 ニ於ケル第一着ハ鉗子嘴端ヲ鉗定スルニアリ

而シ此際嘴端ヲシテ深ク齒牙齒齦間ニ推進セシムヘク意ヲ用ヒ且ツ齒根ノ長軸ト平行ニ鉗夾セサルヘカラス又鉗子ヲ鉗定スルニ方リ最初其最モ腐朽シテ外見ヨリ隠蔽セラレタル齒牙ノ側面ニ抵テ次テ他嘴端ヲ反對側ニ止ムヘ

キハ恰モ定則ノ如シトス斯ノ上顎ニアリテハ上方下顎ニアリテハ下方ニ可成的嘴端ヲ推進シ齒根ヲ確固ニ鉗夾セラル、ニ至ルマテ之ヲ持續スヘシ此際輕微ノ旋回運動或ハ動搖ヲ加フル時ハ其嘴端ノ推進ヲ援ク是レ最モ緊要ナル事項ニシテ施術ノ成否ハ蓋シ一ニ此操作如何ニ關スト謂ハサルヘカラス次ニ柄脚ヲ握閉シ嘴端ヲ以テ充分ニ齒牙ヲ鉗定シタル后力ヲ加ヘテ動搖ヲ始ムルニ方リ嘴端ノ滑脱セサル様注意シ且ツ力ヲ加フルノ際、拔去スヘキ齒牙ノ性質并ニ齒槽突起ノ抵抗度即チ齒牙骨植ノ度如何ヲ觀察スヘシ又豫メ拇指ヲ脚間ニ夾置シ以テ齒根ニ加フル握力ヲ制御セシメ及ヒ齒牙ノ破碎ヲ來シテ后手術ヲ困難ナラシムルカ如キヲ防カサルヘカラス

第二期

第二期 連繫膜ヲ離斷シ齒槽ヲ擴張セント欲セハ力ヲ側方ニ加フルカ或ハ旋回運動ヲ施スニ依リテ其目的ヲ達スルヲ得ヘシ。蓋シ此等ノ運動ハ拔去スヘキ齒根ノ形狀、位置、方向并ニ其周圍ニ於ケル硬織質ノ抵抗度如何ニ關スルモノニシテ旋回運動ノ如キハ單ニ圓錐根ヲ有スル齒牙ニ於テ施スヘキモノナリトス

第三期

第三期 ハ齒牙ノ軸線ニ沿ヒ其抵抗ノ微弱ナル部位ヲ擇ヒ牽引力ヲ加ヘテ抽出スルニアリ。蓋シ其抗抵ノ強弱ヲ知ルニハ豫メ齒槽突起ノ解剖ニ通曉スヘキハ勿論ナリト雖モ鉗子ヲ通シテ手指ニ傳達スル感覺ノ如何ニヨリ之ヲ判定スルヲ得ヘシ

挺子ノ使用法

眞直ナル挺子ヲ以テ齒牙ヲ拔去セント欲セハ次ノ方法

ニ據ラサルヘカラス即チ拔去スヘキ齒面ニ沿ヒテ刃嘴ノ扁平面若クハ凹陷面ヲ抵テ齒齦并ニ齒槽突起間ニ推進シテ可成的其下底ニ達セシメ次テ柄子ヲ齒面ニ反シテ捻轉スレハ槓杆作用ニ依リ齒牙ハ漸々槽内ヨリ挺舉スヘシ。但シ通常ハ斯ノ如ク一回ノ操作ニヨリテ容易ニ拔齒シ得ヘシト雖モ時トシテ二回或ハ三回嘴端ヲ其齒根端ニ近接シテ施サ、ルヘカラサルコトアリ。而シテ支點ヲ定ムルニ方リテハ最モ強固ナル齒槽縁ヲ擇マサルヘカラス即チ上顎ニアリテハ内側、下顎ニアリテハ外側ヲ可トス然レモ齒牙ノ形狀骨植ノ如何ニ因リテ必シモ斯ル規定ニ拘泥スヘキニアラス。時アリテ又隣齒ヲ以テ支點トナスコトアリ此際ハ之ヲシテ損傷弛緩セシメサル様注意シ且ツ布片ヲ以テ其齒冠

拔牙后創口ノ癒着

チ覆ハサルヘカラス
 彎曲挺子ノ操作法ハ下顎大白齒根拔去法ノ條下ニ於テ
 説明スヘシ
 拔牙ニ因リテ常ニ生スル傷害ハ裂傷ナレモ是ハ肉芽ノ
 發生ニヨリテ癒合スヘク。又拔牙后ノ齒槽ニアリテハ凝血
 ナ以テ栓塞セラレ次テ其中ニ胎生的細胞發生スルト同時
 ニ栓塞物ハ漸々吸收セラレテ血管チ有スル肉芽ト交代ス
 此血管ハ復ヒ減少シ尋テ骨質ノ穗狀體及ヒ小挺狀體ノ發
 生チ見ル而シテ齒槽縁ハ吸收セラレテ其側壁相近接シ且ツ
 齒槽底ニ於テハ海綿狀骨質チ形成シ各漸次ニ接近シテ一
 體トナリ齒齦ハ蔓延シテ其面チ被ヒ遂ニ癒着スルニ至ル
 モノナリ

創口ノ癒着

口洗劑トシテ左ノ邊
 方ハ有効ナリ
 和蘇亞斯液 六分
 結晶石炭酸 二分
 水 八分
 半杯ノ湯ニ全劑一
 茶匙チ加フ

創口チ所置スル最良法ハ異物ノ滯留チ防キテ可及的其
 部ノ清潔チ保ツニアリ而シテ此目的チ以テ一日數回防腐
 的の口洗劑チ使用スヘシ。蓋シ上顎ニアリテハ其槽口ヨリ漏
 出スル血液ハ重力ニ依リテ自然ニ排泄セラルト雖モ下顎
 ニ於テハ動モスレハ槽内ニ膿膿スルコトアルチ以テ數防腐
 液チ注射シテ洗滌スヘク又必要ノ際ハ防腐劑ニ浸シタル
 綿球チ以テ槽窩チ栓塞セサルヘカラス

術者并患者ノ位置

第四章 上顎齒牙并ニ齒根拔去法
 上顎ニ施術スル際ハ先ツ患者チシテ堅牢ナル椅子ニ凭
 ラシメ頭チ后方ニ傾ケ若クハ垂下セシメ或ハ體チ水平ノ
 位置ニ保チ頭チ枕上ニ固定セシムヘシ。而シテ上顎左側齒

上顎左側施術ノ圖

圖 十 二 第



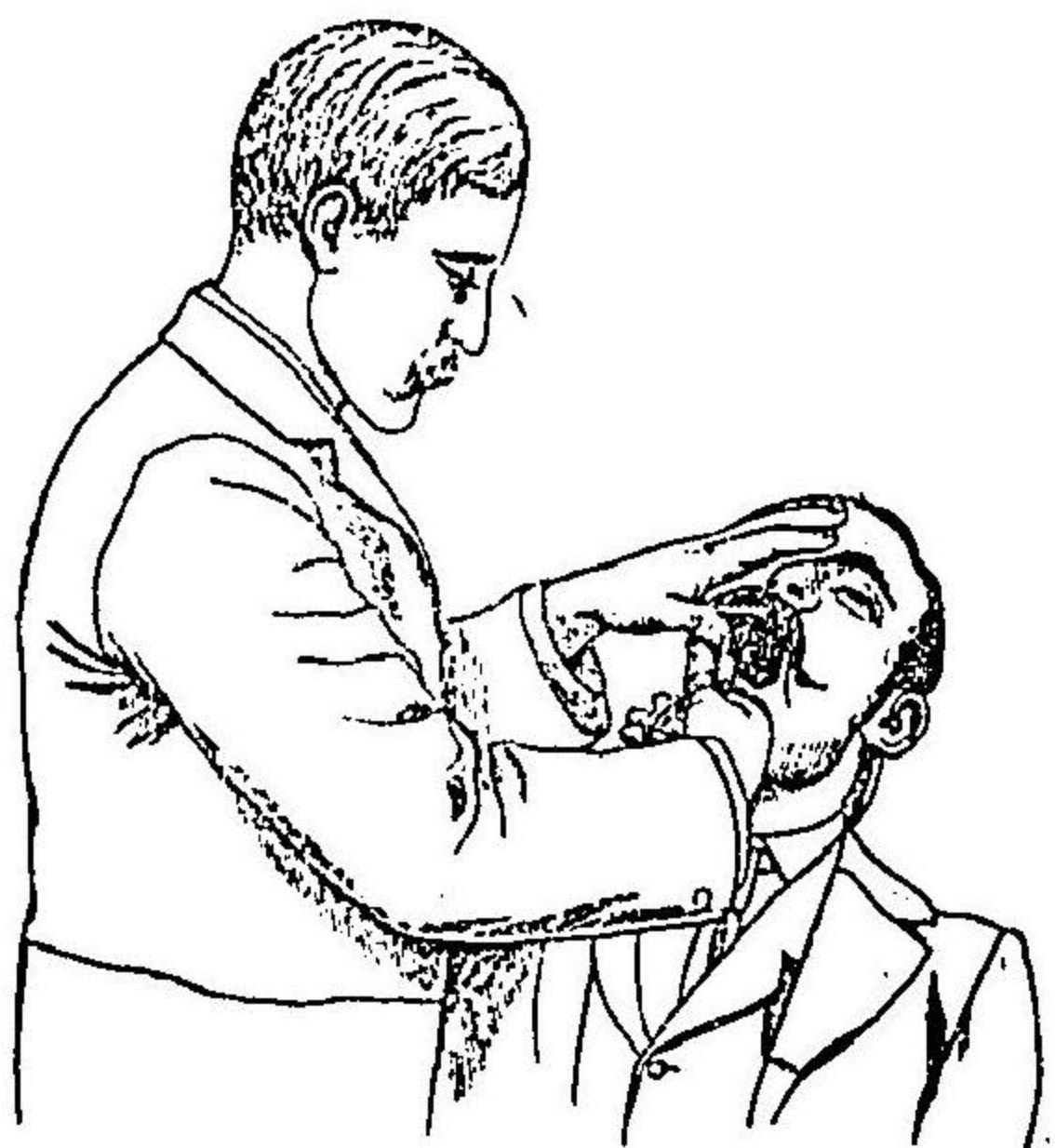
牙拔去ノ時ニ於テハ術者ハ患者ノ右側并ニ稍前面ニ立チ額上ニ左手ノ小指ヲ當テ食指ヲ口内ニ送入シテ頰或ハ唇部ヲ擴張シ拇指ヲ齒槽突起ノ内側ニ措キ又機ニ臨ミ腕ヲ以テ頰部ヲ圍擁シ之ヲ固持セシムルモ可ナリ(第二十圖)
上顎右側ノ施術ハ敢テ前法ニ異ナラスト雖モ術者ハ少シク患者ノ前面ニ立チ

上顎右側施術ノ圖

上顎前齒拔去法

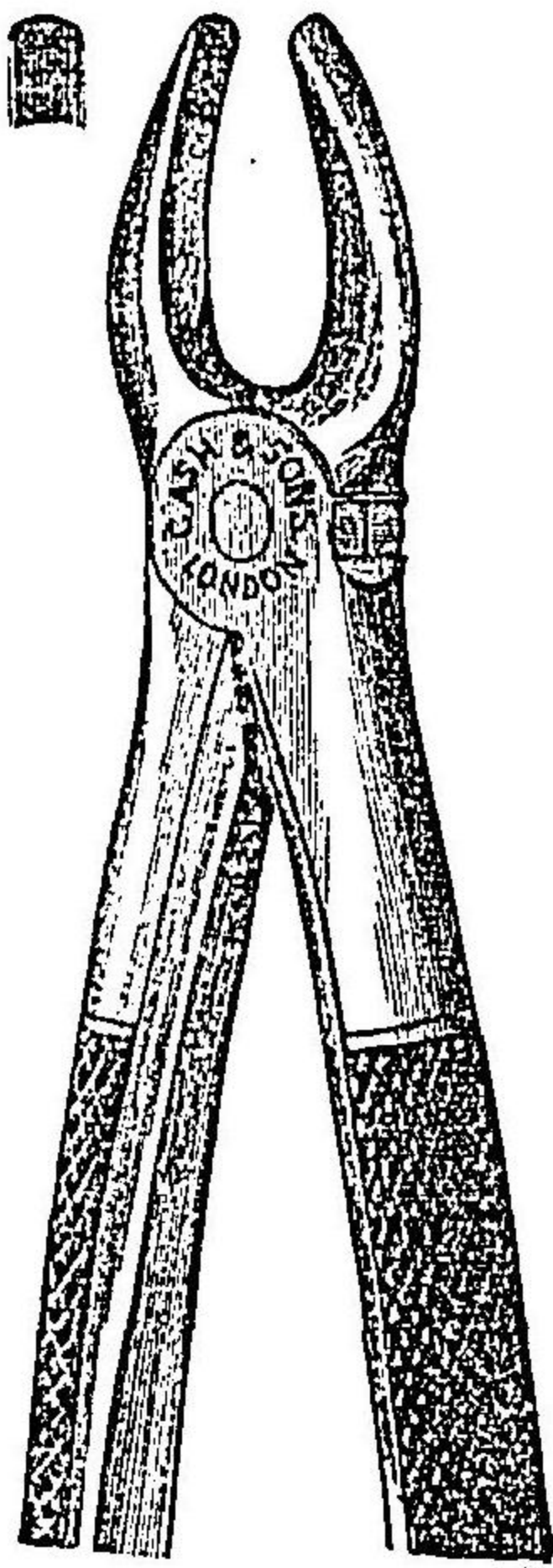
左手ノ拇指ヲ以テ頰部ヲ擴張スヘシ(第二十一圖)而シテ時アリテ食指ヲ以テ頰部ヲ擴張シ拇指ヲ頰下ニ抵ルモ亦可ナリ

圖 一 十 二 第



(甲)上顎前齒 上顎前齒并ニ側前齒ノ根ハ常ニ圓錐狀ヲ成シ其前面ハ后面ニ比シテ弧形較大ナリ故ニ鉗子刃嘴ノ形狀モ亦之ニ準シテ製作セラル(第二十二圖)側前齒根ハ中前齒根ヨリ小ニシテ時トノ稍扁平

上顎前部齒用鉗子



圖二十二第

狀ヲナセリ。而シテ此等ノ齒牙ヲ拔去セント欲セハ先ツ鉗子ノ后嘴ヲ口蓋根面ニ抵テ之ヲ齒槽内ニ推進シ次テ口蓋面ニ向ヒテ確然タル内方運動ヲ施シ更ニ外方運動ヲ加フヘシ然レモ若シ此方法ニシテ成効セサルモハ始メ右へ次ニ左へ向ケテ旋回運動ヲ試ムルヲ可トス此旋回ノ度ハ齒根周圍ニ於ケル弧形ノ殆ト八分ノ一ヲ以テ足レリ蓋シ此等齒牙拔去ノ始メニ方リテハ旋回運動ヲ施スヲ常トスレモ予ハ始メニ内方運動ヲ施スノ方式ヲ以テ拔齒容易ニシテ

全齒根拔去法

且ツ軟組織ノ裂傷ヲ蒙ルト尠ナルヲ得ヘキノ最良法ナリト信ス

該齒根ノ拔去ハ困難ヲ感スルモノニアラス宜シク第十二圖ニ示スカ如キ鉗子ヲ使用スヘシ若シ齒根ニシテ甚シク朽損シタル時ハ充分ニ嘴端ヲ齒齦縁下ニ送入スヘシト雖モ斯際刃嘴ノ微小ナルモノヲ擇マハ手術最モ容易ナリトス。而シテ其方法ハ全齒冠ヲ有スルモノニ於ケルト敢テ異ナルヲナシ

上顎犬齒拔去法

〔乙〕上顎犬齒 ハ前齒ト均シク單根ニシテ前後面弧形ノ差甚タ大ナリ。又齒根ハ丈々長ク且ツ確固ニ骨植スルヲ以テ拔去スルニ方リ尤モ強力ヲ要ス。而シテ鉗子ハ前齒用ニ彷彿タルモノヲ用ヒ拔齒ノ際ハ始メ力ヲ内方ニ加ヘテ膜

ノ連繫ヲ遮斷シ終リニカキ外方ニ施スヘシ。蓋シ此齒根ハ
 稍三角形ヲ呈スルヲ以テ旋回運動ヲ避ルヲ良トス
 該齒根ノ拔去ハ全冠齒ヲ拔去スルト同法ヲ以テ施スヲ
 得ヘシ

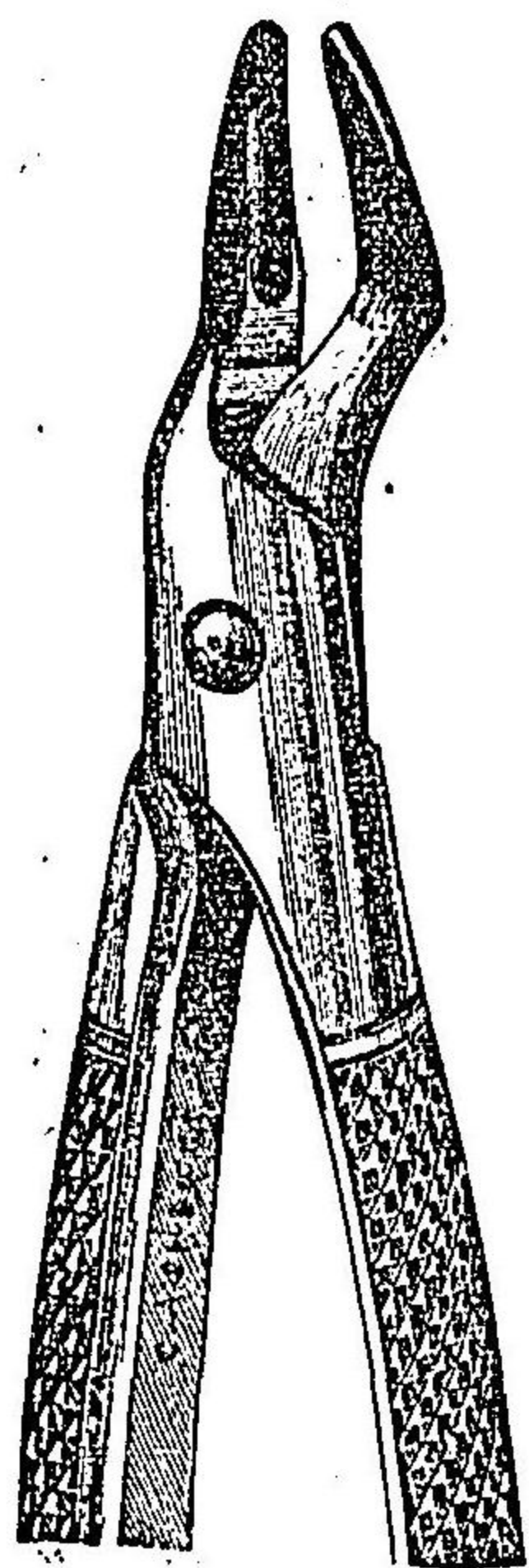
上顎小臼齒拔去法

〔丙〕上顎小臼齒 ハ概ネ扁平ニシテ其近心隔心面ニ於テ
 縱溝ヲ成セル一根ヲ有シ若シ此溝渠ニシテ顯著ナル時ハ
 齒根ヲ兩箇ニ分岐スヘシ。然レモ施術前ニ其分岐スルヤ否
 ヤヲ斷定スルハ頗ル困難ニシテ且ツ半途手術ノ方法ヲ變
 更スル能ハサルヲ以テ豫メ分岐シアルモノト假定シ側方
 運動ハ尤モ温和ニ施サ、ルヘカラス何トナレハ此際強力
 ナ用ユル片ハ爲メニ齒頸ヨリ拆斷セラル、ト往々之アレ
 ハナリ。而シテ根ノ内外面ハ共ニ同一ノ弧形ヲ呈ス

全齒用鉗子

上顎小臼齒用鉗子ノ圖

第二十三圖



第二小臼齒ハ單根ヲ有スルヲ常トシ第一小臼齒ノ如ク
 前後經ニ於テ扁平ナラス且ツ齒根ノ縱溝或ハ分岐ヲ有セ
 サルヲ多シトス
 小臼齒用鉗子ノ嘴端ハ齒根ノ弧形ト同一ノ弧度ヲ有シ
 且ツ柄脚ニ依リ下唇ヲ保護センカ爲メ刃嘴ハ直角ニ彎曲
 セサルヘカラス第二十三圖ニ示セル鉗子ハ即チ是ナリ。而
 シテ上顎小臼齒ヲ拔去セント欲セハ先ツ鉗子刃嘴ヲ齒牙
 ニ抵テ齒槽トノ連繫ヲ斷絶セシメンカ爲メ始メ微ニ内方

運動ヲ試ミ次テ一ノ外方運動ヲ施スヘク。斯ノ如クスルモ
尙ホ齒槽ヲ擴張スル能ハスンハ再ヒ内方運動ニ加ヘテ外
方運動ヲ施スヘシ若シ必要アラハ之ヲ反復スルモ亦妨ケ
ナシトス。然レ齒槽ヨリ齒牙ヲ抽出セントセハ須ラケ外下
方ニ牽引セサルヘカラス。又茲ニ一ノ注意ヲ要スヘキモノ
アリ即チ内方ニ加フルカハ外方ニ用ヒルカニ比シ比較的
小ナラサルヘカラサルコト是ナリ

全齒根拔去法

同齒根ハ全部齒冠ヲ有スルモノニ於ケルト同一法ヲ以
テ拔去スルヲ得ヘシ

上顎大白齒拔去法

〔丁〕上顎大白齒 第一大臼齒ハ常ニ三根ヲ有シ一根ハ内
側口蓋板(硬口蓋)二根ハ外側(頰側)ニアリ而シテ三根中口蓋根
ハ最モ大ニシテ稍圓錐狀ヲ呈シ屢彎曲ス、二箇ノ頰根ハ前

全齒用鉗子

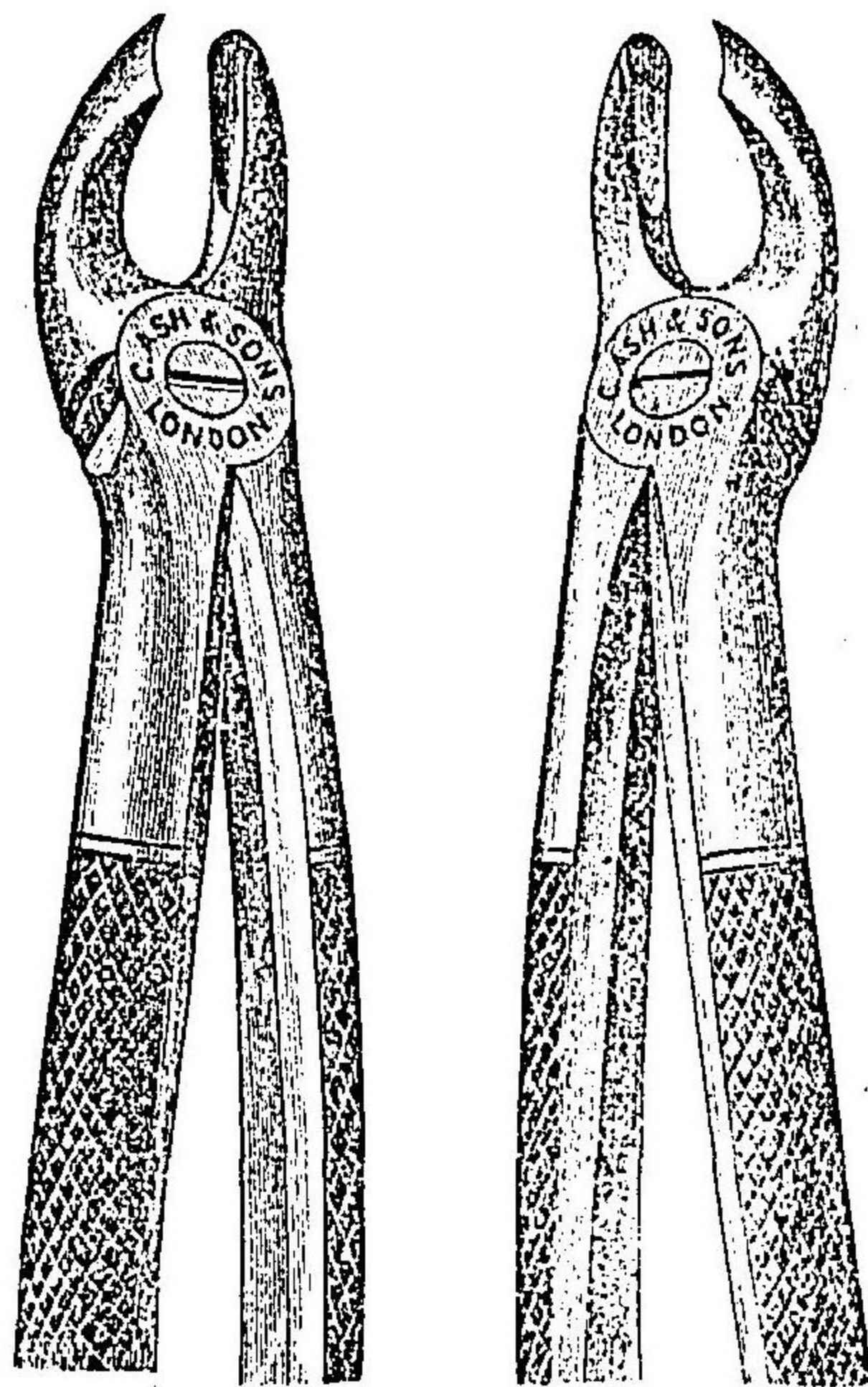
後ニ位シ后根ハ前根ヨリ稍内方ニアリ且ツ此二根ハ扁平
ニシテ前根ハ後根ニ比シ大ナリ。又第二大臼齒根ハ第一大
臼齒ト相若ケリト雖モ較小ナリ、亦第三大白齒ハ三根ヲ有
スヘキモノナレモ其多數ハ相癒合シテ圓錐狀ノ單根ヲ成
シ其尖端往々彎曲セリ

拔齒鉗子ハ齒根ノ排列如何ニ準シ上顎左側或ハ右側ニ
依リ各其形狀ヲ異ニセリ即チ刃嘴ノ外側(頰面)ハ二箇ノ縱
溝ヲ有シ其前溝ハ闊大ニシテ外方ニ鉗定スヘク且ツ充分
頰根ニ恰當セシメンカ爲メ溝渠中ニ一ノ微ナル隆起ヲ有
ス。内側(口蓋側)刃嘴ハ唯一ノ縱溝ヲ有スルノミ。而シテ完全
ニ製作セラレタル鉗子ハ精密ニ上顎永久第一大臼齒ノ頸
部ニ適合スヘク又其刃嘴ハ下唇ヲ排除センカ爲メ柄脚ト

上顎左側大白齒用鉗子ノ圖

上顎右側大白齒用鉗子ノ圖

圖四十二第



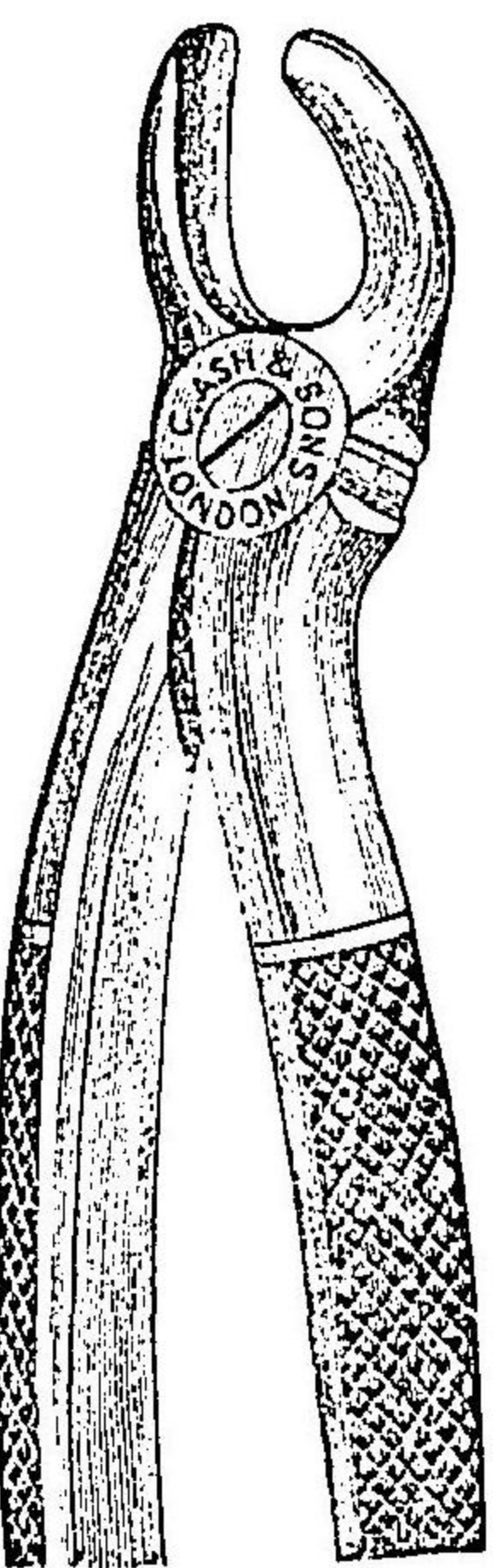
圖五十二第

直角ニ彎曲シ(第二十四五圖若クハ銃鎗狀ニ彎曲セサルヘカラス(第八圖)

拔齒ノ際ハ先ツ其口蓋嘴ヲ抵テ次テ外嘴ヲ送りテ頰根ニ適合セシメ可成的之ヲ齒槽内ニ推進シテ最初微ニ力ヲ

内方ニ用ヒ更ニ外方ニ加フ。若シ必要ニ臨マハ運動ヲ反復スヘク后チ外下方ニ牽引シテ槽内ヨリ齒牙ヲ抽出スヘシ。蓋シ此際過度ノ外方運動ヲ施ス片ハ齒牙ヲ拆碎シ或ハ齒槽外壁ノ破壊ヲ將來スヘキヲ以テ注意スヘシ。第三大白齒ヲ拔去スルニ方リテハ患者ヲシテ濶ク開口セシムヘカラス然ル片ハ能ク頰筋ノ緊張ヲ減シテ齒牙ノ外側ヲ明視シ得ヘシトス。又鉗子ノ鉗定ニ方リテハ最モ注意ヲ加フヘキモノニシテ若シ之カ注意ヲ缺ク片ハ刃嘴并ニ齒面間ニ軟組織ノ一部ヲ夾ミ爲メニ劇痛ノ裂傷ヲ將來スヘキナリ。而シテ拔去ノ際始メニ力ヲ内方ニ用ヒ次テ外方ニ加フル片ハ常ニ齒牙ヲ弛緩シ得ヘク終リニ外下方ニ牽引シテ之ヲ抽出スヘシ

第二十四五圖ニ示スカ如キ鉗子ハ亦第三臼齒ノ拔去ニ應用シ得ヘシト雖モ多數ノ術者ハ均一ナル弧狀嘴ヲ有スル鉗子ヲ實用ス(第二十六圖)



茲ニ一ノ不正ナル上顎大白齒アリ此齒牙ニ於テ頰后根ハ前根ヨリ著シク内側ニ位セリ換言スレハ普通ノ形狀ヨリ大ナルモノアリブリス、ヒールサル氏ハ之ヲ不正根ヲ有スル齒牙ト命名シタリ(第二十七圖)斯ル歪形根ハ第三臼齒ニ最モ多ク第二大臼齒之ニ亞キ第一大臼齒ニハ甚々稀ナ

上顎智齒用鉗子ノ圖

不正形齒根ノ圖

第二十七圖

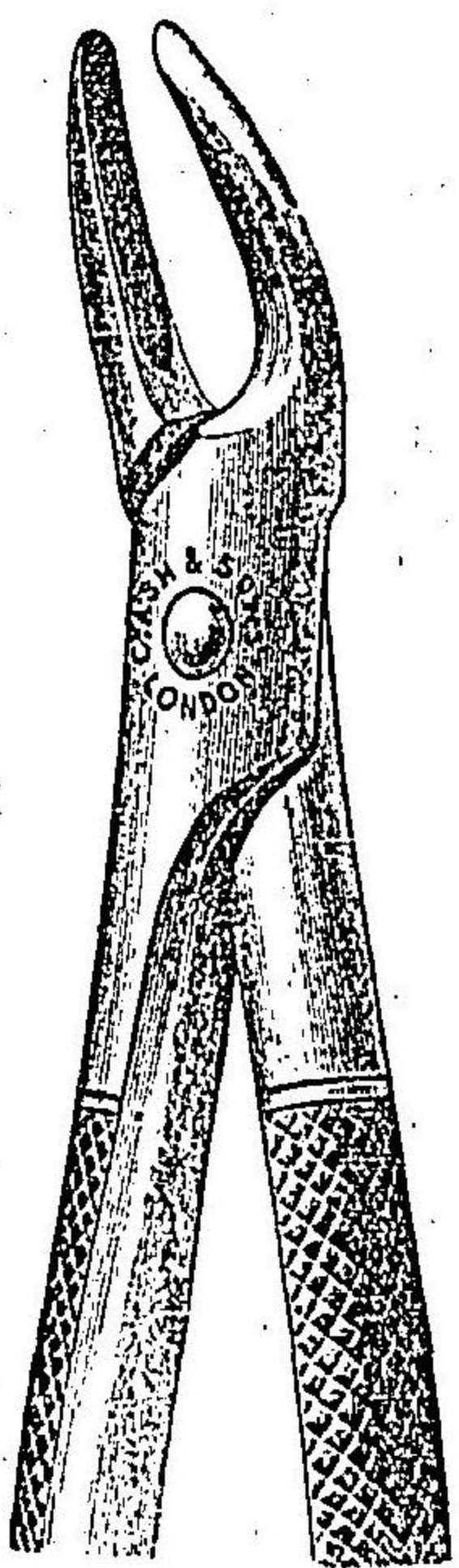


リ。而シテ此等齒牙ヲ拔去スルニ方リテ遭遇スル困難ハ鉗子鉗定ノ際其外嘴ノ滑脱スヘキ傾向ヲ有スルニアリトス。蓋シ歪根ヲ有スル齒牙ハ齒冠ノ形狀并ニ屢其頰前根上ニ位スル齒槽突起ノ不正ナル隆起ヲ現ハストニ依リテ豫想スルヲ得ヘク且ツ第二十六圖ノ如キ鉗子ヲ以テ能ク拔去シ得ヘシ

下顎朽損齒拔去法

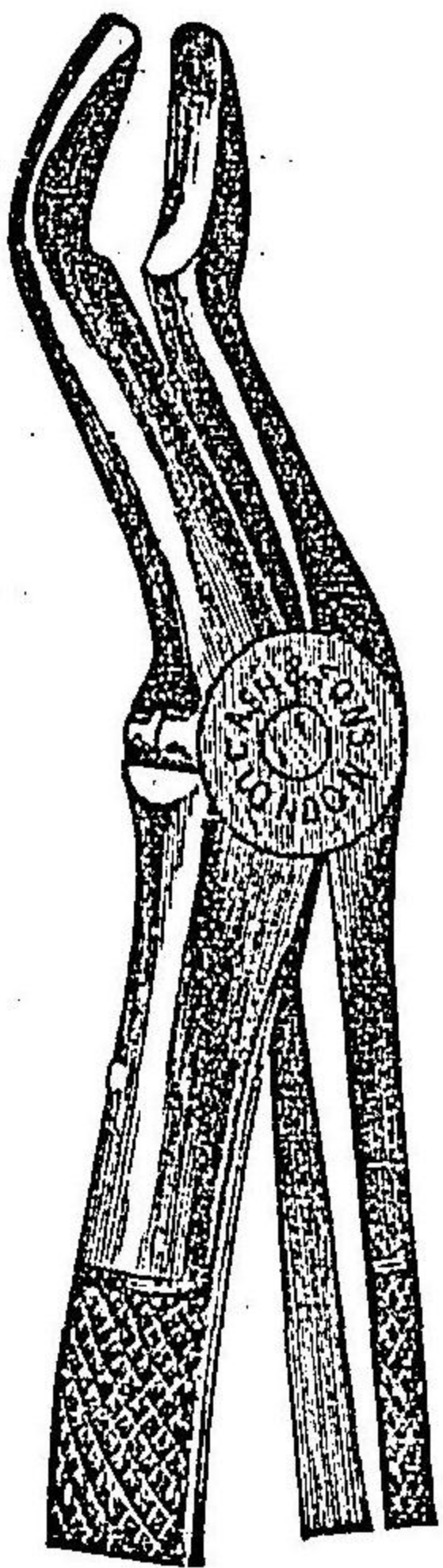
齒牙ノ腐蝕ハ頰面或ハ舌面ノ齒齦線下ニ波及シ僅ニ齒冠ノ一部殘存スル際ニハ普通ノ大白齒用鉗子ヲ捨テ、齒根鉗子ヲ採用スヘク其有用ナルモノハ第二十三、二十八、二十九圖ニ之ヲ示セリ。斯ル齒牙ヲ拔除スルニ方リテハ宜シ

上顎齒根用鉗子ノ圖



圖八十二第

全嘴狀鉗子ノ圖



圖九十二第

ク左ノ法ヲ襲用スヘシ即チ今假リニ齶齒ハ口蓋面ニ於テ深ク侵蝕セラレタリトセヨ然ルハ先ツ其鉗子ノ一嘴ヲ齒牙ノ頰根即チ最モ堅牢ナリト考定スル齒根ニ抵テ次テ内嘴ヲ口蓋根ニ措キ除々ニ之ヲ齒槽内ニ推進シ確實ニ齒

根ヲ鉗夾スルニ至ルマテ其壓入ヲ持續シ後内嘴ノ口蓋板ヨリ稍上方ニ達スルマテ力ヲ内方ニ試ミ更ニ外方運動ヲ施スヘシ但シ此際其鉗夾確固ナラサルハ刃嘴ハ齒根面上ヲ滑過スルノ傾向アルヘシト雖モ全冠ヲ有スル大白齒ヲ拔去スル場合ノ如キ過度ノ力ヲ用ユヘカラス斯シテ可成的主力ヲ内方ニ加ヘテ齒根ノ弛緩スルニ至ルマテ内方運動ヲ反復スヘシ

若シ頰面甚シク齶蝕セル時ハ其拔去法モ少シク前法ニ異ナラサルヲ得ス即チ最初刃嘴ヲ口蓋面ニ抵テ次テ外嘴ヲ尤モ強固ナリト考定スル頰根ノ何レカニ据ヘ柄脚ヲ握閉スヘシ而シテ拔去力ハ先ツ之ヲ外方ニ施シ次テ内方ニ加ヘ必要ノ際ハ此運動ヲ反復シ且ツ楞損尤モ甚シキ根面

全齒根拔去

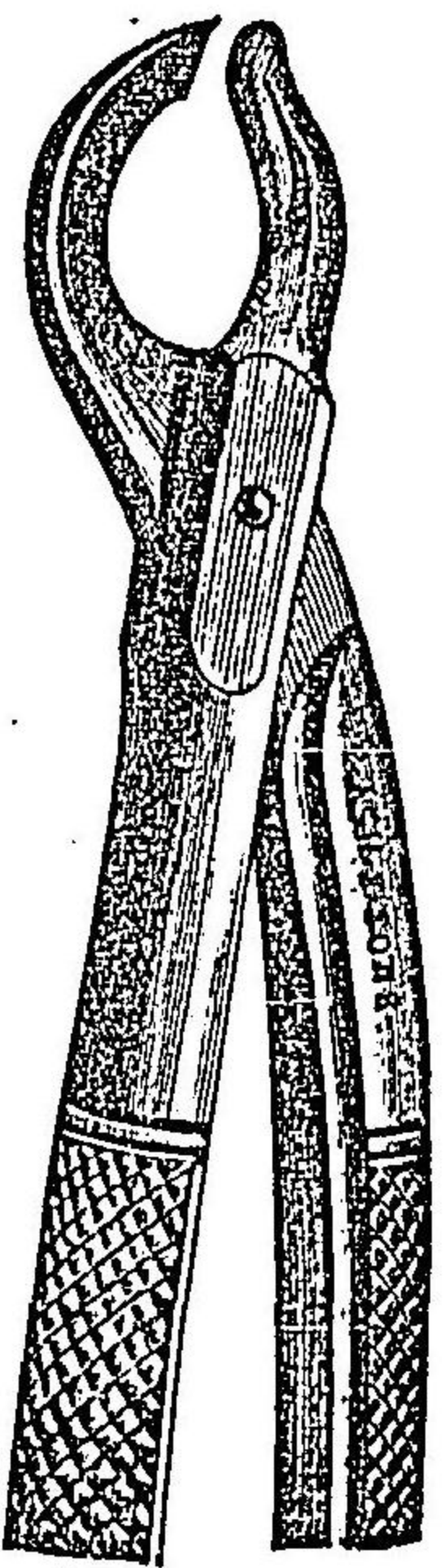
ヨリ器械ノ滑脱スルヲ防カンカ爲メ主トシテ力ヲ外方ニ用ヒサルヘカラス

齒冠殆ト朽損シ根部ハ尙ホ結合セル大白齒ヲ有スル時ハ齒根鉗子ヲ使用スヘク此際ハ初メ内嘴ヲ口蓋根ニ抵テ次テ外嘴ヲ最モ堅牢ナル頰根上ニ置キ内方運動ニ兼ネテ外方運動ヲ施シ可成的力ヲ脆弱ナリト考定スル齒根ノ方向ニ加フル様注意スヘシ而シテ斯ル齒牙ニアリテハ概ネ一時ニ三根ヲ併セテ拔去セサルヘカラスト雖モ若シ困難ナル時ハ其一箇或ハ二箇ヲ拔除シ然ル后チ其殘根ヲ拔去スレハ手術甚タ難カラストス

抗抵力甚タ大ナル齒根ヲ有シ通常ノ鉗子ヲ以テ拔去シ能ハサル時ハ第三十圖ニ示スカ如キ外嘴ヲ有スル鉗子ヲ

全齒根鉗子ノ圖

圖 十 三 第

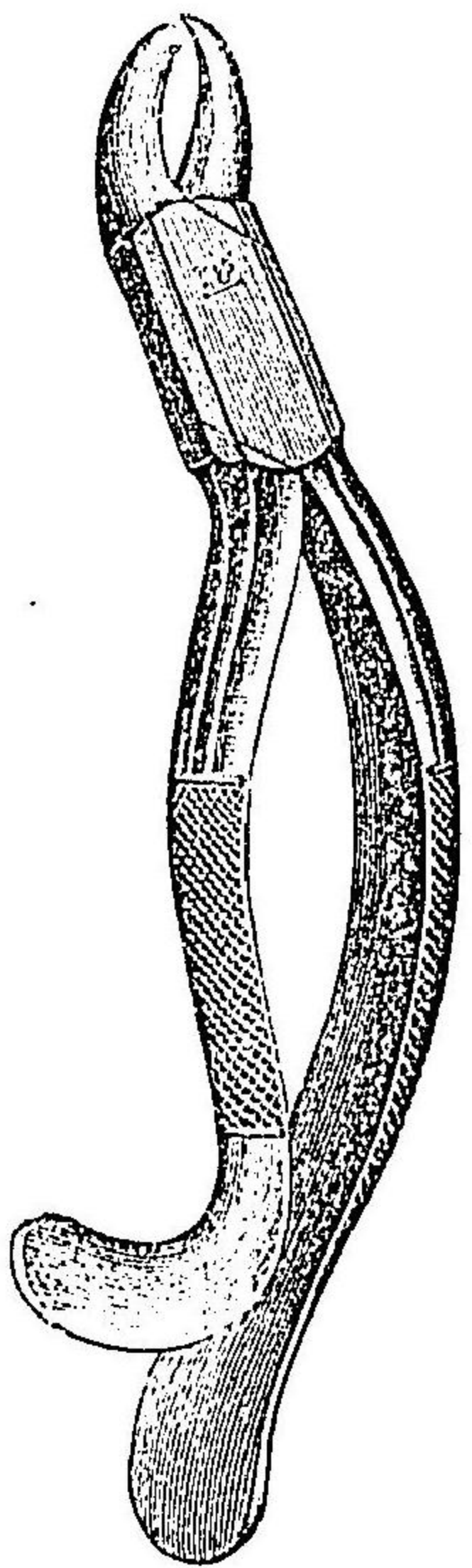


使用スヘシ蓋シ之カ使用ノ際ハ先ツ内嘴ヲ口蓋面ニ抵テ次テ可成的外嘴ヲ頰根ノ間ニ挿入シ其充分攫持セラル、チ俟チ力ヲ内外方ニ加フルニアリ。若シ此法ヲ用ヒテ失錯アラハ鉗子柄脚ヲ緊握シテ齒根ヲ分裂シ其分離シタル頰根間ニ尖銳ナル外嘴ヲ通過セシメテ口蓋根ニ當テ以テ力ヲ加フレハ容易ニ拔去スルヲ得ヘク後チ頰根ハ普通ノ上顎齒根用鉗子ヲ以テ箇々ニ之ヲ除クヲ得ヘシ
齒根仍ホ結合シテ固ク骨植セル時ハ又第三十一二圖ノ

如キ牛角狀鉗子ヲ以テ輒ク拔去スルヲ得ヘシ即チ其内嘴
ヲ口蓋根ノ槽内ニ推入シ牛角狀嘴ヲ頰根分歧面上ニ抵テ
柄脚ヲ握閉スレハ尖嘴ハ齒齦并ニ齒槽壁ヲ穿通シテ齒根

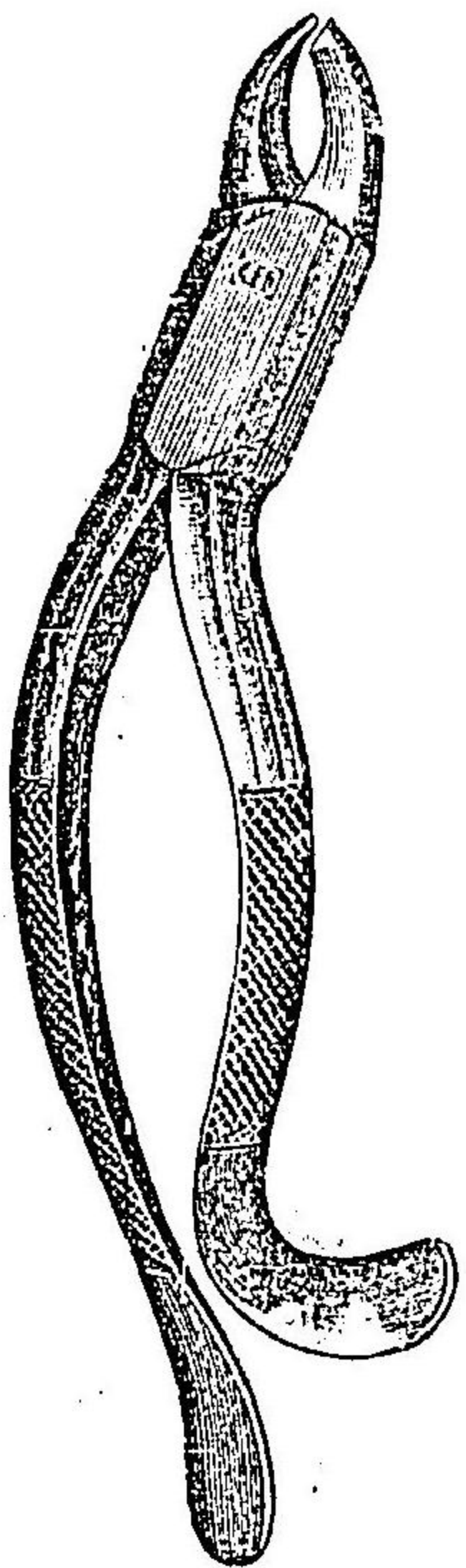
上顎左側牛角狀鉗子
ノ圖

圖一十三第



全右側牛角狀鉗子
ノ圖

圖二十三第



ヲ舉上シ齒槽ヨリ挺出スヘク然ル后齒根鉗子ヲ以テ弛緩
シタル各根ヲ除去スヘシ然リ注意ヲ加ヘテ該鉗子ヲ使用
セハ齒齦上ニ單純ノ損傷ヲ貽スニ止マリ且ツ其創傷ハ速
ニ平癒スヘシ
三根互ニ分離セル時ハ常ニ旋回運動ヲ以テ容易ニ拔去
スルヲ得ヘシ
腐朽大白齒拔去ノ際其破碎ヲ將來スヘキ虞アラハ普通
ノ鉗子ヲ以テ該齒根ヲ拔去スルヲ可トス

術者并患者ノ位置

第五章 下顎齒牙并ニ齒根拔去法

下顎齒牙拔去ノ際ニハ先ツ患者ヲ低キ位置ニ据ヘ且ツ
頭部ヲ少シク傾斜セシムヘシ而シテ術者ノ地位ハ拔去ス

下顎前部施術ノ圖

圖三十三第



ヘキ齒牙并ニ使用スヘキ鉗子ノ種類ニ準シテ各相異ナレ
リ即チ下顎前部齒ノ拔去ニ方リテハ患者ノ後右側或ハ背
後ニ立チ左手ヲ用ヒテ頭部ヲ擁シ指ヲ頤部ニ置キテ下顎
ヲ支撐シ食指ヲ
以テ下唇ヲ壓下
シ拇指ヲ以テ舌
ヲ壓定スヘシ(第
三十三圖)
左側齒牙ヲ拔
去セント欲セハ
全シク患者ノ後
右側ニ立チ掌面

下顎左側施術ノ圖

圖四十三第



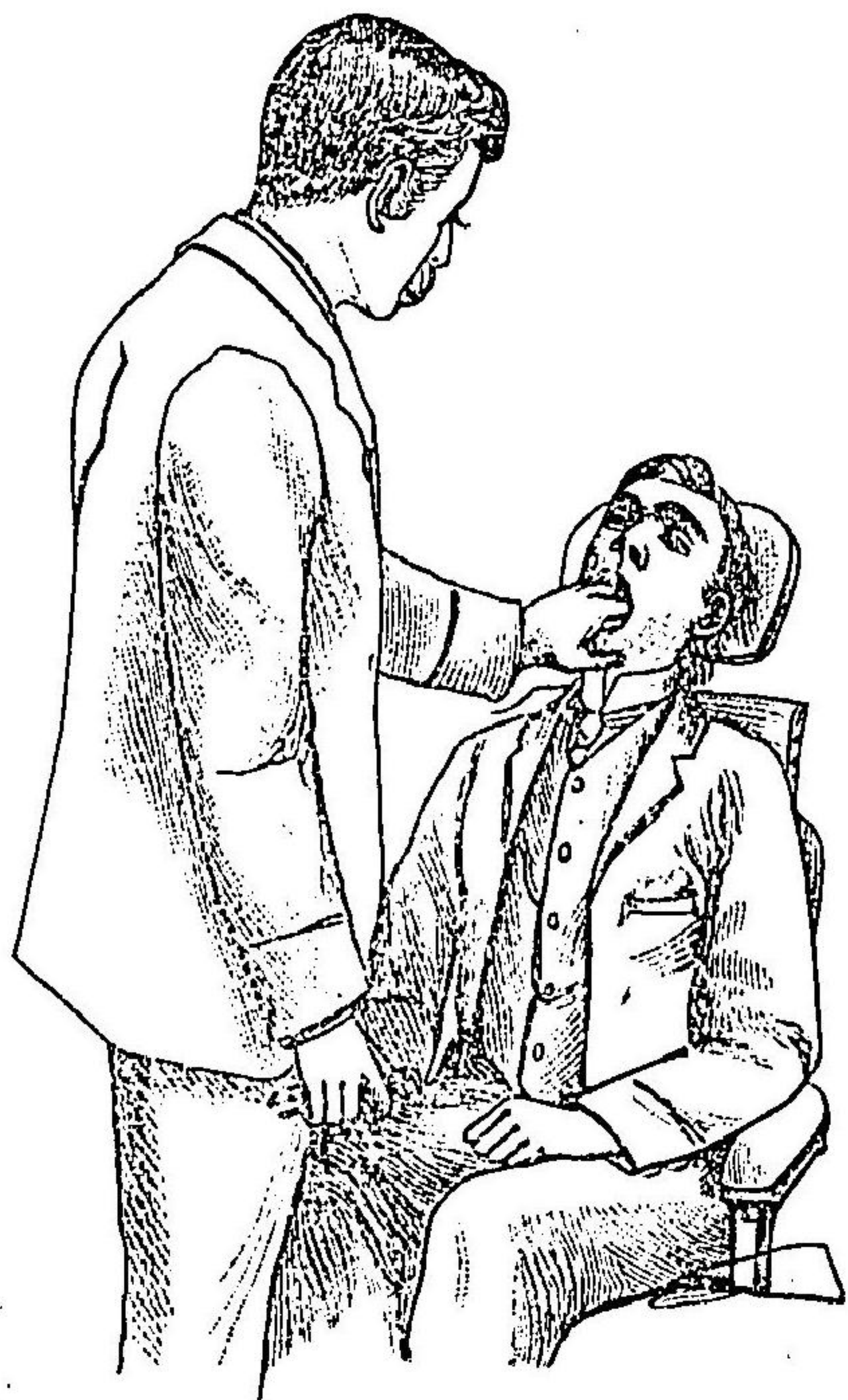
ヲ横顔面ニ抵テ
指ヲ以テ下顎ヲ
支持シ拇指或ハ
食指ヲ以テ頰部
ヲ擴張スヘシ然
ル時ハ容易ニ患
齒ヲ凝視スルコ
トヲ得(第三十四
圖)

但シ第四十二圖ニ示スカ如キ嘴狀鉗子ヲ使用スル時ハ
術者ノ位置モ亦之ニ準シテ異ナラザルヲ得ズ即チ術者ハ
患者ノ右側且ツ稍前面ニ立チ第二指ヲ下顎舌側ニ抵テ第

一指ヲ齒槽頰壁ニ置キ拇指ヲ以テ頤ヲ支持スヘシ(第三十

五圖) 右側齒牙拔去ノ際ハ患者ノ右前面ニ立チ第^二指ヲ以テ

第三十五圖



頰部ヲ擴
張シ拇指
ヲ頤下ニ
措クヘシ
(第三十六
圖)此際若
シ必要ニ
臨マハ患
者ノ正背

行
乙

第三十六圖



後ニ立チ左ノ掌
面ヲ以テ頤ヲ支
持シ食指ヲ口内
ニ送入シテ頰部
ヲ擴張シ拇指ヲ
以テ舌ヲ壓下ス
ルモ可ナリ

嘴狀鉗子或ハ

挺子ヲ以テ右側齒牙ヲ拔去セント欲スル時ハ患者ノ后右
側ニ立チ左腕ヲ以テ頭部ヲ扼シ左拇指ヲ拔去スヘキ齒牙
ノ齒槽内壁ニ置キ第一指ヲ其外壁ニ稽留シ又殘リ三指ヲ
頤下ニ抵テ以テ下顎ヲ支持セシムヘシ但シ此際手指ヲ口

下顎右側施術ノ圖



圖七十三第

内ニ送入ルニ方リ光線ノ透射ヲ妨碍セサシカ爲メ可成
的下方ニ手腕ヲ保タサルヘカラサル大リ(第三十七圖)

下顎齒牙ヲ拔去スルノ際須ラク之レカ注意ヲ加フヘキ

モノアリ即チ齒

槽ヨリ齒牙ヲ舉

上スルニ方リテ

ハ其連繫ヲ斷チ

テ抽出セントス

ルノ瞬間ヲ熟慮

セサルヘカラス

是レ齒牙ノ忽然

脱出スルニ由リ

下顎前齒拔去法

テ鉗子ハ上顎齒ニ衝突シ之ヲ破碎スルノ虞アレハナリ

[甲]下顎前齒 ハ側面扁平ナル單根ヲ有スルモノニシテ

之カ拔去ニ方リテハ第三十八九圖ニ示スカ如キ鉗子ヲ使

用スヘク其嘴端ハ各々同一ノ弧形ヲ成セリ。而シテ拔齒ノ

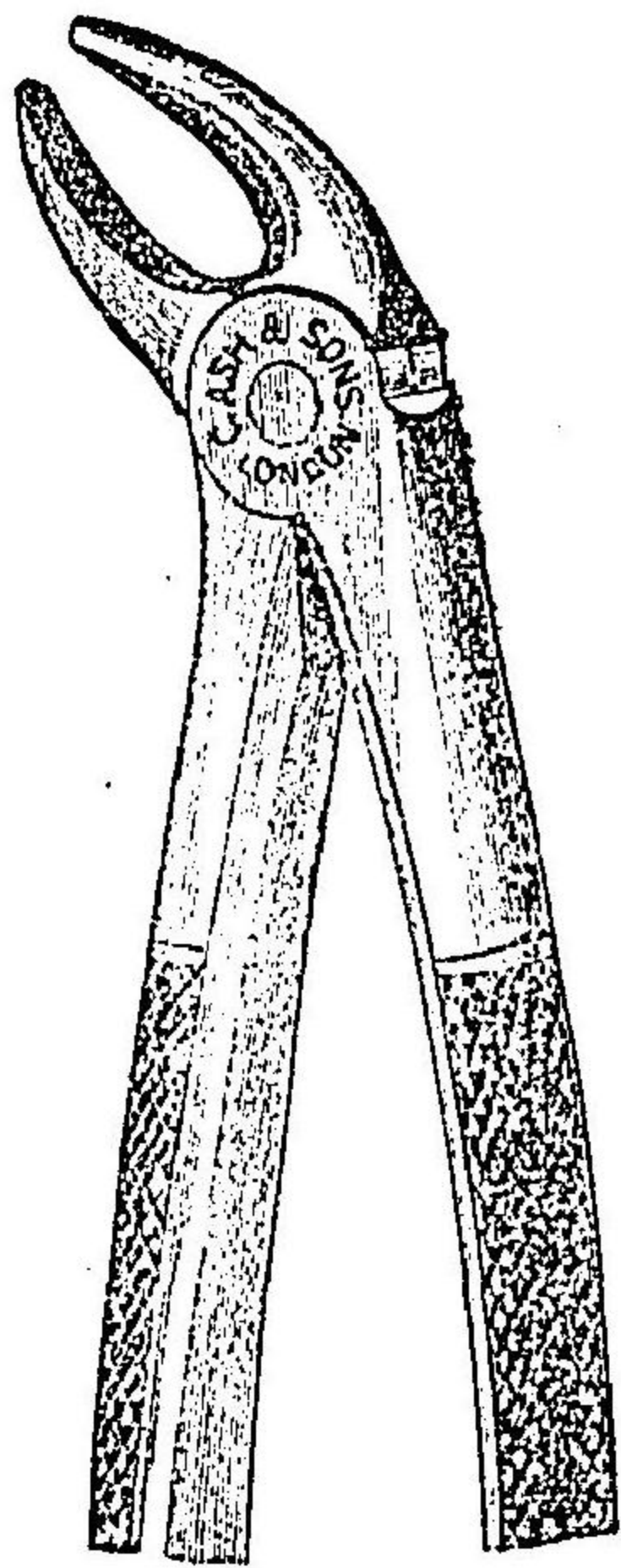
際ハ始メ舌側嘴ヲ鉗致シ齒牙ヲ弛緩セシメンカ爲メ輕微

ノ内方運動ヲ施シ次テ力ヲ外方ニ加ヘ外上方ニ牽引シテ

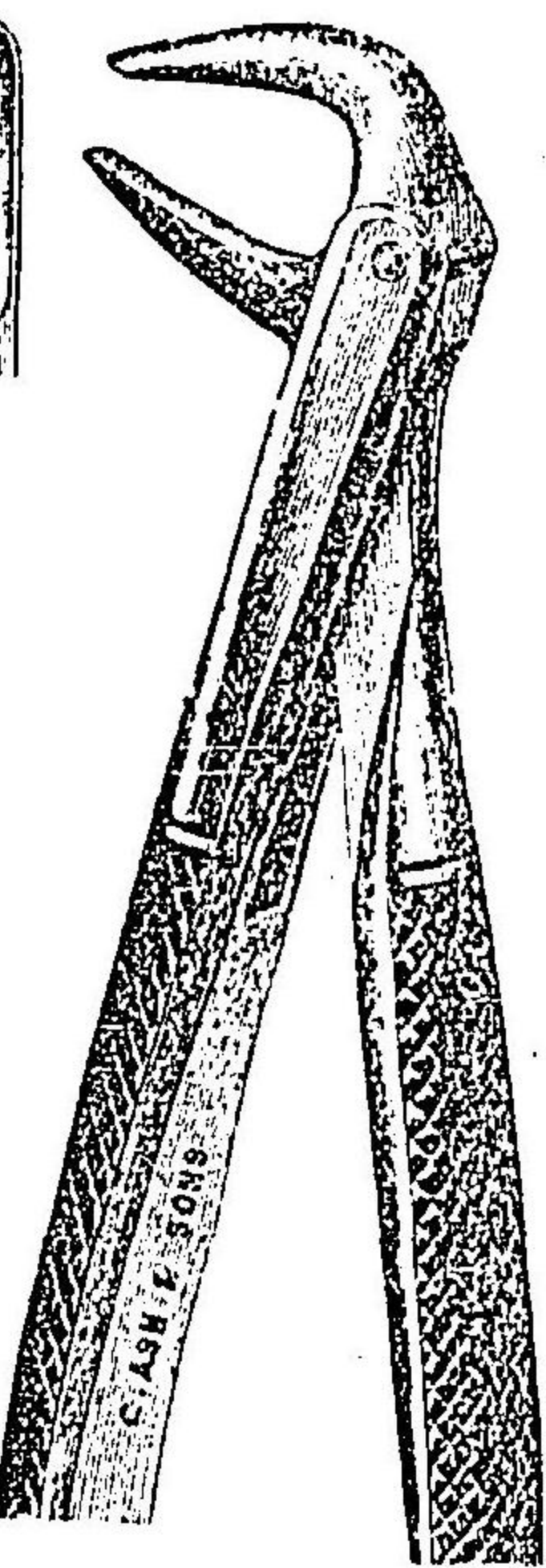
之ヲ抽出スヘシ

下顎前部齒用鉗子ノ圖

圖八十三第



全麻狀鉗子ノ圖



圖九十三第

下顎犬齒拔去法

下顎前齒根ハ又同一ノ方法ヲ以テ拔去スルヲ得ヘシ
〔乙〕下顎犬齒ハ側面扁平ナル單根ヲ有シ之ヲ前齒根ニ
比スレハ強固ニシテ長シトス。然シテ該齒ノ拔去ハ下顎前
齒ト同法ニ據ルヲ得ヘシト雖モ其骨植ノ度強固ナルヲ以
テ常ニ強力ヲ用ヒサルヘカラス

下顎小白齒拔去法

〔丙〕下顎小白齒ハ圓錐狀ヲ成セル單根ヲ有シ第一小白
齒根ハ圓錐ノ形狀第二小白齒根ノ如ク顯著ナラス且ツ其

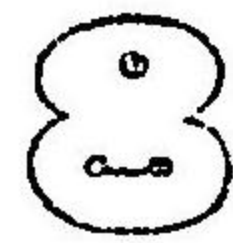
外面ハ内面ニ比シ弧形稍大ナリトス。而シテ鉗子ハ第三十
八九圖ノ如キモノヲ使用シ通常ノ目的ニ於テハ其刃嘴ノ
大サ形狀各相同シ、然レ拔齒ノ際ハ最初鉗子ノ舌側嘴ヨリ
鉗定シ以テ齒槽トノ連繫ヲ遮斷シ次テ齒牙長軸ニ沿ヒ一
方ヨリ他方ニ向ヒ微ニ旋回運動ヲ施シ後之ヲ抽除スヘシ
然レモ此操作法ニシテ若シ其効ヲ奏スルナクハ宜シク
微ニ内方ニ次テ外方ニ旋轉シタル後外上方ニ牽引スヘシ
實ニ斯ノ如ク施サハ輒ク齒槽ヨリ脱出シ得ヘキナリ
同齒根ハ又全冠齒ト同一法ニ依リテ拔去スルヲ得ヘシ
然レモ其齒根若シ齒齦緣下ニ埋沒セル時ハ鉗子ヲ以テ充
分鉗夾シ得ヘカサルカ故ニ其手術稍困難ナラサルヲ得
ズ。斯際鉗子ヲ用ユル時ハ却テ失錯ニ終ルヲ多キヲ以テ須

下顎大白齒拔去法

下顎大白齒根橫斷ノ

ラケ具直ナル挺子ヲ使用スヘシ

[丁] 下顎大白齒ハ前後ニ位スルニ根ヲ有シ其根ハ尤モ
扁平ニシテ后方ニ彎曲スルノ傾向アリ此性質ハ第二大
齒ニ於テ往々見ル所ニシテ殊ニ第三大白齒ニ於テ然リト
ス又時トシテ第二大齒ノ二根相癒合スルアリ殊ニ第
三大齒ニ於テ頸回之ヲ目撃ス若シ下顎大白齒ヲ頸部ニ
第四十圖



於テ橫斷シ其面ヲ視レハ共ニ結合シタ
ルニ箇ノ弧形ヨリ成立スルヲ識ルヘク

其前部弧形ハ后部ニ比シテ稍大ナリ(第四十圖)

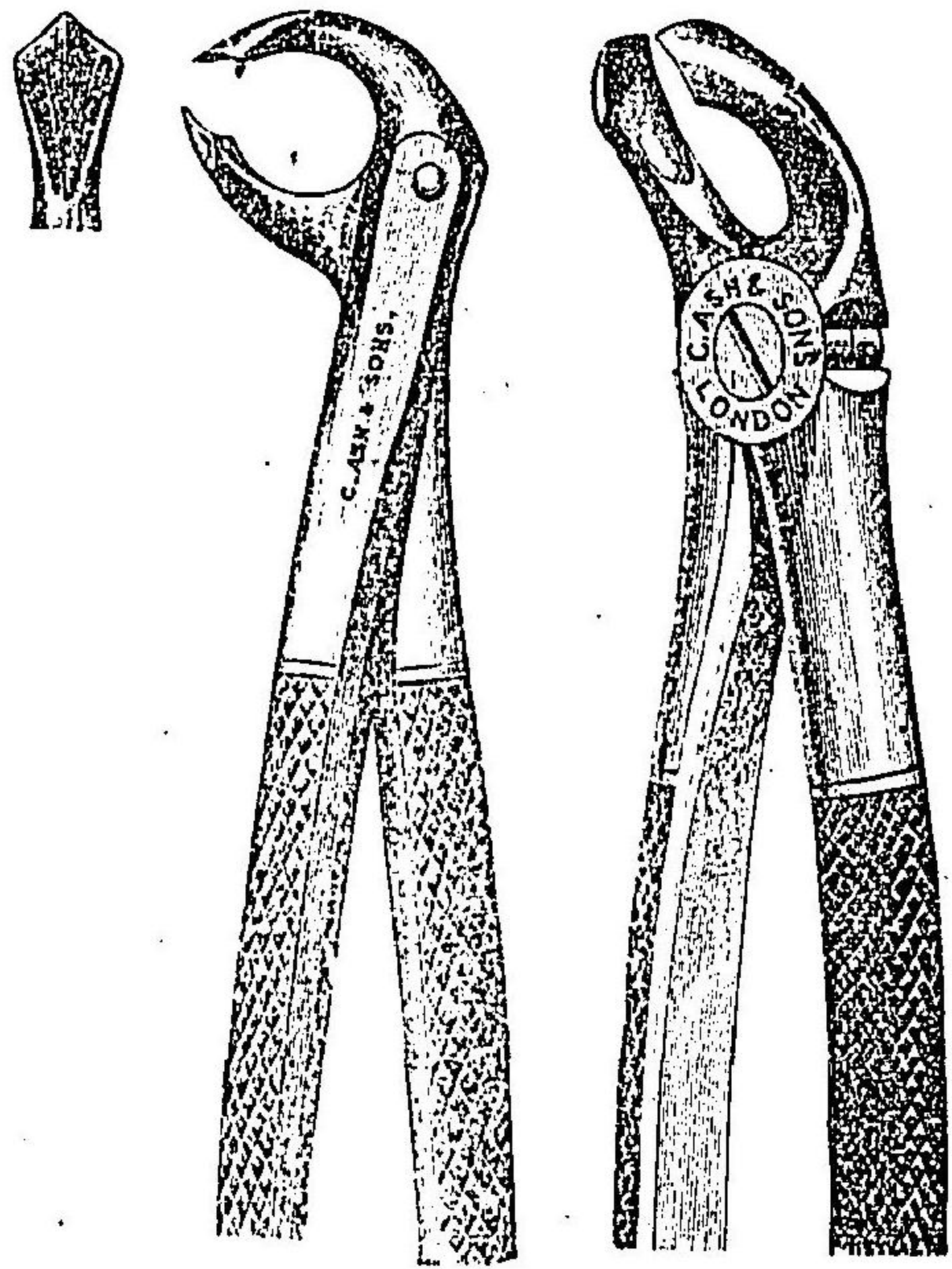
此等ノ齒牙ニ供用スヘキ鉗子ノ刃嘴ハ前後根側面ノ陷
沒部ニ適合セシメンカ爲メ隆起ニ依リテ分界セラレタル
二箇ノ溝渠ヲ有シ且ツ各嘴同一ノ大サヲ有セサルヘカラ

下顎大白齒用鉗子ノ

全嘴狀鉗子ノ圖

圖一十四第

圖二十四第



ス是レ一ノ鉗子ヲ以テ左右側ニ兼用シ得セシメンカ爲メ
ナリ而シテ其適當ナル鉗子ハ第四十一圖ニ示スカ如シト
雖凡或者ハ第四十二圖ノ如キ嘴狀鉗子ヲ賞用セリ之ヲ要

嘴狀鉗子ノ得失

スルニ後者ハ前者ニ一籌ヲ輸スノ感アリト雖モ亦一得ナ
 キニシモアラズ今其長所ヲ擧クレハ左ノ如シ

- 一、拔齒ハ際患齒并ニ其近傍部ヲ明ニ凝視シ得ヘシ
- 二、力ヲ供給スルニ最モ便益アリ
- 三、拔齒ノ際左拇指及ヒ他指ヲ以テ容易ニ齒槽突起ヲ
 包括シ得ヘシ
- 四、齒槽ヨリ齒牙ヲ抽出スルニ方リ微ニ後方運動ヲ施
 ストヲ得

然レモ其缺點ハ多ク内方運動ヲ加フルノ困難ナルニア
 リ故ニ内方ニ斜生シタル齒牙即チ舌側ニ傾斜セル齒冠ヲ
 有スルモノハ嘴狀鉗子ヲ以テ拔去スルト甚タ難ク充分ナ
 ル内方運動ヲ施サントセハ鉗子ノ背部ハ上顎齒上ニ撞突

スルヲ以テ意ノ如クナラス爰ヲ以テ牙關緊急ノ際ニ於テ
 ハ須ラク眞直ナル鉗子(第四十一圖)ヲ使用スルヲ宜シトス
 之ニ反シテ若シ頰肉ノ腫脹并ニ強直ヲ有スル時ハ眞直鉗
 子ハ寧ロ患者ニ苦悶ヲ與フルモノタリ。其他嘴狀鉗子ハ齒
 牙ヲ破碎スルト往々之アルヲ以テ内外方運動ヲ施スニ方
 リテハ輕忽ニ力ヲ供給セサル様留心セサルヘカラス

下顎大臼齒ヲ拔去セント欲セハ先ツ鉗子内嘴ヲ鉗定シ
 次ニ外嘴ニ及ホシ齒根ノ側面凹陷部ニ充分嘴端ヲ推進セ
 シムル様注意ヲ加フルヲ要ス斯ノ後輕微ノ内方運動ヲ施
 シ亞テ一ノ外方運動ヲ加フヘシ又必要ニ臨マハ此内外運
 動ヲ反復スルヲ得。而シテ齒槽ヨリ齒牙ヲ抽出スルニ方
 リテハ宜シク之ヲ外上方ニ牽引スヘシ然レモ此牽引力ヲ

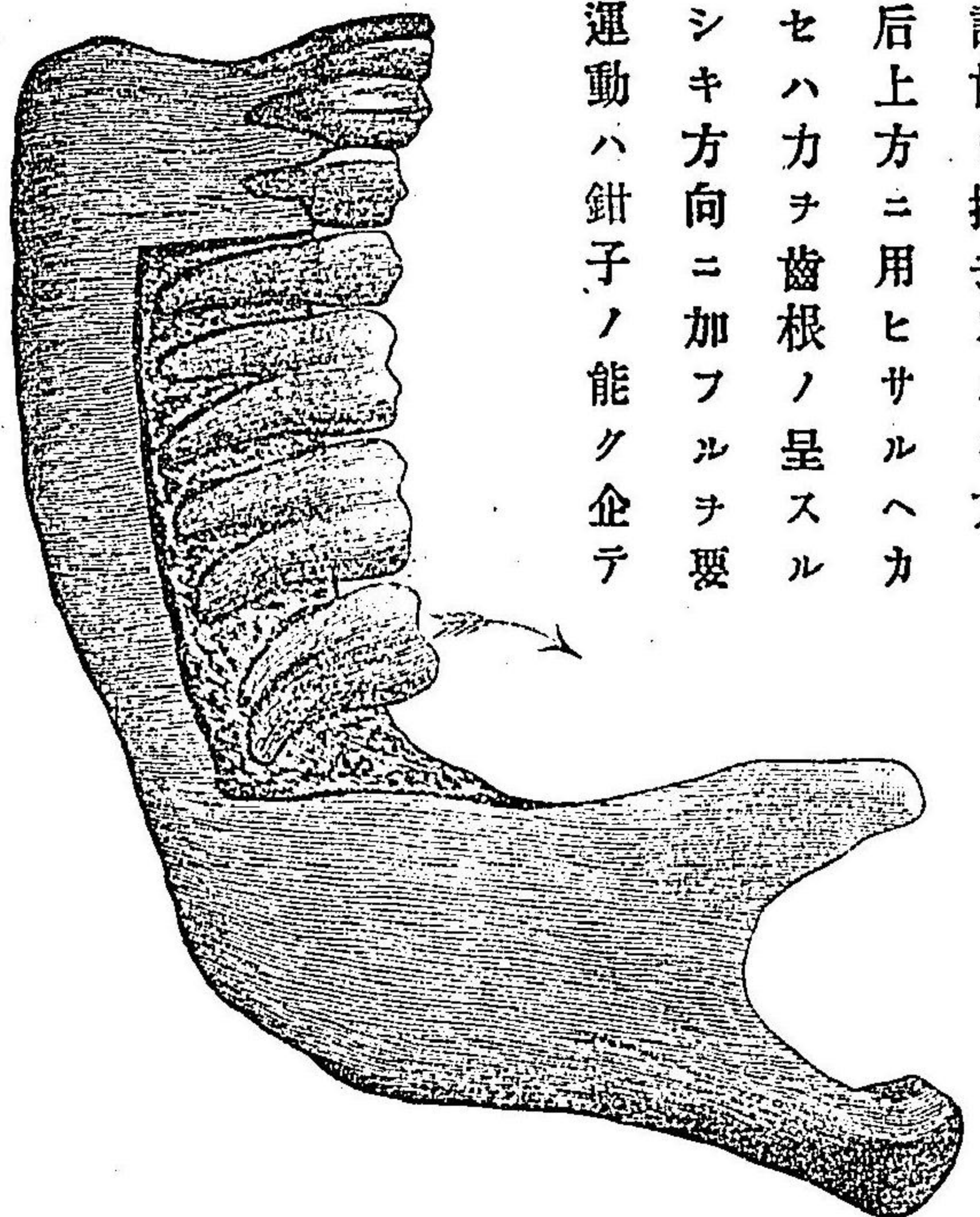
加フルノ際常ニ注意シテ其力ヲ克制セサルヘカラス若シ
 スル豫防ヲナサ、ル時ハ齒槽ヨリ突然ノ脱出ニ依リ強大
 ナル勢力ヲ以テ上顎齒ニ衝突スルノ危険アリトス
 既ニ述フルカ如ク此等ノ齒根ハ稍、后方ニ彎曲スル、往
 ヲ之アルカ故ニ齒槽ヨリ齒牙ヲ抽出スルニ方リテ其彎曲
 シタル方向ニ從ヒ屢、針子ヲ后方ニ扭轉セシムルノ必要ヲ
 見ル、アアリ

下顎智齒拔去法

第二大臼齒拔除ノ際過度ノ力ヲ外方ニ加フヘカラス是
 レ其齒槽外壁ハ往々甚タ緻密ナルヲ以テナリ
 第三大臼齒ハ眞直ナル挺子ヲ以テ拔去スルヲ得ヘシ此
 齒牙ノ解剖圖(第四十三圖)ヲ一覽スル時ハ其齒根ハ著シク
 背后ニ彎曲セルヲ認ムヘク加之ナラス其齒槽ヲ構成スル

下顎骨ノ圖

圖三十四第

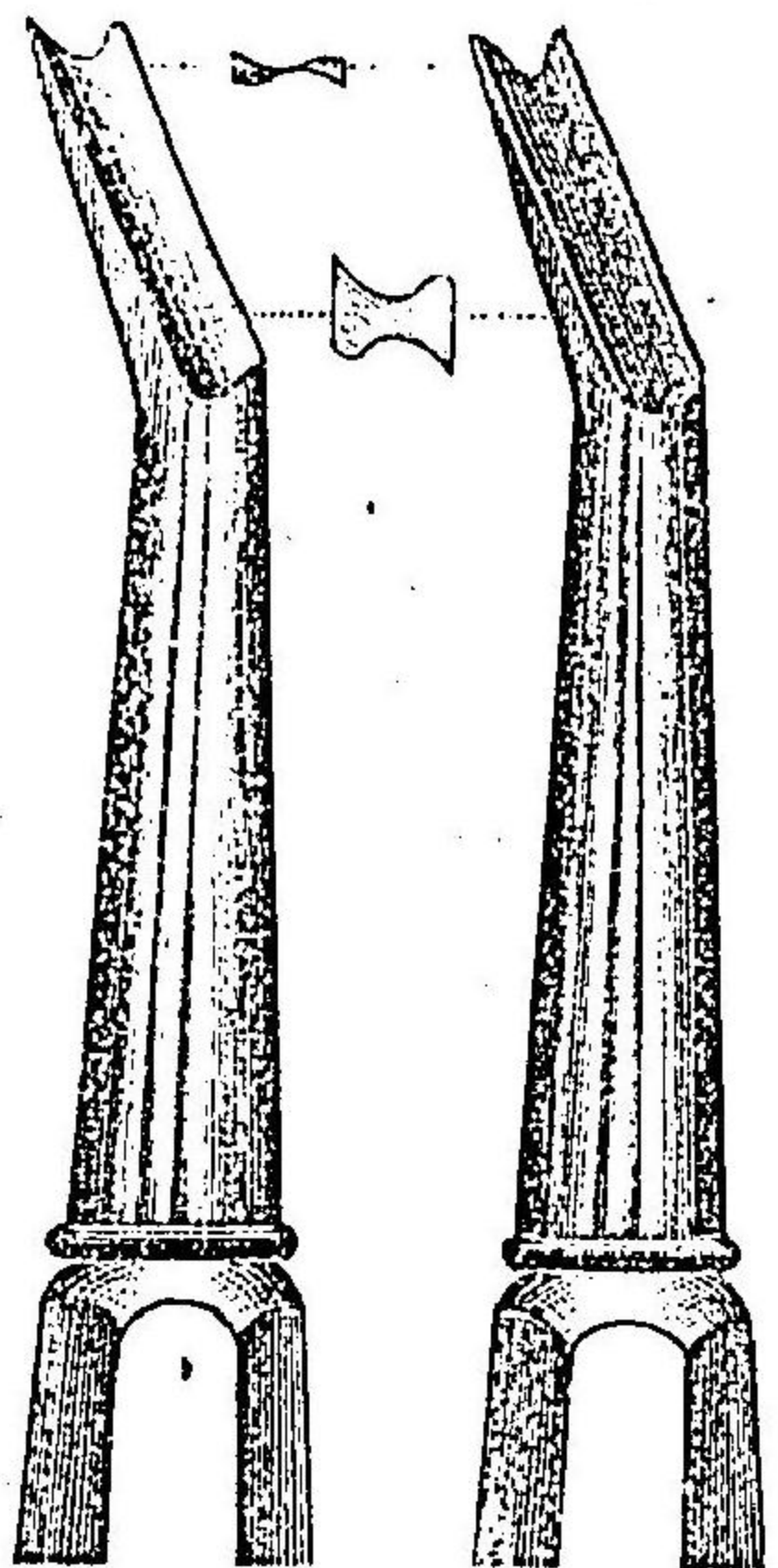


骨質ハ他齒槽ニ比シ最モ強固ナ
 ルカ故ニ該齒ヲ拔去スルニ方リ
 テハ力ヲ后上方ニ用ヒサルヘカ
 ラス更言セハ力ヲ齒根ノ呈スル
 彎形ニ均シキ方向ニ加フルヲ要
 ス蓋シ此運動ハ針子ノ能ク企テ

得ヘキ所ニアラスト雖此法ニ據リ挺子ヲ使用スル時ハ其手術隨テ容易ナリトス第二大臼齒ノ現存スル際即チ第十四圖中ニ示セル如キ彎曲挺子ヲ把リ之ヲ近心面ノ齒根齒槽壁間ニ夾入シ其扁平面ヲシテ齒面ト平行ナラシメテ可成的深ク齒根ノ尖端ニ向セテ推進スヘシ斯ノ后柄子ヲ反對ノ方向ニ振轉スル時ハ槓杆作用ニ依リ齒牙ヲ后方ニ傾斜セシメ且ツ齒槽ヨリ挺舉スルヲ得ヘシ但シ其齒根面ニ抵觸スヘキ挺子ノ嘴端ハ白堊質ヲ微シク剔去シ得ル程ニ銳利ナラサルヘカラス若シ此結果尙ホ充分ナラサル時ハ刃嘴ノ扁平面ヲ再ヒ齒根前面ト平行ニ夾入シ齒牙ノ齒槽ヨリ挺出スルニ至ルマテ運動ヲ反復スヘシ

挺子ヲ使用スル際ハ左ノ拇指或ハ爾他ノ指頭ヲ以テ舌

第四十四圖



續ヲ奏スルモノニシテ恰モ楔ノ如ク之ヲ第二大臼齒及ヒ第三大臼齒間ニ挿入シ第二大臼齒冠ヲ

ヲ壓下スルヲ怠ルヘカラス是レ其滑脱ノ爲メニ舌又ハ術者手指ノ損傷ヲ招クヲナキニアラサレハナリ

カナイン氏ノ創意ニ成ル挺子(第四十四圖)ハ此際殊ニ良

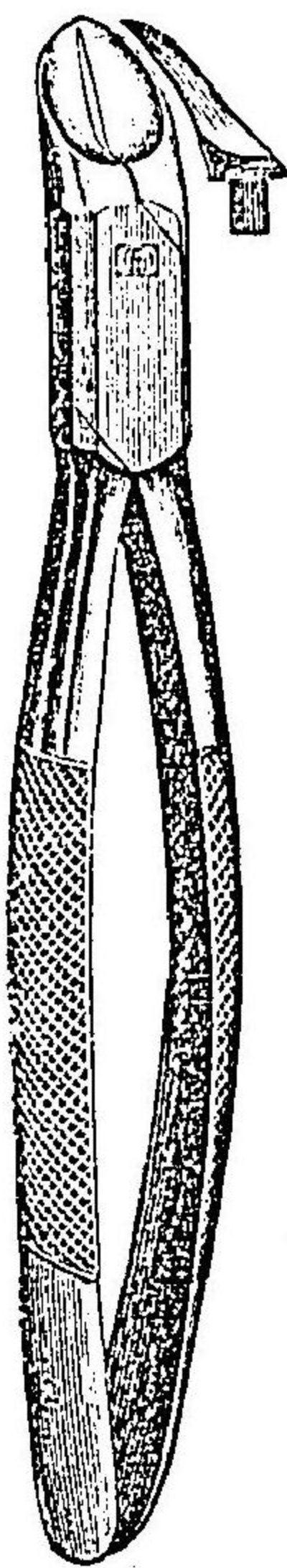
支點トナシ挺舉スルニアリ

第四十五圖ニ示セル鉗子ハ同齒ニ應用センカ爲メフヒシツク氏ニ由リ特ニ製作セラレタルモノニシテ第二大臼

齒ヲ以テ支點トナシ其楔狀嘴ヲ第二第三大白齒間ニ嵌入シテ柄脚ヲ握閉スル時ハ齒牙ハ漸々槽内ヨリ挺出スヘク又牛角狀鉗子(第四十六圖)ヲ使用シ其尖嘴ヲ兩齒間ニ挿入シテ柄脚ヲ緊閉スレハ嘴端ハ楔ノ如ク作用シ以テ容易ニ

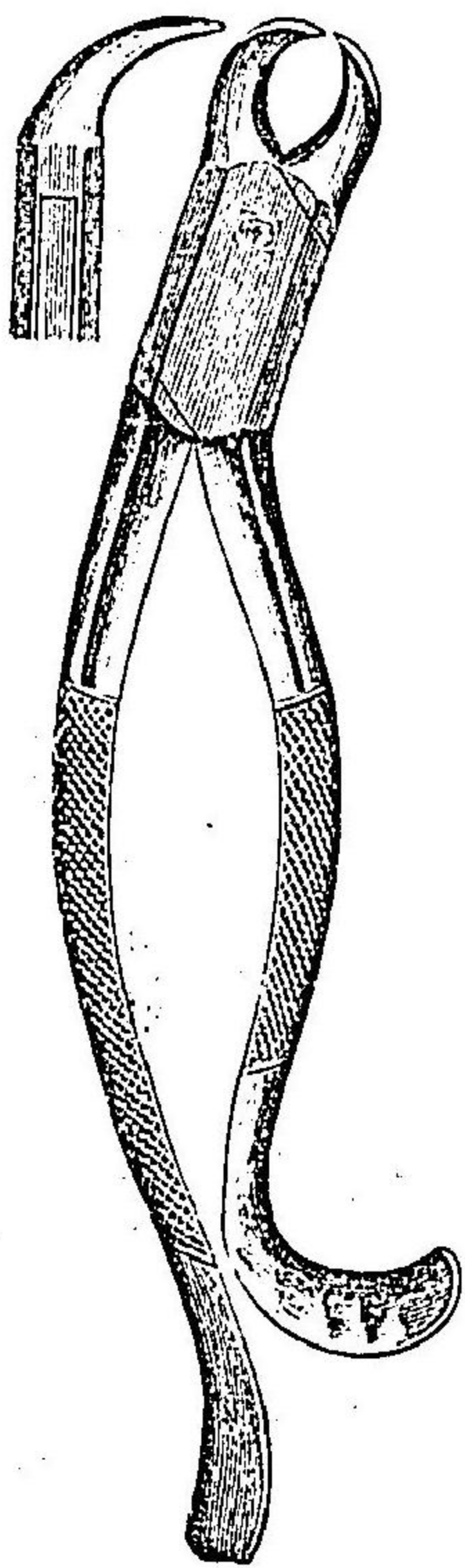
下顎智齒用鉗子ノ圖

圖五十四第



下顎大白齒用牛角狀鉗子ノ圖

圖六十四第



彎曲齒根ヲ挺舉スルヲ得ヘシ

智齒若シ其頸部ノ後方ニ於テ齒齦ト緊着スル時ハ挺子或ハ鉗子ヲ以テ單ニ之ヲ齒槽ヨリ抽除スルヲ良トス。又或場合ニアリテハ豫メ彎曲齒齦缺ヲ以テ其部ノ齒齦ヲ切開スルノ要アリ然ル片ハ拔齒ノ際齒齦ノ裂傷ヲ將來スルヲナシ

第二大臼齒喪失シテ智齒孤植スル片ハ多ク大白齒用鉗子ヲ賞用スト雖モ挺子ヲ以テ拔去スルモ亦可ナリ但シ此際ハ左手第一指ノ右側或ハ拇指ノ左側ヲ以テ支點トナサルヘカラス

腐蝕ノ部分ハ舌面或ハ頰面ノ齒齦線下ニ達シ齒冠ノ一部僅カニ殘存セル大白齒ヲ拔去セント欲セハ第三十八九

下顎智齒拔去法

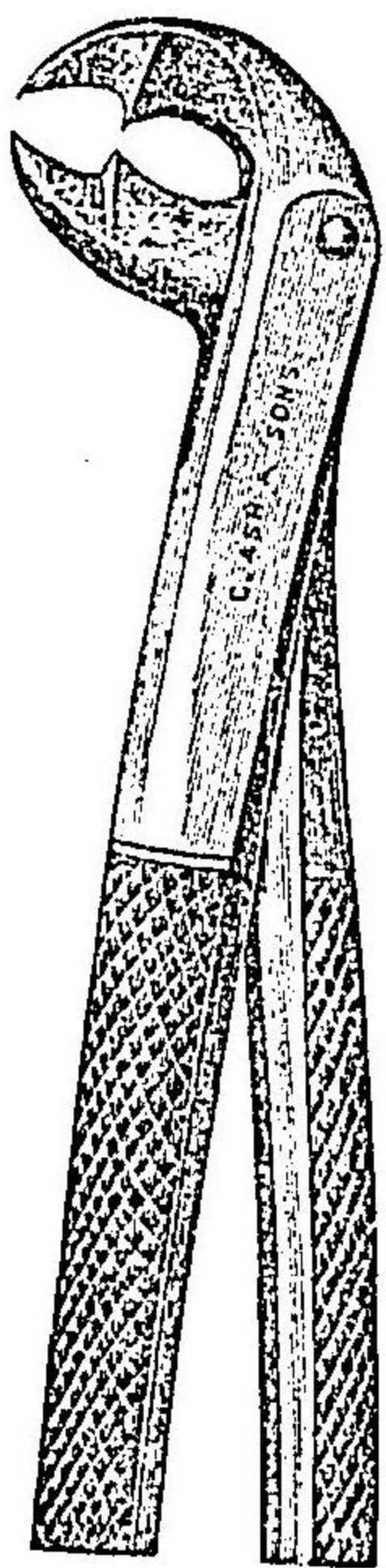
下顎齒根拔去法

圖ニ示スカ如キ鉗子ヲ使用シ既ニ第四十三頁上顎大白齒根拔去ノ條下ニ於テ説明シタルト同一ノ方法ヲ用ユレハ則チ足ルカ故ニ茲ニ蛇足ヲ添ヘサルヘシ。但シ此際留心スヘキハ鉗子刃嚙ヲ最モ堅牢ナル齒根上ニ置キ且ツ主カチ脆弱壁ノ方向ニ加フルニアリ

齒冠殆ト朽損シ根ハ尙ホ結合セル大白齒ヲ拔除セント欲セハ齒根鉗子ヲ使用スヘシ此法先ツ其刃嚙ヲ堅牢ナル齒根ノ舌面ニ抵テ充分之ヲ鉗致シ通常大白齒用鉗子ヲ用ユルト同一ノ方式ニ依リ力ヲ加ヘテ之ヲ拔去スルニアリ。蓋シ此方法ヲ以テセハ兩根共ニ拔去シ得ルヲ常トスレモ若シ一根ノミニ止マル時ハ同鉗子或ハ彎曲挺子ヲ以テ容易ニ拔除シ得ヘシ。但シ彎曲挺子ヲ使用スルニ方リテハ其

下顎切斷鉗子ノ圖

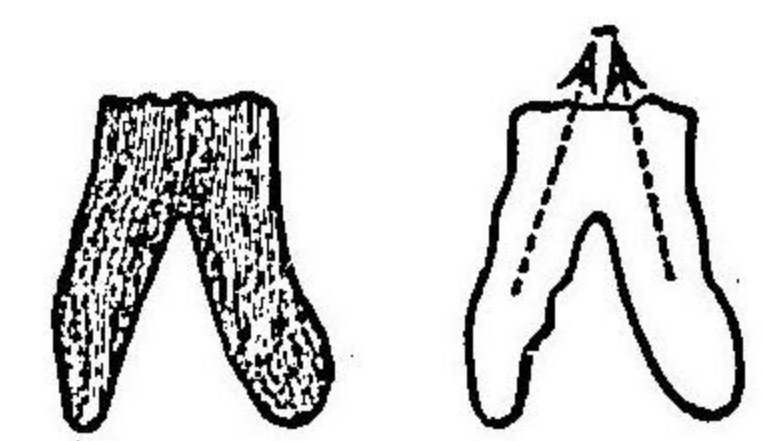
圖七十四第



嘴端ヲ深ク拔去スヘキ齒根ノ槽内ニ推進セシメ或ハ既ニ拔去シタル齒根ノ槽内ニ置キ間在骨ヲ穿通シテ嘴端ヲ推入シ後チ挺舉シテ齒根ヲ除去スヘシ
齒根尙ホ結合シテ固ク骨植スル時ハ牛角狀鉗子(第四十六圖)ヲ以テ拔去スルヲ得即チ其内外尖嘴ヲ齒根分岐面上ニ置キ柄脚ヲ握閉スレハ尖嘴ハ齒齦并ニ齒槽ヲ穿通シテ漸々齒根ヲ撞擧スヘシ。又此際第四十八圖ノ如キ切斷鉗子ヲ使用スルモ可ナリ是ハ先ツ其嘴端ヲ舌面及ヒ頰面部

ニ推進シテ兩根間ニ挿入セシメ次テ柄脚ヲ握閉シ普通ノ方法ニ依リテ齒根ヲ拔去スルニアリ然レモ斯法ハ好果ヲ得サル屢次ナルカ故ニ寧ロ其柄脚ヲ緊握シテ齒根ヲ分離シタル後通常ノ齒根鉗子ヲ以テ抽除スルノ優レルニ如カサルナリ

第四十八圖ニ示スカ如キ場合ニ際シテハ齒根ヲ分離スヘキノ理既ニ明亮ニシテ其傾斜セル方向ニ從ヒ容易ニ拔去シ得ルノ便アリ



第四十八圖

齒根既ニ分離シタルモノニアリテハ齒根鉗子ヲ供用シテ内外方運動或ハ旋回運動ヲ施ス時ハ其拔去容易ナルヲ得ヘシ
第三大白齒根ハ眞直ナル挺子ヲ以テ拔

大白齒根ノ圖

去スルヲ良トス又朽損齒冠ヲ有スルモノハ全冠齒ヲ拔去スルト法式ヲ同フス
齒冠甚シク舌側ニ傾斜シタル大白齒ヲ拔去セント欲セハ宜シク第四十一圖ノ如キ鉗子ヲ使用スヘシ何トナレハ此際第四十二圖ノ如キ嘴狀鉗子ヲ使用スル時ハ操作ニ方リ其柄脚ハ上顎齒ニ抵觸シ爲メニ必要ナル内方運動ヲ妨碍スヘケレハナリ

第六章 乳齒拔去法

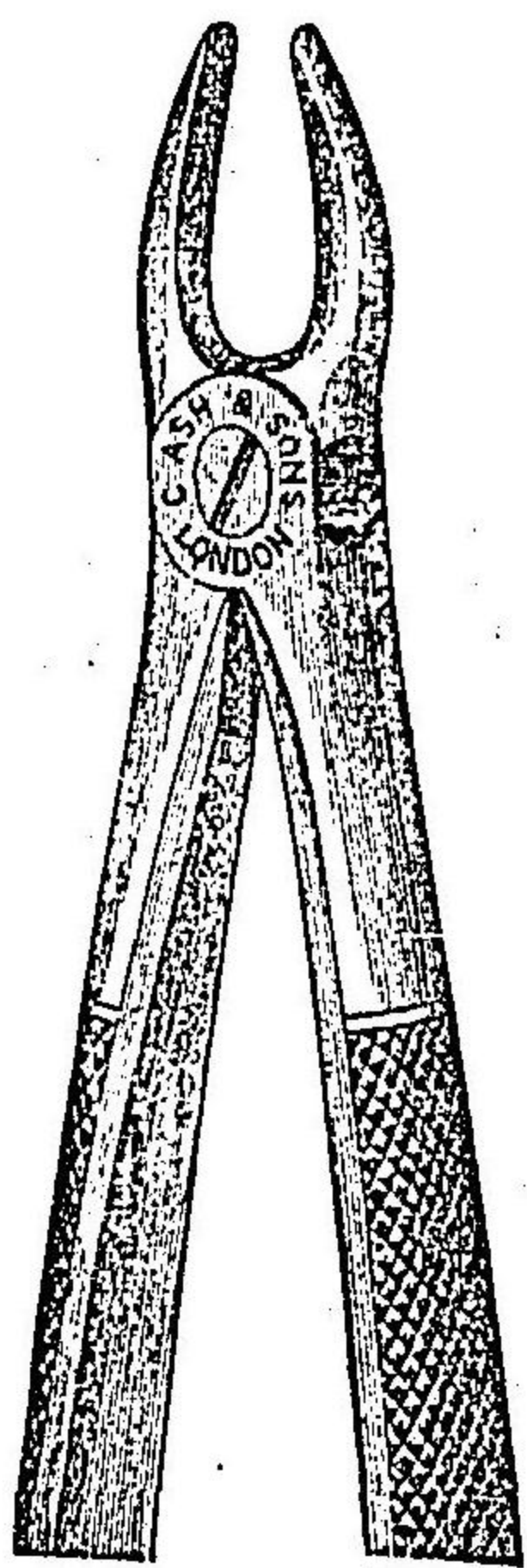
乳齒ノ拔去法ハ永久齒ニ於ケルト敢テ異ナルナシ然レモ此ニ尙ホ注意スヘキ一二ノ要項アリ即チ小兒ヲ騙欺セズ拔齒ノ適否ヲ鑑査シタル後其必要ヲ見ハ之ヲ小兒ニ諭

拔齒前ノ注意

シ決シテ不意ニ施術スルコト勿レ。若シ此際患者頑冥ニシテ
 施術ヲ拒ンテ已マスハ強テ之ヲ行フ勿レ。蓋シ術者ニシ
 テ少シク忍耐シ諄々訓諭スルアラハ小兒ノ特性トシテ多
 クハ遂ニ首肯スルニ至ルヘケレハナリ。而シテ乳齒拔去ノ
 際ニモ亦永久齒ニ於ケルカ如ク迷朦藥ヲ要スルコトナキニ
 アラサレモ小兒ト雖モ猶ホ成人ニ於ケルカ如ク拔齒ノ疼
 痛ニ耐ヘシムルヲ得ン

上顎前齒及ヒ犬齒ノ拔除ニ方リテハ第四十九圖ニ示ス

圖九十四第

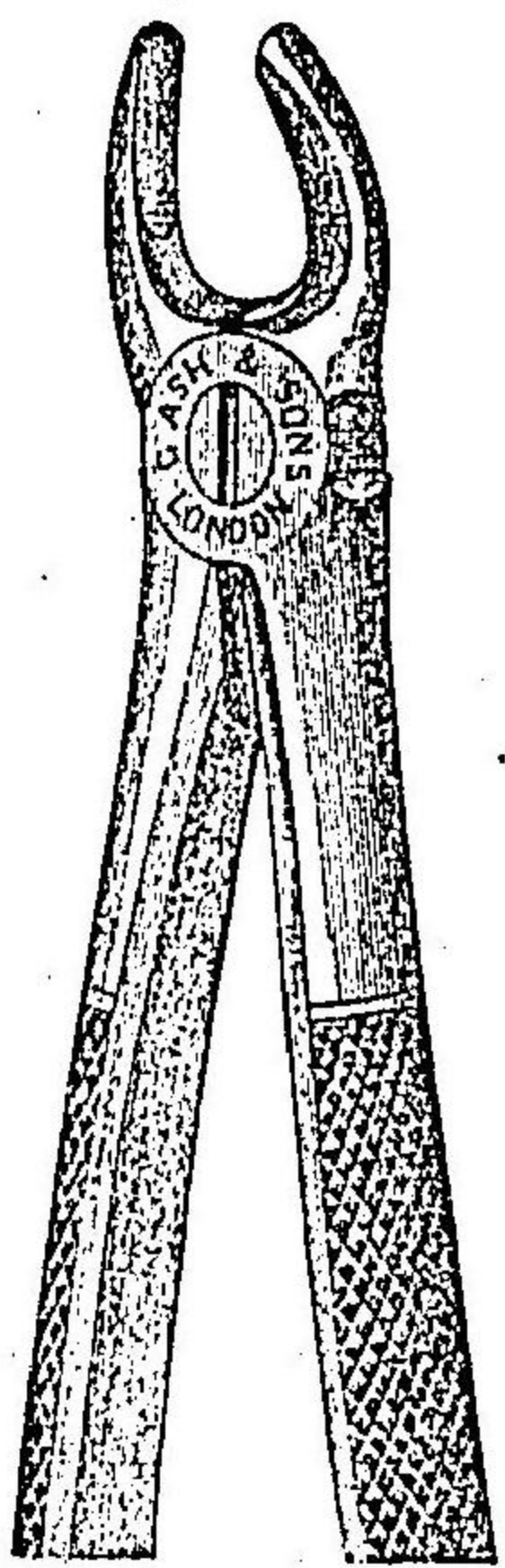


カ如キ小形
 ナル眞直鉗
 子ヲ使用シ
 又上顎白齒

圖上顎乳前齒用鉗子ノ

全乳白齒用鉗子ノ圖

圖十五第



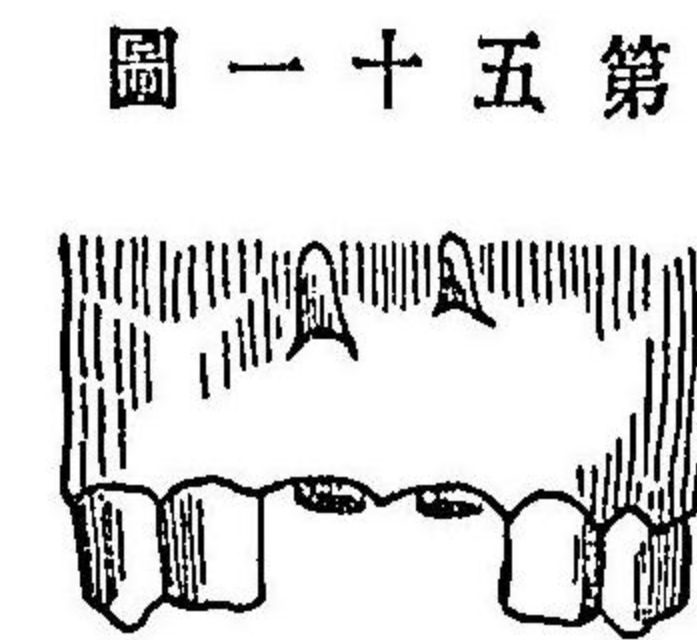
ノ際ニハ第
 五十圖ノ如
 キ鉗子ヲ採
 用スヘシ

拔齒時ノ注意

下顎前齒及ヒ犬齒ヲ拔去スル際ハ第三十八圖或ハ三十
 九圖ニ均シキ小形ナル鉗子ヲ使用シ下顎白齒ニ於テハ第
 四十一圖或ハ四十二圖ト同一ナル小形鉗子ヲ供用スヘシ
 乳齒ノ拔去ニ方リ永久齒ヲ損傷セシメサランカ爲メ鉗
 子ノ刃嘴ヲ深ク齒槽内ニ推進セシムヘカラス殊ニ乳白齒
 ニ於テ然リトス何トナレハ此乳白齒根ハ實ニ永久小臼齒
 ノ冠部ヲ包裹スルモノナルカ故ナリ。又拔去ノ際若シ乳白
 齒ノ破折ヲ來シ其殘根ノ拔除容易ナラスンハ姑ラク之ヲ

乳前齒根拔去法

乳齒根破砕ノ圖



第五十一圖

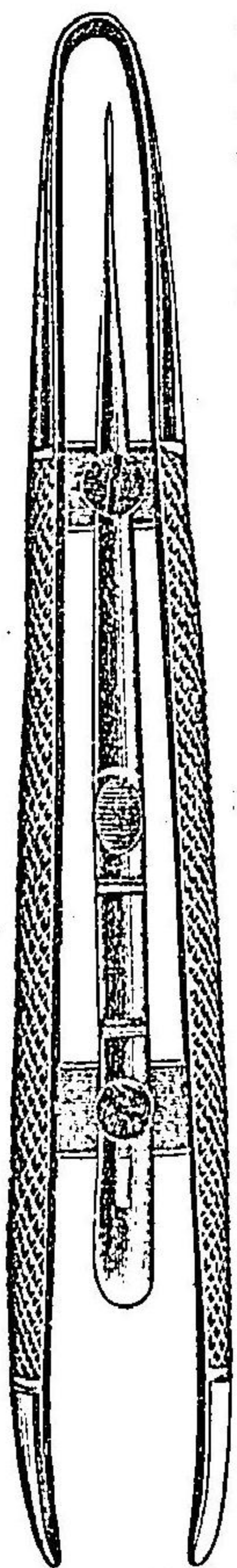
放置スルヲ以テ通則トナス
 第五十一圖ニ畫スルカ如キ狀態ヲ呈スル乳齒根ハ次法
 ニ依リ挺子ヲ以テ拔除スルヲ良トス即チ右拇指ヲ隣齒上
 ニ停メテ支點トナシ挺子ノ嘴端ヲ齒根緣
 下ニ推入シ以テ力ヲ外下方ニ加フルニア
 リ而シテ此際豫メ齒齦力ヲ以テ縦ニ齒根
 面上ノ齒齦ヲ切開スヘキ必要ヲ見ルヲ往
 々之アリトス

又法

又法ハ先ツ齒齦ヲ切開シ剔子ニキカ若クハ尖端直角ニ屈曲セ
 ル適當ナル小器械ヲ齒根端下ニ推入シ之ヲ外下方ニ牽引
 シテ齒根ヲ拔去スルニアリ同僚鈴木伊麻吉氏ハ右ノ主旨
 ニ基キ一ノ拔齒器ヲ創製シタリ即チ第五十二圖ニ示スカ

鈴木氏乳前齒拔除器
ノ圖

第五十二圖



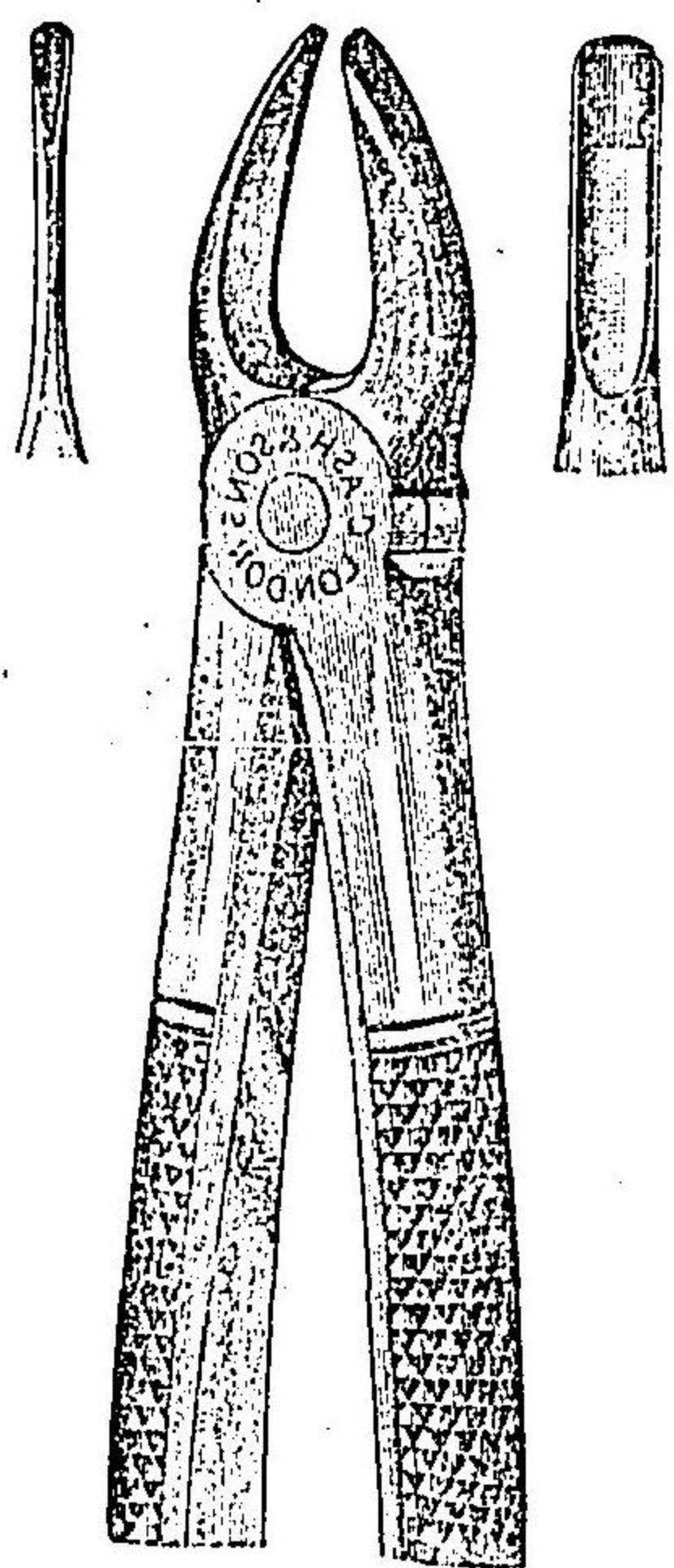
如ク鑷子内ニ齒齦刀ヲ包有スルモノニシテ齒齦ヲ切開ス
 ルト共ニ齒根ヲ牽引スルノ裝置ナリ
 永久齒間ニ固ク楔留スル乳齒ノ小片ヲ驅除セント欲セ
 ハ剔子或ハ小ナル適當ノ器械ヲ使用スルヲ可トス

第七章 亂排齒拔去法

亂排齒ハ特殊ノ場合ヲ除クノ外多クハ矯正術ヲ施シ得
 ヘク必スシモ拔去ノ必要ヲ見スト雖モ姑ク茲ニ其拔去法

ニ就テ一言セント欲ス。蓋シ拔齒法中亂排齒及密偏齒ノ拔去ノ如ク術者ノ熟練ヲ要スルモノハ恐ラク他ニ之アラサルヘケレハナリ。然レモ今各種ノ場合ニ應用スヘキ一定則ヲ示スハ誠ニ難キカ故ニ其最モ普通ノ場合并ニ方法ニ就テ聊カ説明ヲ加ヘン而已

〔甲〕上顎中央前齒 第五十四圖ニ於ケルカ如キ亂排齒ヲ拔去セント欲セハ第五十三圖ノ如キ鉗子ヲ使用スルヲ可



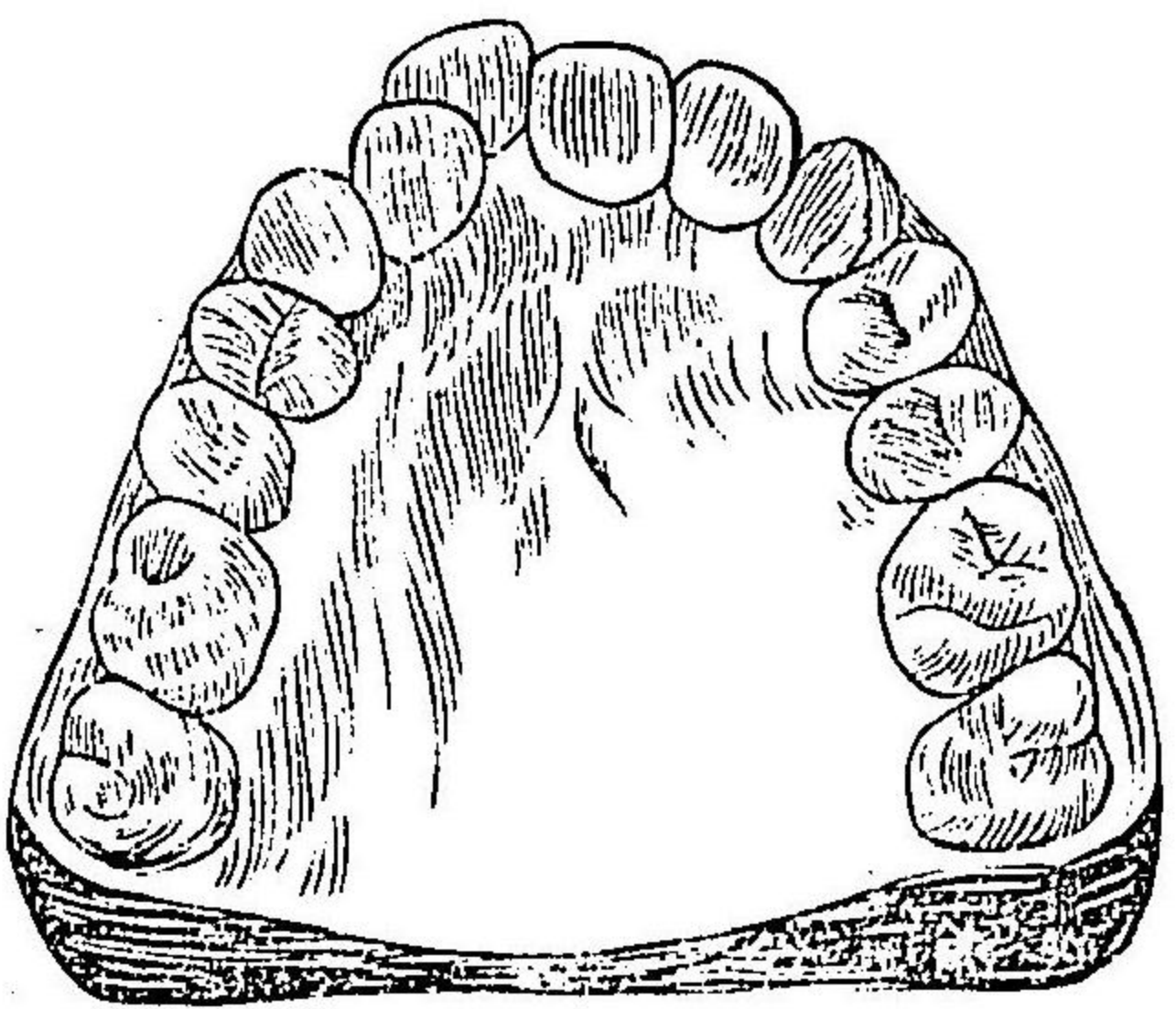
圖三十五第

亂排セル上顎中前齒拔去法

全鉗子ノ圖

上顎中前齒亂排ノ圖

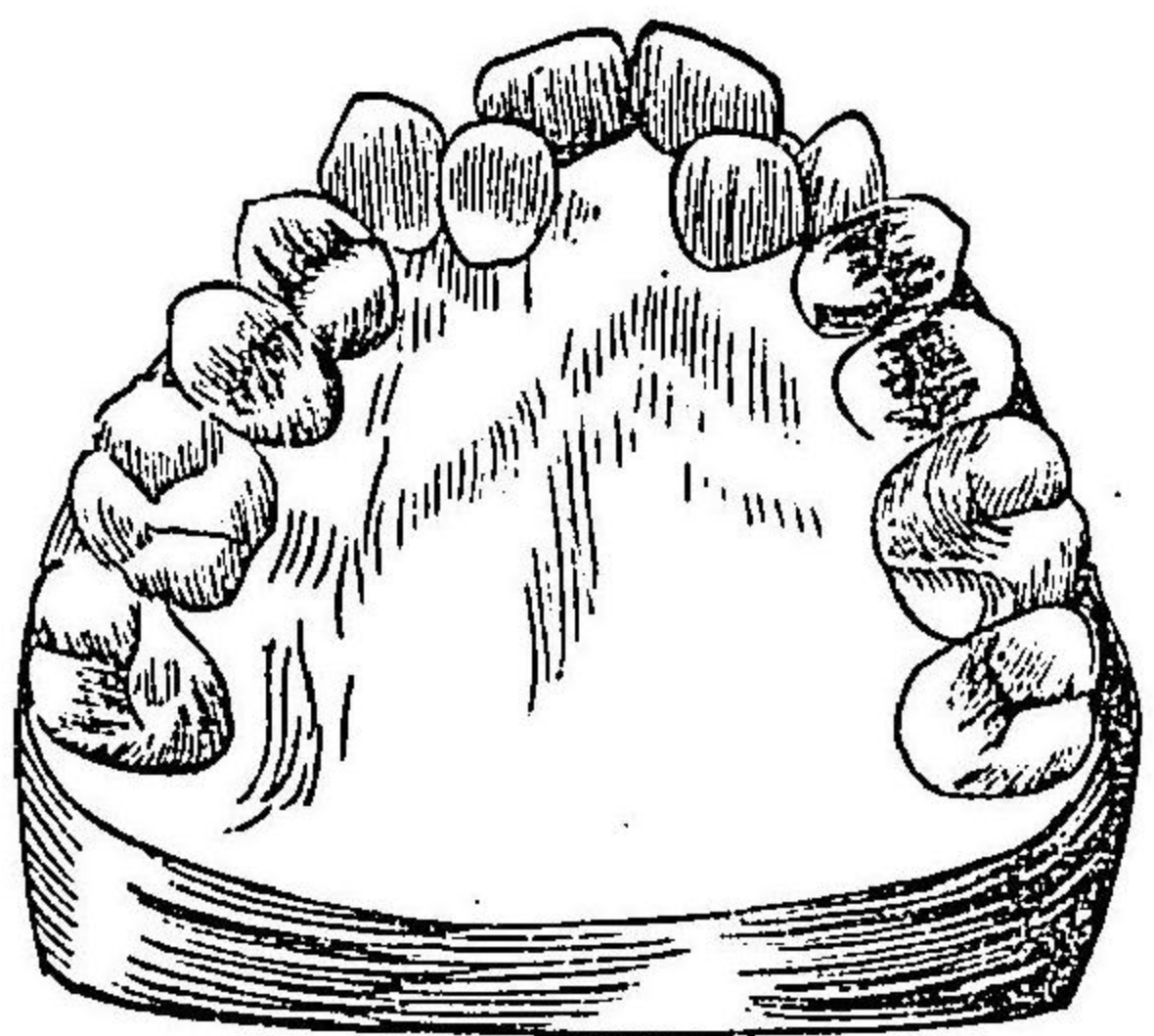
圖四十五第



トス即チ其狹小ナル内嚙ヲ口蓋面廣大ナル外嚙ヲ唇面ニ鉗定シ主トシテ力ヲ外方ニ加フヘシ。斯ノ如クシテ力尙ホ足ラサル時ハ輕微ノ旋回運動ヲ試ミサルヘカラス。而シテ隣接齒間ニ少シク空隙ヲ存スルアラハ第二十二圖ノ如キ眞直鉗子ヲ採リ其刃嚙ヲ齒根ノ近心面并ニ遠心面ニ鉗致シテ拔去スヘシ。但シ此際過度ニ嚙端ヲ推進セシムルコトナク且ツ隣齒ヲ弛緩セシメサル様注意シテ旋回運動ヲ企ツルヲ良トス

全上顎側前齒拔去法

上顎側前亂排ノ圖



第五十五圖

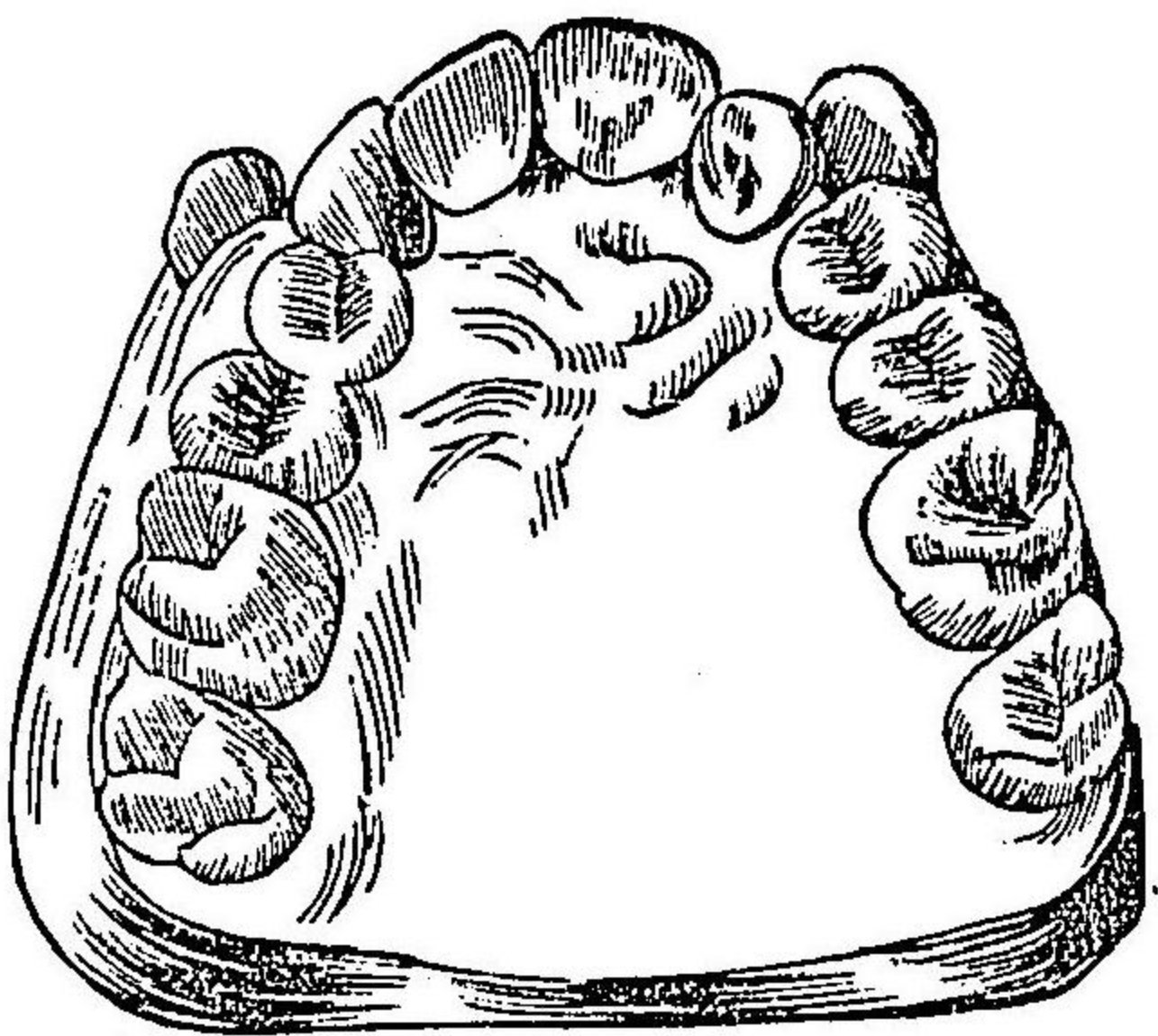
用ヒ併セテ輕微ノ外方運動ヲ加フルヲ可トス。若シ斯法ニ依リ不充分ナル時ハ旋回運動ヲ施サ、ルヘカラスト雖モ既ニ中前齒ノ條下ニ記載シタルカ如キ運動方法ハ側前齒ニアリテハ寧ロ適切ナリト稱スル能ハサルナリ

〔丙〕上顎犬齒 第五十六圖ニ示スカ如キ顎弓ノ外上部ニ

〔乙〕上顎側前齒 第五十五圖ノ如ク顎弓内ニ位スル該齒ヲ拔去スルニ方リテハ第五十三圖ト同形ナル鉗子ヲ使用シ其廣嘴ヲ口蓋面ニ狹嘴ヲ唇面ニ鉗定シ以テ之ヲ拔除スヘシ。此際力ヲ内方ニ

上顎犬齒亂排ノ圖

第五十六圖



全上顎小白齒拔去法

確乎タル旋回運動ヲ試ミ若シ斯シテ齒牙ノ弛緩ヲ致サスンハ宜シク輕微ノ側方運動ヲ企テ先ツ之ヲ口腔中心線ニ向ヒテ施シ次テ反轉スヘキナリ

〔丁〕上顎小白齒 第五十七圖ノ如ク轉位シタル齒牙ハ第

位スル齒牙ヲ拔去セント欲セハ眞直ナル鉗子(第二十二圖)ヲ以テ拔除スルヲ可トス即チ其刃嘴ヲ齒根ノ近心面并ニ遠心面ニ鉗定スルニアリ。蓋シ此等齒牙ノ拔去ハ甚タ困難ヲ感スル所ニシテ最初輕微且

上顎小白齒亂排ノ圖



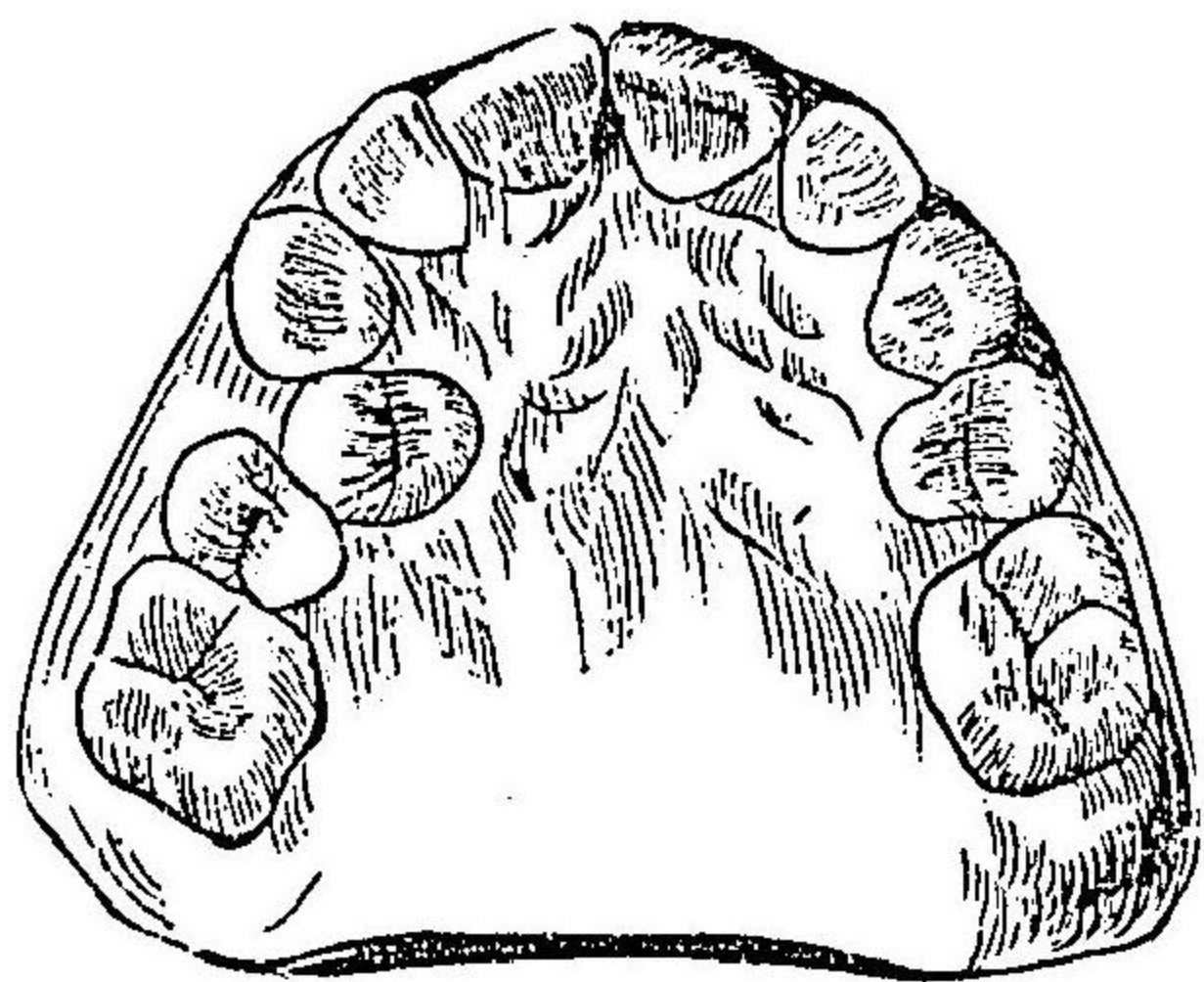
第五十七圖

二十三、二十八圖ニ示セル
鉗子ヲ以テ拔去スルヲ得
ヘシ即チ其刃嘴ヲ齒牙ノ
前面并ニ后面ニ鉗定シ力
ヲ前方及ヒ後方ニ用ヒ齒
槽内ニ於テ動搖スルニ至
ルマテ之カ運動ヲ反復ス
ルニアリ

第五十八圖ニ示スカ如ク轉位シタル小白齒ハ第二十三
二十八圖ノ如キ狹小ニシテ強靱ナル刃嘴ヲ有スル鉗子ヲ
用ヒテ拔除スルヲ得ヘシ。但シ主トシテ力ヲ内方ニ加ヘサ
ルヘカラス

亂排シタル下顎中前齒
拔去法

上顎小白齒亂排ノ圖



第五十八圖

〔戊〕下顎中央前齒 第五十九圖ノ如ク轉位シタルモノハ
普通下顎齒根用鉗子ヲ以テ拔去スヘシ即チ其刃嘴ヲ齒根
ノ近心面并ニ遠心面ニ鉗定シ
力ヲ口ノ中線ニ向ケ次テ之ヲ
反對ニ加フルニアリ。而シテ第
六十圖ノ如ク其集簇甚シカラ
サルモノニアリテハ狹小ニシ
テ強靱ナル内嘴ヲ有スル嘴狀
鉗子(第六十二圖)ヲ以テシ主ト
メ力ヲ外方ニ用ユヘシ。又前齒
ニシテ第六十一圖ノ如ク位スル時ハ外嘴ノ狹小ナル嘴狀
鉗子(第六十三圖)ヲ用ヒ主トシテ力ヲ内方ニ加ヘサルヘカ

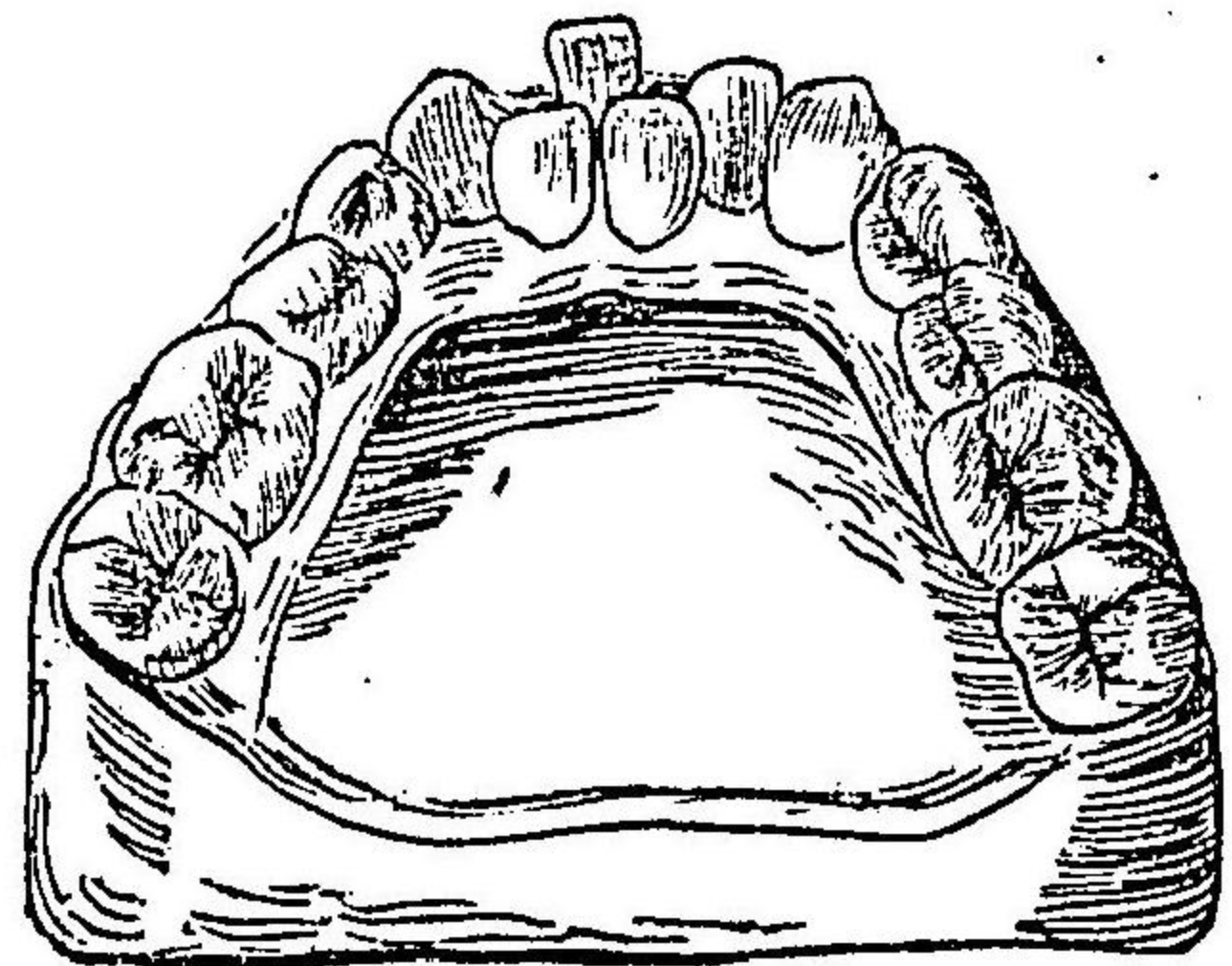
下顎中前齒亂排ノ圖

全 全

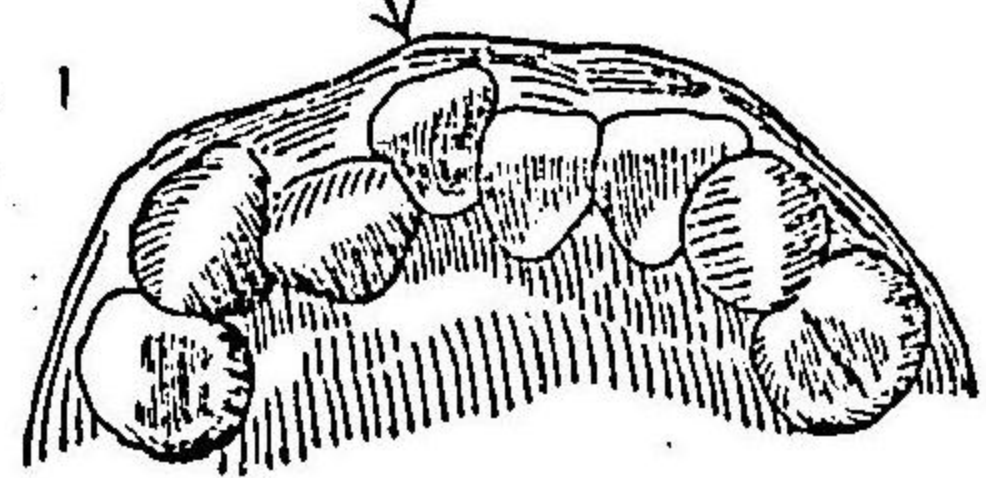
全下顎小白齒拔去法

ヲス

圖九十五第



圖十六第



圖一十六第

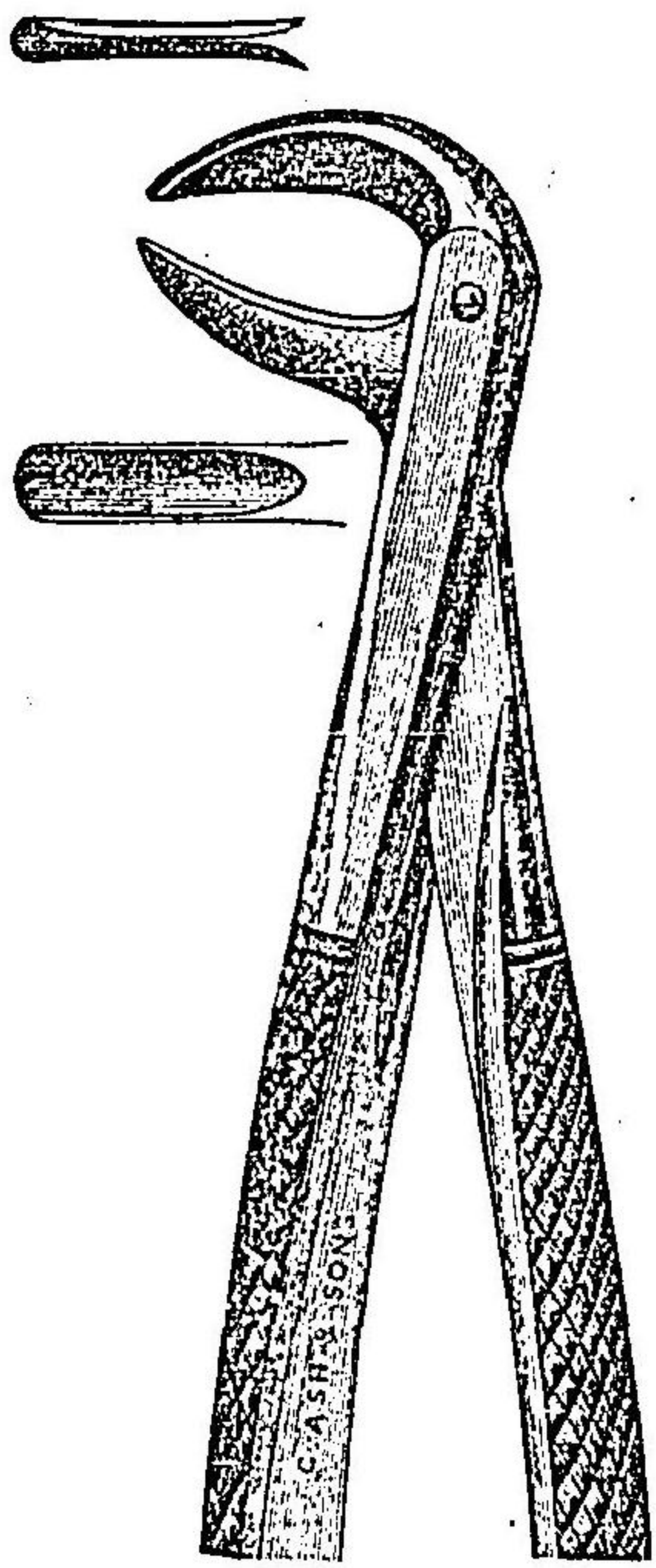


〔已〕下顎小白齒 第六十四圖ニ示スカ如キ齒牙ヲ拔去ス
ルニ方リテハ最モ困難ヲ覺ユルモノニシテ之カ拔齒ニ必
要ナル器械ハ下顎前齒用鉗子第三十八圖或ハ上顎齒根用

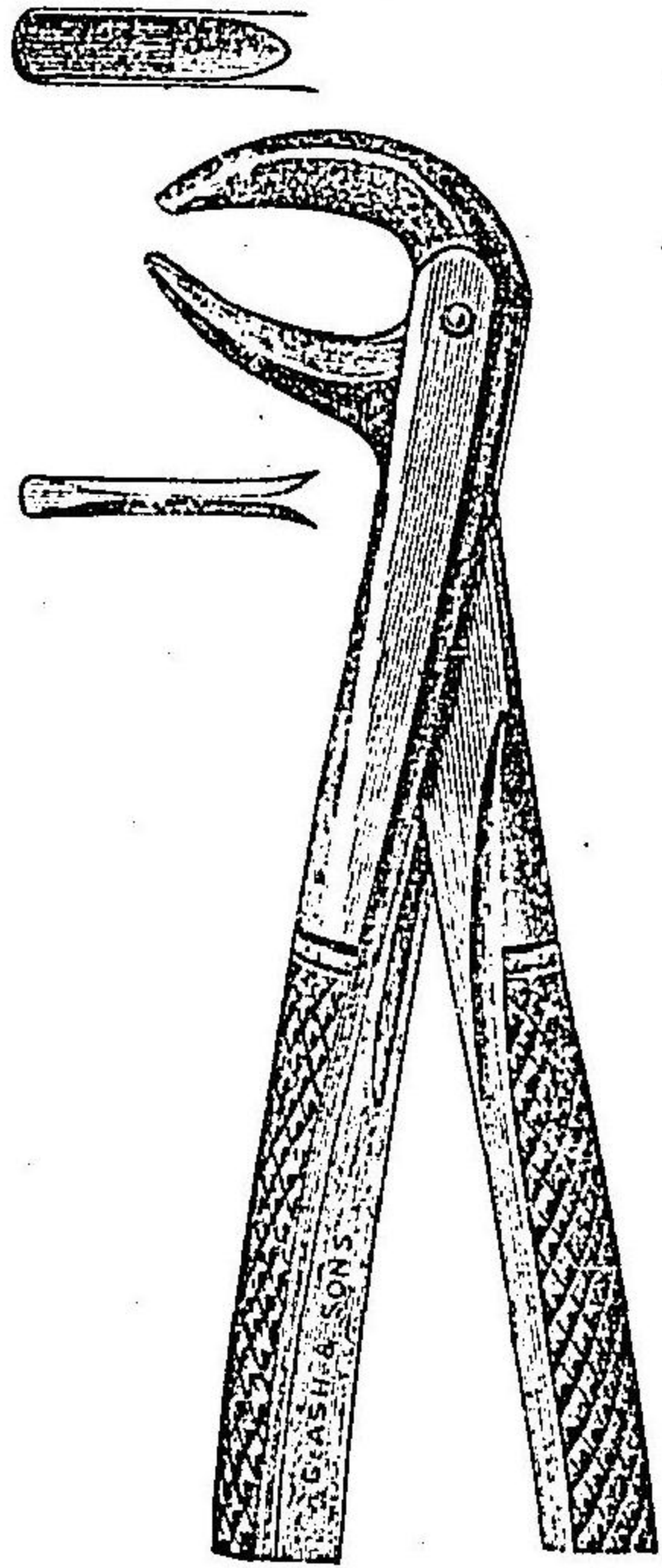
全前齒用鉗子ノ圖

全

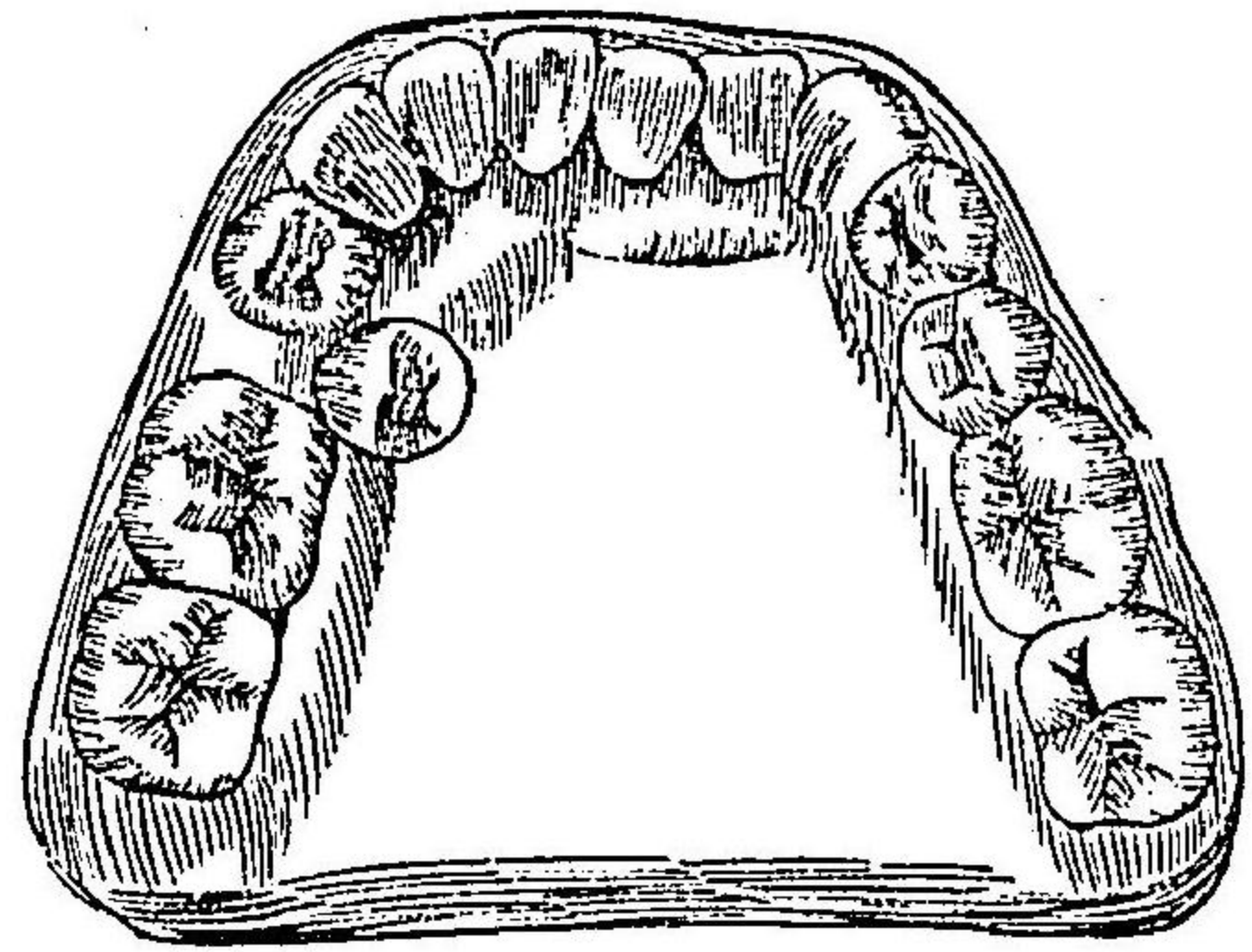
圖二十六第



圖三十六第



鉗子(第二十八圖)リード氏形等ナリトス。蓋シ其使用ニ方リ可成的嘴端ヲ下方ニ推進シテ齒根ノ前面并ニ后面ヲ鉗夾セシメ初メ輕微ノ旋回運動ヲ施シ次テ側方運動ヲ加ヘ齒



第六十四圖

下顎小白齒亂排ノ圖

牙ノ弛緩スルニ至ルマテ之ヲ反覆スヘシ。若シ此際輕躁ニ失セハ突然齒牙ノ碎折ヲ來シ手術ヲシテ益々困難ノ域ニ陷ラシム。齒牙若シ顎弓ノ線内ニ位シ且ツ過度ニ集簇セサル時ハ狹小ナル外嘴ヲ有スル鉗子(第六十三圖)ヲ以テ拔除スル

密偪第三大白齒拔去法

ヲ得。即チ主トシテカヲ口腔ノ中線ニ向ケ併セテ輕微ノ旋回運動ヲ施スニアリ

〔庚〕密偪シタル第三大白齒ハ拔去極メテ困難ナルモノ一ニ居ル。若シ同齒ニシテ深ク骨植スル時ハ注意シテ齒齦ヲ側方ニ壓迫シ以テ可成的齒牙ヲ透視シ易カラシムヘシ。蓋シ此齒牙ノ拔去ニ方リ一定ノ方則ヲ與フルハ誠ニ困難ナルヲ以テ須ラク機ニ臨ミテ自己ノ考案ヲ加フヘキハ論ヲ俟タズ

其拔除ニ就キ最重要ナル器械ハ彎曲シタル挺子(第十四圖)ニシテ其嘴端ハ屢々齒冠下ニ推入スルヲ得ヘク斯ノ確乎タル支撐ヲ得タル後之ヲ挺舉スレハ齒牙ハ輒ク抽出スヘシ。又齒牙ノ時トシテ固ク骨質ニ包裹セラル、トアリ

斯ル際ニハ軟組織ヲ除々ニ側方ニ壓却スレハ齒槽突起ヲ被ヘル骨膜ハ舉上セラレテ充分能ク齒牙ヲ諦視シ得ルカ故ニ適當ノ器械ヲ以テ齒牙ヲ圍擁セル骨質ヲ切斷スル時ハ齒牙ハ顯然露出シ挺子或ハ鉗子ヲ以テ拔去シ得ヘキニ至ルヘシ

其他該齒ノ拔去法ニ就テハ第五章中第三大白齒拔去法ノ條下ヲ参照スヘシ。又拔齒ノ際他ニ傷害ヲ偶發シタル時ハ第四編ニ於テ説明スルカ如ク之ヲ處置スヘシ

Y.I

第八章 拔齒上ニ施スヘキ麻醉法

拔齒ノ際施スヘキ麻醉ヲ區別シテ二種トナス即チ全身麻醉及ヒ局所麻痺是ナリ。但シ全身麻醉法ヲ詳論スルハ素

簡明齒科手術學第二
十一章ヲ參照セヨ

ト此小冊子ノ主旨ニ非サルカ故ニ茲ニハ唯其施行上一二、術者ノ注意スヘキ條項該法ノ顯著ナル利害并ニ麻醉劑撰擇ノ得失ニ就キ數言ヲ費サント欲ス

第一節 全身麻醉法

全身麻醉劑

齒科ニ應用スル麻醉劑ハ酸化窒素或ハ之ニ大氣若クハ酸素ヲ混シタルモノ、依的兒嚼囉仿謨等ニシテ就中酸化窒素ノ使用ハ最モ汎ク且ツ其麻醉ニ至ル時間僅少ニシテ醒覺亦迅速ナルカ故ニ手術上極メテ安全ニシテ其利益迥ニ他品ノ上ニ出ツト謂フヘシ

數年前ヘウキット氏及ヒローウエル氏ハ酸化窒素ニ酸素或ハ大氣ヲ混シテ使用スルノ法ヲ推薦セリ此混和品ハ酸化窒素ノ單用ニ比シ更ニ優等ナリト云フ。今酸化窒素ト酸

拔齒上ニ施スヘキ麻醉法

八十七

酸化窒素混合劑ノ利點

素トテ混合シタル製品ノ利點ヲ舉クレハ左ノ如シ

- 一、麻酔極メテ安靜ナリ
 - 二、口腔粘膜ハ一定ノ程度ヲ超ヘテ弛緩セサルカ故ニ充分齒牙ヲ檢視シ得ヘシ
 - 三、麻酔時間ハ僅ニ數分時ニ過キスト雖モ便宜之ヲ延長スルヲ得ヘシ。然レモ施術ヲ因循持長スルモハ隨テ患者ノ安靜狀態ヲ妨ケ
- 大氣ヲ混合シタル酸化窒素ハ其所長酸素ヲ混シタルモノト大同ニシテ小異アルノミ
- 第三大白齒拔去困難ナル際ノ如キ長キ麻酔ヲ要スル場合ニハ始メ酸化窒素ヲ用ヒ次テ依的兒麻酔ヲ施スヲ可トス。斯際ニ方リ多數ノ術者ハ嘔囉仿謨ヲ賞揚スト雖モ齒科

手術者

ニ於テ此藥品ノ嚴正ナル使用ハ寧ロ困難ニシテ且ツ之ヲ要スルノ場合實ニ稀ナリト謂ハサルヘカラス。而シテヘウキット氏ハ嘔囉仿謨ニ就キ精密ナル研究ヲ遂ケ千八百九十五年十一月發行不列顛齒科協會月報紙上ニ其成績ヲ報告シタリ。蓋シ同著ハ本品ノ使用者ニ對シ最モ價値アル參考書ナリトス

拔牙ノ際全身麻酔法ヲ施スニハ二人ノ手ヲ藉ラサルヘカラス即チ其一人ハ麻酔ヲ施シ且ツ患者ノ狀態ヲ注視シ他ノ一人ハ齒牙ヲ拔去スルニアリテ此方則ハ必ス勵行スルヲ要ス。然リ一人ニシテ齒牙ヲ拔除スルト同時ニ麻酔患者ニ注意スルハ到底爲シ能ハサレハナリ

麻酔劑ノ注意

麻酔法ヲ施スニ方リテハ豫メ患者ノ體格殊ニ心肺ノ諸

臟ヲ精診シテ其健否ヲ檢シ患者ノ能ク麻醉ニ堪ヘ得ルヤ
 否ヤヲ診斷スヘシ。又吸入ヲ施スノ前三四時間ハ固形食餌
 ノ攝取ヲ禁シテ胃腑ヲ空虚ニシ麻醉ニ臨ミテハ緊迫セル
 衣服ヲ脱シテ胸部ヲ裸露シ義齒ヲ箝用セル者ハ之ヲ除去
 セシメ。次テ如何ニ拔牙法ヲ企ツヘキヤヲ考慮スヘシ。此際
 拔牙ノ必要アリト認ムル齒根ヲ檢查スルニ方リテハ其齒
 齦ノ亂刺ヲ避クヘク。又支點ハ之ヲ施術ノ障礙トナラサル
 部位ニアル固植齒上ニ置キ口内ヲ充分檢視シ得ヘキ様注
 意スヘシ。而シテ患者ノ位置ハ前章拔牙法ノ條下ニ記シタ
 ル所ト稍異ニシテ過度ニ頭部ヲ后方ニ傾斜セシムヘカラ
 ス。

拔牙ノ順序

一 麻醉期間ニ數多ノ齒牙ヲ拔去スルハ妨ケナシト雖モ

豫メ其順序ヲ定メ置クヲ要ス。此際疼痛ヲ有スル齒牙ヲ存
 スル時ハ麻醉後直チニ之ヲ拔除スルヲ良トス。又手術中換
 用ニ供スル鉗子ハ豫メ充分整頓シ置キ以テ時間ノ浪費ヲ
 省クヘシ。而シテ一定則トシテ下顎齒牙ハ上顎齒牙ニ先チ
 拔去セサルヘカラス。何トナレハ若シ最初ニ上顎齒牙ヲ拔
 去スル時ハ血液流下シテ下顎齒牙ヲ陰蔽スヘケレハナリ。
 又同一ノ理由ニ基キ凡テ齒根ハ齒牙ニ先チテ拔去スルヲ
 必要ナリトス且ツ動搖セシメタル齒根并ニ齒牙ハ他齒ノ
 拔去ヲ企ツル前必ス之ヲ口外ニ撮出セサルヘカラス。然レ
 此際齒根并ニ齒片若シ齒齦ニ緊着スルアラハ之ヲ放置
 シ患者ノ醒覺シタル後ニ於テ齒齦ヨリ分離スルヲ可トス。
 又鉗子ノ刃嘴間ヨリ滑脱スヘキ傾向ヲ有スル齒牙ハ豫メ

其後方ニ滑脱スルヲ防カンカ爲メ刃嘴ノ後部ニ左指ヲ止ムルヲ良トス

第二節 局所麻痺法

古加乙涅

〔甲〕古加乙涅 ハ「エリスロキシロン」トカ「Erythroxylin Coca.」ノ乾葉ヨリ製スル植物性鹽基ニシテ治療上一般ノ使用ニ供スルモノハ其格魯兒水素酸劑即チ鹽酸古加乙涅ナリトス。而シテ拔牙ノ際ニ於テハ其溶液ヲ軟組織ニ注射スルヲ可トシ單ニ齒齦ニ塗付スルカ如キハ稀有ニシテ而モ奏効確實ナラス。實ニ古加乙涅ハ其効力正確ナラストノ論難アレハ是レ多クハ注射ノ際注意ヲ缺クル所アルニ職因スルモノナリ。蓋シ拔牙時ニ方テハ本品ノ半式ヨリ多カラサル量ヲ注射スヘク且ツ虛弱ナル體質ヲ有スル者ニアリテハ

使用法
微温ナル蒸溜水ヲ用
ニル中ハ更ニ其効ア
リト

間不良ノ徵候ヲ呈スルヲ以テ留心注意スヘシ

使用法 蒸溜水ヲ用ヒテ古加乙涅ヲ二%乃至〇.五%溶液ニ調製シ其半筒乃至一筒ヲ齒槽突起ノ兩側ニ於ケル齒齦ニ注射スヘシ。但シ齒齦ハ其組織極メテ緻密ナルカ故ニ除々ニ藥液ヲ注入スヘク否スンハ其大半ハ注射針ノ周邊ヨリ口内ニ迸出スヘシ。蓋シ注射ノ際ハ常ニ此傾向ヲ生スルカ故ニ術者ハ須ラク左指ヲ以テ針ノ刺入セラル、齒齦上ヲ壓抵スルヲ可トス

如斯シテ注射ヲ施ス時ハ殆ント八分時ヲ費スヘク後チ四五分間之レヲ放置セハ麻痺ノ効力ハ概ネ八分時ヲ保ツヘシ。實ニ古乙加涅ハ局所麻痺劑中最モ其効ヲ奏スルモノナリト雖モ其藥効ノ正確ナルト共ニ往々中毒症狀ヲ伴フ

篤魯巴區古加乙涅

中毒症狀

中毒ノ處置法

「ナキニアラス殊ニ望診ヲ以テ直チニ認定シ得ヘキ程ノ
 虛弱ナル體質ヲ有スル者ニ於テ屢次ナルヲ覺ユ。又篤魯巴
 古加乙涅ハ中毒性ヲ具ヘスシテ古加乙涅ノ麻痺性ヲ有ス
 ルモノ、如ク揚言セラルト雖モ深ク信憑スルニ足ラス
 中毒症狀 古加乙涅ノ使用ニ方リ殊ニ其多量ヲ與フル
 時ハ次ニ記スカ如キ中毒症狀ヲ呈スヘシ(ヘウキツト氏ノ
 報告ニ據ル)即チ

頭痛、眩暈、譫語、惡寒、皮膚ノ濕潤、發汗、脈搏ハ微弱ニシテ緩
 除或ハ迅速ニ其低キ際ニ於テハ之ヲ覺知スヘカラズ、言語
 不調、嘔氣、嘔吐、人事不省、牙關緊急、他筋ノ痙攣、顛癇様發作、瞳
 孔ノ不正或ハ散大、呼吸困難、假死ノ狀態等是ナリ
 處置法 古加乙涅中毒ニ於ケル處置法ハ先ツ迅速ニ作

冷凍劑

用スヘキ衝動劑即チ次炭酸安母尼亞、武蘭泥等ヲ與ヘ若ク
 ハ依的兒ノ皮下注射ヲ施シ以テ血液循環ヲ恢復セシムヘ
 ク。又緊迫セル衣服ヲ脱シテ水平ニ仰臥セシメ其呼吸ニ注
 意シ若シ不良ノ轉歸ヲ取ルアラハ直チニ人工呼吸法ヲ施
 スヘシ。或ハ亞硝酸亞密兒ノ小球ヲ備ヘ置キ機ニ臨ミ手巾
 ニテ破碎シ之ヲ吸入セシムル者アリ是ハ最モ簡便ニシテ
 而モ其効顯著ナルモノナリ
 [乙]冷凍劑 ハ冷却作用ニ因リ局處ノ知覺ヲ鈍麻セシム
 ルモノニシテ此劑中ニハ「コロライド、オフ、エシール」Chloride
 of ethyl「トリール」Coryle(攝氏零度ニ於テ發霧スヘキ比例ヲ
 以テ「コロライド、オフ、エシール」及ヒ「コロライド、オフ、メシール」
 Chloride of Methylヲ混淆シタルモノ)及ヒ「アネスチル」Anestile

冷凍劑使用ノ注意

ヲ含有ス。但シ一般ノ説ニ據レハ此等ノ製劑ハ其効績全カラサルモノ、如シ然レトモ左ノ條項ヲ遵守シ之ヲ使用スル時ハ其効ヲ收ムル亦難キニアラサルヘシ

- 一、齒齦并ニ其近傍部ハ可及的乾燥セシメ且ツ煩及ヒ舌等ハ手巾其他適當ナル物品ヲ以テ保護スヘシ
- 二、拔齒前充分齒齦ヲ冷却セサルヘカラス
- 三、可成的敏捷ニ拔齒セサルヘカラス
- 四、若シ施シ得ヘクンハ手術間ト雖モ發霧ヲ持續スヘシ
- 五、其過大量ヲ使用スヘカラス

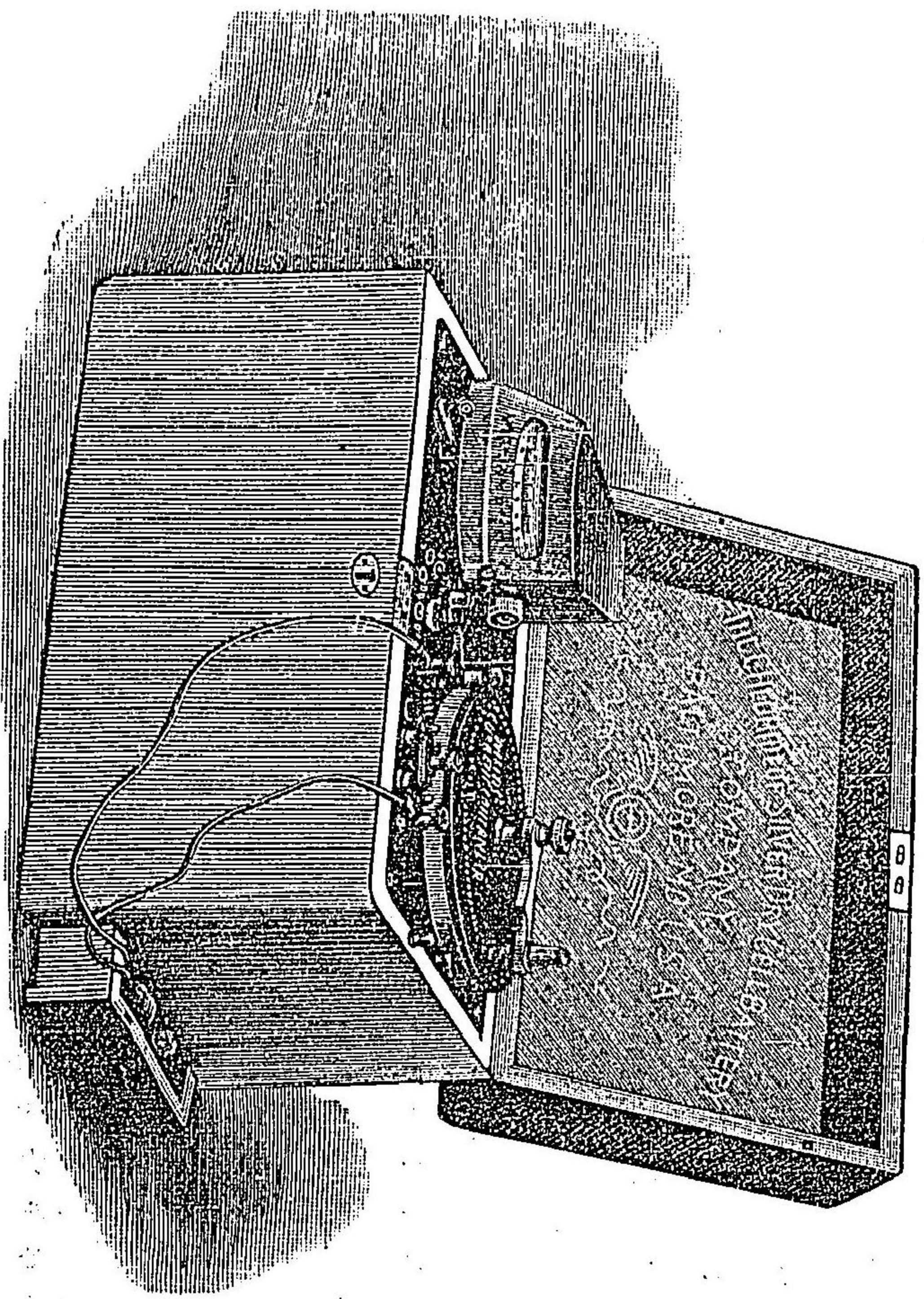
冷凍劑ハ前部齒ニ於テハ其施用容易ナリト雖モ後部齒ニアリテハ常ニ困難ヲ感スヘシ

電氣透藥法

〔丙〕電氣透藥法 ハ輒近ノ發明ニ係リ奏効確實ナルモノ、如シ。是ハ電氣作用ニ由リテ藥品ヲ組織内ニ滲透シ以テ其部ノ知覺ヲ鈍麻セシムル法ニシテ之レニ使用スヘキ藥品ハ鹽酸古加乙涇醋酸古加乙涇「ユーカイン」Eucaine 或ハ「ガイヤコカイン」Gyacoaine. 等ナリト雖モ就中二〇%乃至五〇%鹽酸古加乙涇五%乃至一〇%ノ「ユーカイン」ヲ賞用ス

左ニ圖スルハ米國鹽化銀乾燥電池會社ノ製作ニ成ル電氣透藥器ニシテ其第六十五圖ハ電池、節電器、并ニ電流計ヲ表シ第六十六圖ハ積極導子、第六十七圖ハ消極導子ヲ示ス。蓋シ積極導子ハ恰モ鉗子狀ヲ呈シ其各端ニハ盃狀護膜ヲ附シ以テ齒齦ノ兩側ヲ抱擁セシム。又消極導子ハ殆ント護

第 五 十 六 圖 電 氣 透 藥 器 之 圖

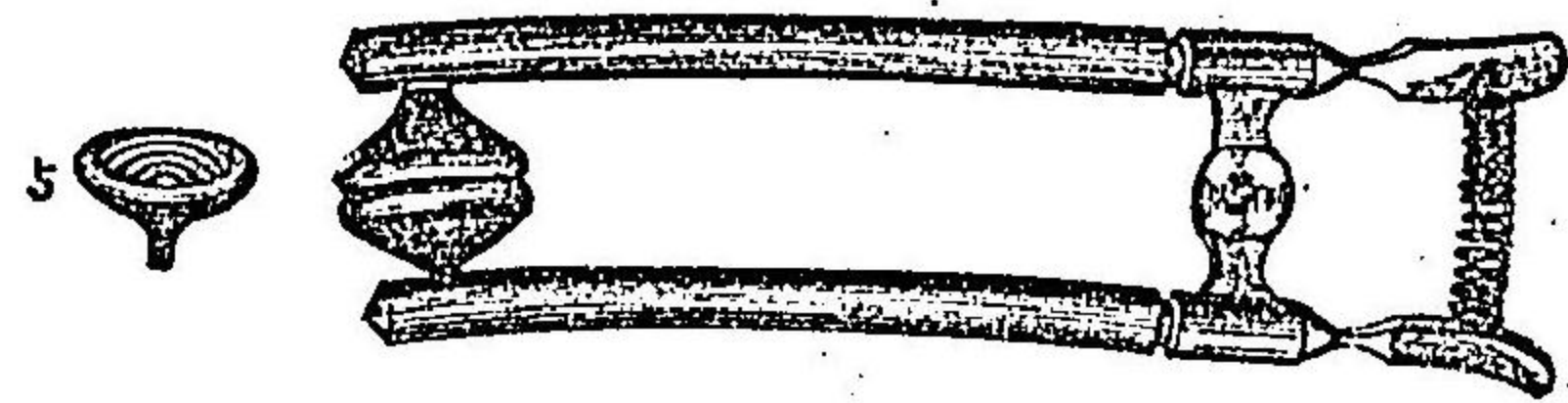


拔齒上ニ施スヘキ麻酔法

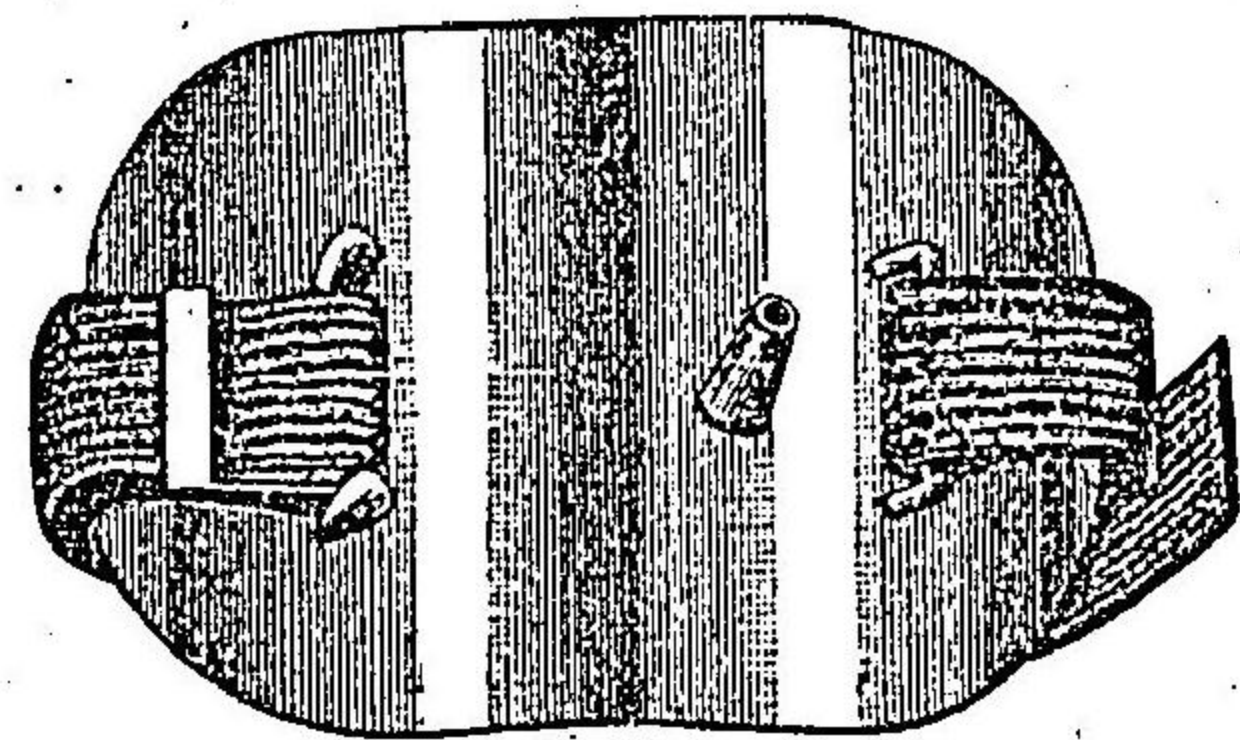
九十八

復釜導子ノ圖
滑極導子ノ圖
棒狀導子ノ圖

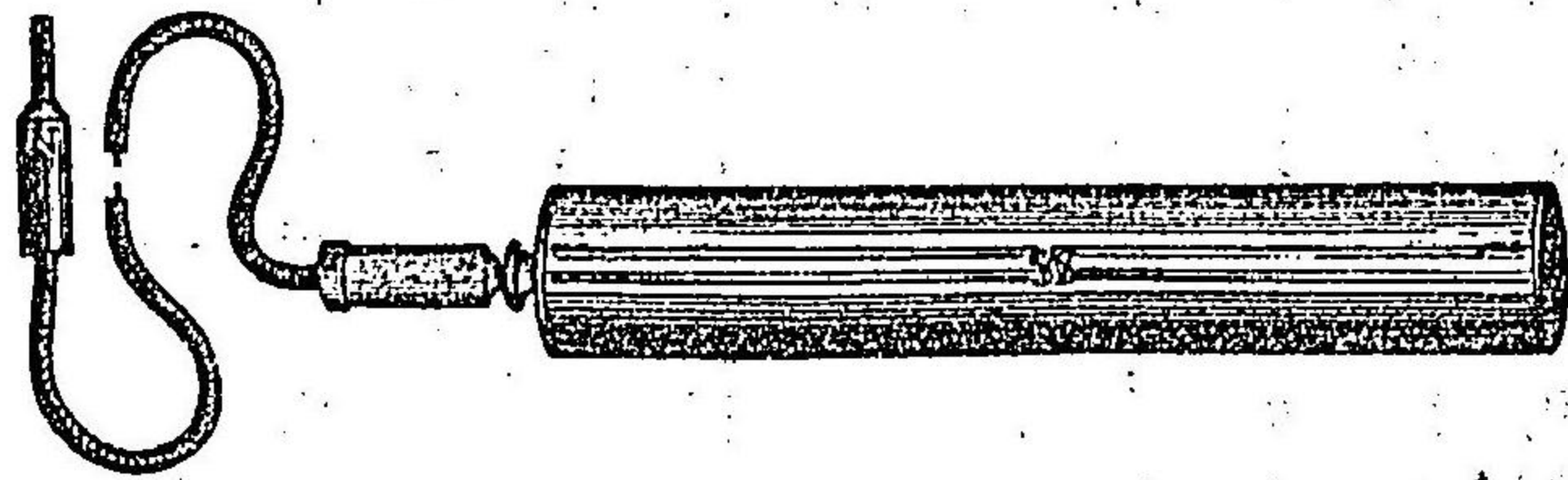
第 六 十 六 圖



第 六 十 七 圖



第 六 十 八 圖



拔齒上ニ施スヘキ麻酔法

九十九

電壓力

使用法

謨保持器 Rubber dam holder ニ類シ患者ノ手腕ニ接觸セシムル
 ニアリ其他消極導子ニ棒狀及ヒ圓形ノ二種アリ一ハ患者
 ノ掌中ニ把握セシメ一ハ頰部ニ觸接セシム。而シテ第六十
 八圖ハホーリングス、ワーズ氏ノ棒狀導子ヲ示ス
 電壓力ハ患者ノ體質并ニ軟組織ノ狀態如何ニ關スルヲ
 以テ玆ニ一定スル能ハスト雖モ概ネ十密度^{ボルト} Volt 乃至三十
 密度ニシテ其時間ハ十分乃至三十分ヲ要ス
 使用法ハ先ツ手腕導子ヲ消極即チ青色連絡線ニ接續シ
 之ニ濕潤シタル小布ヲ間置シテ患者ノ手上ニ接觸シ……或
 ハ棒狀導子ニ濕潤シタル小布ヲ纏絡シ患者ヲシテ之ヲ把
 握セシメ……次テ複蓋導子ヲ積極即チ赤色連絡線ニ接續シ
 藥液ニ蘸シタル綿球ヲ蓋内ニ貼置シテ患齒ノ齒齦ヲ兩側

施術時ノ注意

ヨリ抱擁セシメ以テ除々ニ節電器ノ指針ヲ廻轉シ漸次ニ
 電壓力ヲ高進セシムヘシ
 本術ヲ施スニ方リ注意スヘキ二三ノ要項ヲ擧グレハ左
 ノ如シ
 一、腦心肺等ノ病ニ罹レル者或ハ分娩ニ近キ妊婦等ハ
 強流ヲ通セサルカ若クハ禁忌スヘシ
 二、神經質ノ者ニアリテハ恐怖ノ念ヲ懷キ神經的發作
 ナ惹起シ易キヲ以テ注意スヘシ
 三、消極導子ヲ接觸或ハ把握セシムルニ方リ濕潤シタ
 ル布片ヲ以テ之ヲ纏絡シ且ツ嵌入セル指輪其他ノ
 金屬片ヲ除去スヘシ
 四、積極導子ノ接觸スヘキ齒齦部ハ小布ヲ以テ之ヲ被

ヒ若クハ虞利設林ヲ塗布スヘシ然ル時ハ其腐蝕ヲ減却シ得ルモノナリ蓋シ齒齦ノ腐蝕ハ主トシテ藥液ノ不純ナルニ歸因ス

五、電壓力ヲ急劇ニ増進セシムヘカラス

六、可成的藥液ノ漏洩唾液ノ浸潤ヲ防クヘシ

七、導子ヲ除クノ際ハ節電器ノ指針ヲ零度ニ還歸シ移

電器ノ槓杆ヲ絶緣點offニ進メシムヘシ

其注意ニ至テハ節ニ以上ノミニ止マラスト雖此小冊子ノ敢テ能クスル所ニアラズ故ニ后編ヲ待テ更ニ詳説セント欲ス

第四編 拔齒ノ困難偶發症并ニ

繼發症

拔齒術ヲ施スニ方リ猶ホ外科手術ニ於ケルカコトク或ル困難又ハ偶發症若クハ繼發症ニ遭遇スルト往々ニシテ之アリ今次ノ數章下ニ於テ分類シテ之ヲ説カン

第一、齒牙ニ關スル困難、偶發症并ニ繼發症

第二、顎骨ニ關スル困難、偶發症并ニ繼發症

第三、軟組織ニ關スル困難、偶發症并ニ繼發症

第四、麻酔ヲ施シ拔齒スル際ニ生スル困難、偶發症并ニ繼發症

繼發症

第五、雜種ノ困難、偶發症并ニ繼發症

第一章 齒牙ニ關スル困難偶發症

并ニ繼發症

齒牙并ニ齒槽突起ノ不當ナル抗抵

〔甲〕齒牙并ニ齒槽突起ノ不當ナル抗抵 齒牙ヲ拔去スルノ際甚シキ抗抵ニ逢フコトアリ此ハ往々遭遇スル所ニシテ殊ニ強壯ナル體質ヲ有スルモノニ於テ屢次ナルヲ覺ユ。又孤立シタル齒牙ハ連接シタルモノヨリ常ニ固植セリ之レ全ク其周圍ヲ圍擁スル骨質ノ緻密ナルニ歸ス。若シ施術ノ際普通齒牙ヨリ抗抵稍大ナルヲ覺ヘハ少シク注意スルノミヲ以テ之ヲ發見スル敢テ難キニアラス。而シテ不當ナル抗抵ニ遭遇スル時ハ稍異ナル方向ニ動搖シテ之ヲ拔去ヲ試ミサルヘカラス蓋シ此豫防ヲ施サハル時ハ壓力一方ニ偏スルカ故ニ齒牙并ニ齒槽突起ノ破壊ヲ將來スヘシ。但シ

齒牙ノ碎折

拔齒ニ方リ困難ヲ感スル時ハ其手術ヲ中止シテ患者ヲ去ラシメニ三日ヲ經過シタル后再ヒ新シキ方法ヲ企ツルヲ可トス然ル時ハ曩ニ拔齒セント欲シカヲ加ヘタル際ニ於テ惹起シタル焮衝ノ結果ニ因リ齒牙ハ弛緩スヘキヲ以テ輒ク拔去スルヲ得ルニ至ルヘシ

不當ナル抗抵ノ原因ハ左ノ如シ

- 一、齒槽突起ノ過度ニ緻密ナルモノ
- 二、齒分岐或ハ彎曲シタル齒根ヲ有スルモノ
- 三、齒根膜炎ニ因テ生セル齒根形狀ノ變化倍生骨瘤

〔乙〕齒牙ノ碎折 拔齒ノ際ニ於ケル齒牙碎折ノ主ナル原因ハ次ノ如シ

- 一、恰當ナラサル鉗子ノ使用

二、齒槽ヨリ齒牙ヲ弛緩セシムルニ方リ不正或ハ贅力
ノ供給

齒牙ノ破碎ヲ來シタル時ハ患者ヲシテ出血ノ退止スル
ニ至ルマテ口内ヲ合嗽セシメ綿球ヲ以テ齒槽ヲ拭淨シ其
破片ヲ拔去スル前ニ臨ミ探針ヲ以テ齒齦縁ヲ検査セサル
ヘカラス。而シテ破碎シタル齒根片ヲ拔去スルニ方リテ往
々失策スルコアリト雖此際種々ノ方法ヲ試ムルハ宜シ
カラス。若シ第二次ノ手術ニシテ亦奏効セスンハ宜シク二
三日間休止シ必要ニ臨ミテ更ニ施術スヘシ然ル時ハ齒牙
ハ概ネ痲衝ノ爲メニ弛緩シ且ツ出血既ニ退ムヲ以テ充分
ニ齒根ヲ諦視シ得テ大ニ手術ヲ容易ナラシム。但シ一旦手
術ヲ中止スルニ方リテハ姑ク患者ニ鎮痛合嗽劑ヲ投與シ

他齒ノ破碎

齒髓若シ暴露セハ石炭酸或ハ硝酸ヲ塗布スヘシ。又齒根ノ
三分ノ一以下ヲ殘留スル時ハ必スシモ不快ノ感覺ヲ與テ
ルモノニアラサルヲ以テ之ヲ放置スルモ敢テ妨ケナシ然
レハ斯ル際ニハ后日障害ヲ惹起スルコトナキニアラズ故ニ
豫メ之ヲ患者ニ諭告スルヲ得策ナリトス。
〔丙〕他齒ノ破碎 嘴狀鉗子ヲ以テ下顎齒牙ヲ拔去スルニ
方リ上顎齒牙ノ破碎ヲ招來スルコトアリ。此過失ハ全ク技術
ニ熟練セサルノ結果ニシテカチ外方ヨリモ寧ロ上方ニ用
ユル際突然齒牙ノ齒槽ヨリ脱出スルニ依リテ生スルモノ
ナリ。然レハ其多クハ過度ノ抗抵ヲ有スル下顎齒牙拔去ノ
際ニ起ルモノナルカ故ニ鉗子交叉點上ニ左拇指或ハ他齒
ヲ措キ之ヲ保護スルヲ可トス。

又挺子使用ノ際其突起ノ滑脱ニヨリテ隣齒ノ破碎ヲ招クアリ

集簇齒或ハ不正齒

〔丁〕集簇齒或ハ不正齒ノ拔去法ハ既ニ第三篇七章ニ記載シタルヲ以テ茲ニ蛇足ヲ添エス

健齒ノ過失拔去

〔戊〕健齒ノ過失拔去ハ常ニ術者ノ不注意ヨリ生スル所ニシテ斯ル過失ニ遭遇シタル時ハ毫モ周章狼狽スルヲ須ヒス再ヒ齒牙ヲ齒槽内ニ嵌入シ結紮糸ヲ以テ之ヲ隣齒ニ緊摶スヘシ。齒髓若シ變性或ハ焮衝ノ症狀ヲ顯ハス時ハ之ヲ摘去シ且ツ齒根ハ充分處理シテ充填ヲ施シ以テ再植ヲ圖ルヘシ

隣齒ノ過失拔去

〔巳〕隣齒ノ過失拔去ハ大抵集簇齒ヲ拔去スル際ニ起リ就中永久第一大臼齒ノ拔除時ニ於テ偶發スル最モ多キ

モノ、如シ。而シテ之ニ連累スル隣齒ハ即チ第二小臼齒ニシテ該齒ト共ニ其齒槽ヨリ抽出セラルヘシ。此過失ヲ未然ニ防カント欲セハ動搖ノ傾向ヲ有スル齒上ニ拇指ヲ止ムルヲ良トシ且ツ唯齒牙ヲ拔去スルニ足ルタケノ力ヲ用ヒ拇指ノ指導ニ從フテ施術スヘシ。斯ノ如クスルモ尙ホ過失ヲ招クアラハ再ヒ之ヲ齒槽ニ箝定シ前項説ク所ニ準シテ所置セサルヘカラス

〔庚〕未萌小臼齒ノ過拔ハ或ハ避クヘク或ハ避クヘカラサル過失ナリ。蓋シ未萌小臼齒ニシテ齶朽シタル乳臼齒根ニ依リ密ニ包裹セラル、際ノ如キハ殆ント避クヘカラスト雖モ乳臼齒根拔去ノ際ニ於テ過度ノ力ヲ加ヘサルトキハ尙ホ或ハ之ヲ免ル、ヲ得ヘシ。但シ該齒根ノ輒ク拔除シ

能ハサルヲ豫期セハ寧ロ之ヲ放擲スルヲ良策ナリトス

第二章 顎骨ニ關スル困難偶發症

并繼發症

齒槽突起ノ破碎

〔甲〕破碎 齒槽突起小片ノ破碎并ニ剝離ハ屢々遭遇スル所ナリト雖モ重大ナル傷害ニアラサルコソ幸ナレ蓋シ斯ハ幾ト避クヘカラザル遇發症ニシテ時トシテ齒根及ヒ齒槽突起ノ間ニ鉗子ノ刃嘴ヲ推入スル代リニ齒槽突起ノ外側ニ刃嘴ヲ鉗定スルニ際シテ生ス

顎骨ノ破碎

劇甚ノ破裂ハ往々載籍ニ散見スル所ニシテロンドン齒科病院ニ於テ不熟練ナル術者ニヨリ下顎右側第一大臼齒ヲ拔去スルニ方リ水平ノ方向ニ於テ顎骨ヲ破碎シ第一

第二小臼齒并ニ犬齒ハ全ク骨體ヨリ分離シタルカ如キ大破裂ヲ來セシトアルヲ録セリ又サルター氏ハ三十五才ナル婦人ニ起レル顎骨ノ大破碎ヲ記セリ夫ハ上顎中前齒拔除ノ際ニ偶發シタルモノナリ即チ其右側中前齒拔去ニ方リ稍強力ヲ用ヒタリシカ其齒槽突起ノ前方全部ハ密ニ齒根ニ結合シテ共ニ拔去セラレ又其左側中前齒ヲ拔去スルニ方リ甚シキ強力ヲ要シタリシカ此際骨ノ破碎ヲ來シ其一分ヲ檢スルニ上顎骨ノ内部ニ位スル骨片ハ唯軟組織ニ依リテ其位置ニ稽留スルノミナルヲ發見シタリ。……縦裂傷ハ犬齒ノ側部ヨリ鼻根ニ達シ殆ント水平ノ方向ニ於テ反對側ニ波及シ他縦裂傷ト連合セリ其損害ハ全顎骨ヲ通シテ前部ヨリ後部ニ達シ口蓋板ニ於テ齒槽界線ヨリ

上顎結節ノ破碎

四分ノ三、一吋ヲ隔ツル損傷ヲ生シテ大出血ヲ來セリ。……カットリング氏ノ報告セル一例ハ傷害ノ更ニ甚シキモノナリ即チ挺子ヲ用ヒテ上顎第三大白齒ヲ拔除スルニ方リ上顎結節、上顎竇床板及ヒ蝴蝶骨一分ノ破裂ヲ招來シタリキ

上顎結節ノ破碎ハ上顎第三大白齒拔去ノ際ニ於テ生スルニアリ。而シテニツコル氏ハ上顎永久第二大白齒拔除ノ際生シタルヲ記載シ。又エル、マセソン氏ハ永久第一大白齒拔除ノ際其第一、第二大白齒間ノ線ニ於テ上顎骨ノ橫裂傷ヲ招キ又下顎枝ノ直達橫裂傷ヲ生セルモノヲモ記載セリ

處置法 齒槽突起小部分ノ破碎ハ特ニ之ヲ處置スルニ及ハス唯其碎片ヲ驅除セハ可ナリ然レモ最モ大ナル破碎

齒槽突起ノ骨疽

上顎竇内ニ齒牙ノ陷沒

ヲ生シタル時ハ適當ナル副木ヲ以テ其位置ニ固定セザルヘカラス。其詳説ニ至リテハ之ヲ齒科外科手術學ニ譲ラン

〔乙〕齒槽突起ノ骨疽 ハ拔齒後繼發スルニアリ是ハ拔齒ノ際不當ノ壓迫ヲ加フルニ由リ或ハ創口ニ生セル或ル腐蝕作用ノ結果ニシテ其處置法ハ先ツ防腐藥ヲ貼シ若クハ除臭的口洗劑ヲ用ユルヲ良トス。而シテ腐骨片ノ全ク生活組織ヨリ剝離スルニ至テハ適當ナル鉗子ヲ以テ之ヲ摘除スヘシ

〔丙〕上顎竇内ニ齒牙ノ陷沒 スルハ上顎永久第二小白齒及ヒ永久第一大白齒頰根ヲ拔除スル際ニ於テ多ク之ヲ見ル。而シテ上顎竇ニ陷沒シタル齒根ノ一分尙ホ齒槽内ニ殘留セハ寧ロ之ヲ放置スルヲ宜シトス若シ強ヒテ之ヲ驅除

ヲ企ツル時ハ反テ全然齒根ヲ上顎竇内ニ推進スルノ虞アレハナリ。蓋シ齒槽窩ハ防腐的洗劑ヲ用ヒテ絶エズ充分ナル清淨ヲ保續セシムルハ概ネ後害ヲ貽スナシ

齒根若シ全然竇内ニ陷没シタル時ハ竇口ヲ開大シ四乃至五号ノ容積ヲ有スル耳科用シリンジ[Syringe]ヲ以テ強ク竇内ヲ洗滌スヘシ。蓋シ其目的タル灌水ノ迸流スルニ方リテ齒根ノ竇内ヨリ流出スルヲ圖ルニアリ。然レモ斯法ニシテ目的ヲ達セスンハ更ニ可撓性鋼線上ニ固定シタル「ガツ」^{ゴツ}「タベルカ」^{タベルカ}製ノ小形ナル「拘子」^{コウジ}「Seop」ヲ以テ齒根ヲ拘出スヘシ。若シ之ニ依リテ尙ホ奏効セスンハ姑ラク防腐液ヲ用ヒテ充分竇内ヲ洗滌スルニ止ムヘシ。然ル時ハ齒根永ク竇内ニ殘留スルモ敢テ後日ノ害ヲ貽スモノニアラズ。但シ患者

膿腫竇内ニ齒牙ノ推進

下顎骨ノ脱臼

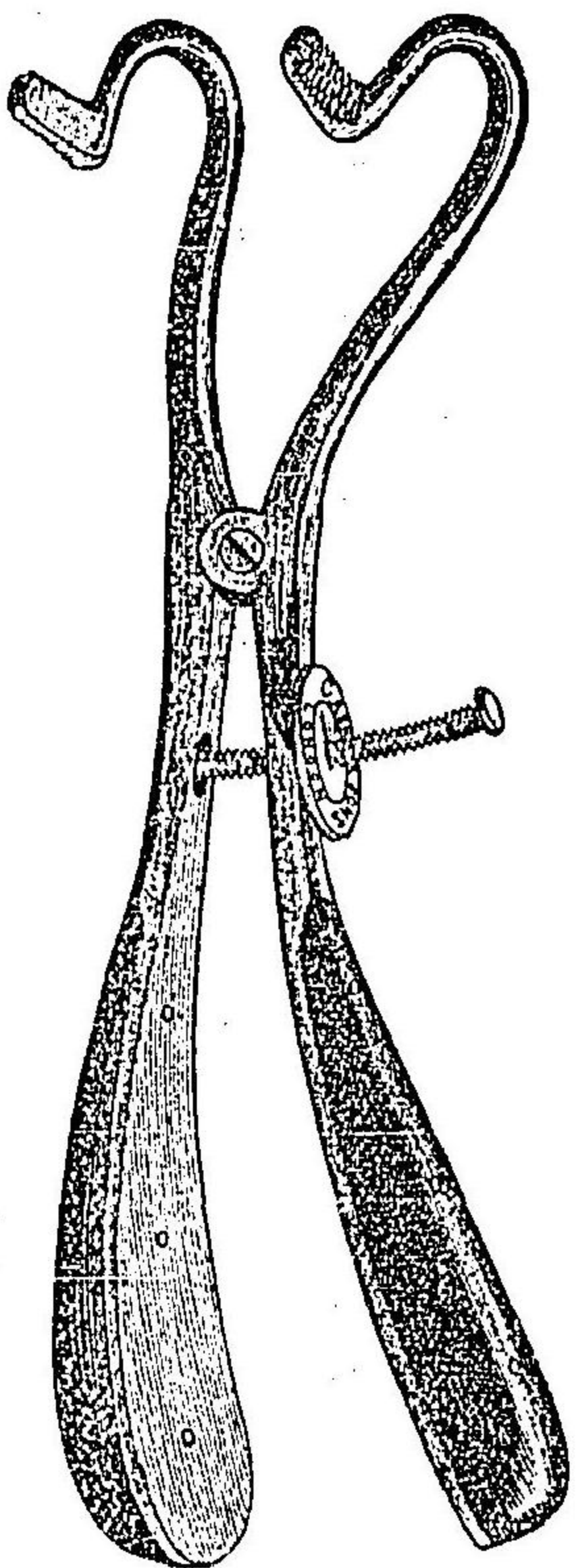
ノ血統中ニ顎ノ皮膚ニ罹レル者アヲハカメテ齒根ノ驅除ヲ圖ラサルヘカラス。實ニ斯ノ如キ患者ニ於テ齒牙ノ上顎竇ニ陷没シタル後、癌腫ヲ繼發シタル實驗ハ「トランサクシヨン、オドントロジカル、ソサヘチー」[Transaction Odontological Society. 第二卷十五頁ニ記載セリ

〔丁〕膿腫竇内ニ齒牙ノ推進 若シ此過失ニ遭遇シタル時ハ上顎竇ニ於テ説明シタルト同一ノ方法ヲ以テ處置スルヲ得ヘシ

〔戊〕下顎骨ノ脱臼 下顎齒牙拔去ノ際過度ノ壓下力ヲ加フルニ方リ顎ヲ支撐シテ其抵抗力ヲ施サ、ル時ハ下顎片側或ハ兩側ノ脱臼ヲ將來スヘシ。此過失ハ又全身麻醉ノ際「マソン氏開口子」^{ガツ}「Case」(第六十九圖)ヲ使用シ過度ニ開口セシ

マソン氏開口子ノ圖

第六十九圖



ムルヨリ生シ。尙ホ不當ノ壓力ヲ加ヘサルモ嘗テ脱臼シタルカ或ハ脱臼スヘキ習慣ヲ有スル者ニ於テモ生ス

整復法 手巾ヲ以テ纏絡シタル拇指ヲ下顎兩側ノ臼齒上ニ置キ他指ヲ頤下ニ抵ツルニ依リテ整復スルヲ得ヘシ即チ拇指ヲ以テ顎骨ノ后部ヲ后下方ニ強壓シ同時ニ他指ヲ頤下ニ抵テ頤部ヲ擡舉スレハ下顎骨髁狀突起ハ關節結

整復法

節上ヲ滑過シ關節窩ニ箝入スヘシ。或場合ニアリテハ斯法ヲ施スニ困難ナルトアリ然ルハ患者ヲシテ椅子ニ凭ラシメ塞子ヲ兩側臼齒上ニ裝置シテ頤部ヲ上方ニ強壓スヘシ。而シテ其整復后ハ四尾繙帶ヲ施シ且ツ過度ノ開口ヲ禁忌セサルヘカラス

牙關緊急

〔巳〕牙關緊急 ナ生シタル時ハ開口シ難キヲ以テ拔齒ニ

方リ通常ヨリ一倍ノ困難ヲ醸スヘシ。此症ハ下顎臼齒ニ關スル炎症ノ結果ニ由ルモノ多キニ居ル。斯際ニハ全身麻醉ヲ施シ然ル后マソン氏開口子ヲ以テ強ク開口スルヲ可トス。若シ又顎閉鎖筋ノ強直ニ起因セハ宜シク依的兒ヲ使用シテ筋肉ノ抗抵ヲ除クヘシ。蓋シ酸化窒素ハ豫期ノ効果ヲ收メ難シトス。

齒齦ノ裂傷

第三章 軟組織ニ關スル困難偶發症

并ニ繼發症

〔甲〕齒齦ノ裂傷 拔齒ニ方リ甚シキ困難ヲ感スルハ隨テ軟組織ノ傷害ヲ招クヘク其他齒齦ノ齒牙ト過度ニ緊着セル時ニモ亦裂傷ヲ來スヘシ此過失ハ下顎第三大臼齒拔去ニ方リ屢々遭遇スル所ニ弛緩齒拔除ノ際ニモ亦必無テ期スヘカラス。是故ニ過度ニ齒牙ニ緊着セル齒齦ハ豫メ齒齦缺或ハ刀ヲ以テ切開スヘシ然ル時ハ不測ノ裂傷ヲ誘發スルコトナク能ク鉗子ヲ以テ拔齒スルヲ得ヘキナリ

齒齦ノ裂傷ニハ鎮痛并ニ收斂的含嗽劑ヲ投與スヘシ

〔乙〕舌ノ損傷 ハ酸化窒素麻醉ノ際ニ生スルヲ多シトス

舌ノ損傷

是レ一ニハ麻醉間舌ノ膨脹スルト一ニハ患者ノ一致運動ヲ喪失スルトニ因ルト雖モ手術間注意ノ周到ヲ缺クテ亦之カ原因タラスンハアラス殊ニ挺子ヲ使用スルニ方リテ其多キヲ見ル。若シ過テ舌ノ甚シキ裂傷ヲ招キタル時ハ齒齦缺ヲ以テ其裂片ヲ剪除シ防腐的含嗽劑ヲ以テ創面ヲ清潔ニ保ツヘシ。又刺傷ノ爲メ出血ヲ來ス時ハ舌ヲ前方ニ牽引スヘシ。斯ノ如ク施サハ假令充分ニ刺痛ヲ鎮ムルニ及ハサルモ大抵止血ノ効ヲ收ムルヲ得ヘシ。但シ刺傷ノ爲ニ舌動脈ヲ損害シタランニハ指ヲ舌ノ后方ニ置キ之ヲ前方ニ牽引シ以テ舌動脈ヲ舌骨ニ向ヒテ壓抵シ次テ出血部ヲ探索シテ毀傷サレタル血管ヲ捻轉スヘシ。若シ之ニシテ尙ホ止血セスンハ烙鐵法ヲ試ミ或ハ舌動脈ノ結紮法ヲ擇マサ

下唇ノ打傷

ルヘカラス

〔丙〕下唇ノ打傷　ハ上顎小白齒及ヒ大白齒拔除ノ際ニ生
スルモノニシテ開口ノ不充分ナルト眞直ナル鉗子ヲ使用
スルトニ起因ス

下顎神經ノ損傷

〔丁〕下顎神經ノ損傷　下顎神經ハ下顎大白齒并ニ小白齒

拔去ノ際ニ於テ損傷ヲ蒙ルコトアリ然ル時ハ其神經分岐部
ノ知覺ヲ乏失シ且ツ唾液ノ漏洩過多ヲ來スハ殆ト常例ナ
ルカ如シ。但シ知覺ハ漸々舊ニ復シ裂傷ノ際ニ於テハ神經
ハ常ニ癒合スヘシ

セウキル氏ハ小孔并ニ細溝ヲ有スル下顎智齒根ヲ通シテ
明カニ下齒槽神經ノ通過セルヲ記載セリ

拔牙后ノ出血

〔戊〕拔牙后ノ出血　ハ重大ナル繼發症ノ一ニシテ最モ敏

捷ナル手術ヲ要スルモノナリ。而シテ其出血ハ血友病ノ素
因ヲ有スル者ニアリテハ之ヲ豫知スルニ難カラス且ツ其
病理ニ於テモ稍定説アルモノ、如シ。ワルサム氏ハ血友病
ヲ以テ血液中全ク纖維素ヲ缺乏スルニ基クト稱セリ。然レ
凡出血ハ斯ル素因ヲ有セサル者ニモ亦之ヲ見ル例令ハ齒
牙ニ通スル動脈齒根端周圍ノ炎症ニ由リテ周圍ノ骨ニ膠
着シテ其收縮作用ヲ喪フ際ニ於ケルカ如シ。或ル状態ニア
リテハ施術スルト否トニ關セス毎月一定時ヲ限リテ出血
ヲ來スコトアリ此際齒牙ヲ拔去セハ出血ヲ將來スヘシト雖
モ時ヲ經レハ自ラ退止スヘク未タ曾テ過度ノ出血ヲ來シ
タルコトアラス

出血ハ毎ニ之ヲ三期ニ區別ス即チ初期、中期及ヒ後期是

*
後食子酸ニテ
之ヲ八包ニ分チ止血
スルニ至ルマテ二時
間毎ニ一包ヲ與フヘ
シ

ナリ。而シテ口内ニアリテハ屢々初期ヨリ中期ニ涉ルノ出
血ヲ見ルコトアリ。此初期出血即チ拔齒後直チニ生スル出血
ノ處置ハ重要ナルモノニアラサレトモ出血若シ劇甚ナル
并ハ合嗽劑トシテハマメリス。丁幾チ水中ニ滴下シ患者ニ
與フルチ以テ尤モ有効ナリトス。又同時ニ沒食子酸凡十五
爪ヲ頓服セシメ尙ホ出血ノ退止スルニ至ルマテ二三時間
毎ニ同量ノ内服ヲ命スルチ可トス。斯ノ齒槽窩ハ沒食子酸
其他ノ止血藥ニ蘸シタル綿球ヲ以テ弛ク栓塞スヘシ
中期及ヒ後期出血ハ劇甚ナル性質ヲ有スルモノニシテ
夜間ニ於テ發作スルチ常トス。而シテ中期出血ヲ惹起シタ
ル時ハ之カ處置法ヲ施スニ方リ先ツ二箇ノ要點ヲ考定セ
サルヘカラス……即チ第一ハ其出血ハ齒齦ヨリスルカ或

×過格魯兒鐵ハ止血
劑トシテ禁忌セサル
ヘカラス本品ハ概ネ
遊離酸ヲ含有スルチ
以テ齒牙ニ傷害ヲ與
フシ且ツ甚シク齦脈
ノ凝固ヲ促シク故チ
腐肉ヲ生スルカ故チ

ハ齒槽窩ヨリ來ルカヲ鑑定シ第二ハ其血液ハ凝泣スヘキ
性質ヲ有スルヤ否ヤヲ判定スルニアリ……蓋シ夫ハ其處
置ニ際シ藥品ノ選擇上最モ必要ナルモノナリ
齒齦ノ出血ニアリテハ其根原スル小血管ヲ搜索シ之ヲ
捻轉或ハ壓迫スヘシ。此際血管一部ノ裂傷ニ過キサル時ハ
充分之ヲ分離シ以テ其收縮ヲ來サシムレハ足レリ又出血
僅少ナル時ハ止血藥ヲ蘸セル「リント」ヲ以テ「ガツタベルカ」
小枕ヲ纏絡シ其面上ニ壓抵セハ常ニ止血スルモノナリ×
齒槽窩ヨリノ出血ニ於テハ左ノ方法ヲ襲用スヘシ即チ
不吸收性小圓錐形綿毛(長サ二分ノ一吋乃至三分ノ一吋基
底ノ幅四分ノ一吋)及ヒ綿撒糸ノ小枕、四尾縋帶、シリシ
子、冷水、并ニ適當ナル止血劑ヲ準備シ次テ齒槽窩ヨリ凝血

ヲ驅除シテ注射洗滌シ綿球ヲ以テ乾燥セシメタル後チ直チニ止血劑ニ蘸漬セル圓錐狀綿球ヲ齒槽内ニ栓塞シ單寧ヲ以テ最モ良トス。温和ニ之ヲ壓迫シテ窩底ニ推進スヘシ。蓋シ出血ハ止血劑ノ作用ニ依リ退止スルノミニアラス。寧口壓迫ノ結果ニ依ルト謂ツヘキナリ。斯ノ充分槽内ヲ填塞スルニ至ルマテ多量ノ綿毛ヲ填入シ更ニリント塞子ヲ以テ其面上ヲ覆ヒ上顎ヲ閉合シテ之ヲ咬マシメ四尾綿帶ヲ施シテ其位置ニ固定セシムヘシ。但シ隣接齒ヲ有スル際ニ方リテ齒槽内ニ固定セシムル最良法ハ木ノ一片ヲ以テ齒間ニ楔定スルニアリ實ニ此法ハ良績ヲ呈スヘシト雖モ出血劇甚ナル時ハ塞子ヲ其位置ニ確定セシメンカ爲メ四尾綿帶ヲ使用スヘシ然ルモハ栓塞シタル綿球ハ能ク槽内

◎筋肉運動ハ其影響ノ及ブ所負傷部ニ限局セシテ更ニ心臓ヲ充進シテ血液ヲ出ノ勢ヲ助ク是其安靜ヲ要スル所以ナリ

*處方
 右八箇ニ分チ止血スルニ至ルマテ二時間毎ニ一箇ヲ與フ

○過方
 過格魯兒鐵液二十五m
 水ヲ加ヘテ八等ノ全量トナシ止血スルニ至ルマテ三時間毎ニ茶匙ヲ服用セシム

ニ固定セラルヘシ

例令僅少ナリトモ患者ニ命シタル注意概則ハ極メテ緊要ナルヲ以テ必ス忘却セシムヘカラス。即チ患者ヲシテ安靜ニ家ニ歸ラシメ又運動ノ動作ヲ避忌シ且ツ晝間ハ常ニ安坐シ夜間ハ高キ枕ヲ使用スヘキ様勸告スヘシ。又飲食時ニ方リテハ彎曲セル管ヲ以テ流動食ヲ攝取シ其流動食ハ常ニ冷却シテ用ヒサルヘカラス

齒槽ヲ栓塞スル時ハ血液循環ハ其内部ニ限局セラル血液若シ稀薄ナル水様液ニシテ凝泣スヘキ性質ヲ帶ヒサル時ハ其出血原因ハ明カニ血液ヨリ來ルモノニシテ沒食子酸或ハ過格魯兒鐵等ヲ賞用シ血液口内ニ於テ凝泣スヘキ性質ヲ有シ出血持久ナル時ハ麥奴ノ如キ藥品ヲ選擇

●過方幾斯 二十m
 麥奴越斯 一十m
 砒酸 一十m
 蒸溜水 一十m
 ナニ水ヲ加ヘテ八等ト
 ナニ血ニ至ルマテ
 三時間毎ニ茶匙ヲ
 與フ

△能腦水二分ニ麥奴
 m一分ヲ加ヘ三乃至十
 mヲ所要ニ應シテ注
 射ス

スヘシ。蓋シ其出血原因ハ脈管壁ノ收縮力ヲ缺乏セルニ歸
 因シ麥奴ハ無紋筋組織ノ收縮ヲ將來セシムルニ因レリ
 沒食子酸ヲ以テ齒槽窩ヲ栓塞スルニ方リ過格魯兒鐵或
 ハ麥奴ヲ投與スヘシ然ルルハ出血ノ退止スルニ至ルマテ
 内部ニアリテ作用スヘシ。此際モルトンスコル氏ハ麥奴ノ
 皮下注射ヲ推薦セリ
 右處置法ヲ施シタル后チ二十四時間放置シ出血全ク退
 止スルニ至ラハ栓塞子ヲ除去シ防腐的含嗽劑ヲ投與スヘ
 シ然レモ本法ハ出血劇甚ナル際ニ適用シ得ヘカラズ何ト
 ナレハ斯ル狀況下ニ於テハ栓塞子ハ其効力ヲ逞フスル能
 ハサレハナリ。而シテ若シ全ク止血セサル時ハ不吸收性綿
 毛ヲ纏絡シタル木枕ヲ齒槽内ニ裝入シ緊密ニ栓塞セサル

ヘカラス。右ニシテ其續ヲ呈スルナクハ烙鐵法ヲ試ミ又
 之ニシテ不結果ニ終リ出血下顎ヨリ來ル時ハ「トレハイ」
 Trepine ヲ以テ穿孔シ象牙製栓塞子ヲ刺入シテ顎骨ノ内
 板ニ向ヒ動脈管ヲ壓迫スヘシ。又處置シ難キ上顎出血ニア
 リテハ四指ヲ以テ頸部ヲ把握シ第六頸推ノ横突起ニ向ヒ
 頸動脈ヲ壓迫スヘシ。但シ以上ノ方法ヲ施スモ尙ホ出血ヲ
 退止スル能ハスンハ須ラク動脈結紮法ヲ施サ、ルヘカラ
 ス

下顎第三大白齒部ノ出血時ニ際シポイド氏ハ中心線ニ
 於テ唇ヲ分チ顎ヨリ頬肉ヲ反轉セシメ下顎骨外板ニ穿孔
 シテ下顎管ヲ開口シ后チ管ノ近心并ニ隔心端ヲ栓塞シテ
 其蹟ヲ收メタリト

* 湯方
 華氏九十度ノ水一
 注液法トハ輸血法
 殆ソト其軌ヲ同フ
 脱纖維性血液ニ代
 フルニ糖分ヲ含メル
 食鹽液ヲ以テスル
 ノ異アルノミ此液ハ
 華氏九十度ニ熱シ數
 滴加シテ留置シ或ハ
 酸加シテ加ヘテ阿爾
 加里性トナシ徐々ニ
 之ヲ靜脈ニ注入スレ
 ハ其効力ニ優レル
 アルモ劣ルナシ

甚シク衰弱状態ニ陥リタル時ハ注液法ヲ施スヘシ即チ
 鹽水ヲ中心貴要靜脈ニ注入スルニアリ
 豫メ持久出血ヲ徵知スヘキ患者ニアリテハ可成的拔齒
 ヲ避ケサルヘカラス。然レモ拔齒ニシテ必要缺クヘカラス
 ンハ其施術前三四日間前章既ニ記シタルカ如キ一二ノ藥
 品ヲ使用シ出血ノ豫防處置ヲ企ツヘシ
 新止血劑中一%ノ格魯兒石炭及ヒ一乃至十%ノ纖維素
 ヨリ成ル藥品ヲ追加シタリ蓋シ本品ハ組織上ニアラスシ
 テ唯血液上ニ作用スルノミナリトワルシヤム氏ハ謂ヘリ
 又氏ハ犬ニ就キ之ヲ實踐シ其頸部ニ於ケル總頸靜脈ヲ除
 キ悉ク他ノ靜脈ヲ切斷シタル後チ出血ヲ遏止セシニ確然
 タル其績ヲ呈シタリト

齒牙近傍部ニ於ケル動
 脈ノ傷害

軟組織ニ關スル困難偶發症并ニ繼發症

百二十九

齒牙ハ早朝ニ於テ拔去スルヲ可トス何トナレハ出血チ
 來サントスル前殆ソト一日間チ有スレハナリ。又出血素因
 チ有スル者ニアリテハ術後直チニ齒槽窩チ栓塞セサルヘ
 カラス之レ出血チ來シタル際ニ處置センヨリハ寧ロ其未
 タ發セサルニ先チ是カ準備ヲ加フルノ優レルニ如カサル
 カ故ニシテ其豫防法ハ收斂劑ヲ反覆使用スルニアリ
 以上治グ止血并ニ豫防法ヲ叙述セリ亦以テ其梗概ヲ領
 得スルニ足ラン但シ實地ニ當リ各法ノ優劣果シテ如何ナ
 ルヘキヤ夫ハ素ヨリ此一小兔冊ノ詳悉シ得ヘキ所ニアラ
 ス況ンヤ運用ノ妙變通ノ才ニ至リテハ則チ術者其人ニ存
 スルオヤ

〔己〕齒牙近傍部ニ於ケル動脈ノ傷害 拔齒ノ際舌動脈ノ

傷害ヲ來スヲアリ是ハ既ニ第三章乙舌ノ損傷條下ニ於テ
説明シタルヲ以テ茲ニ贅セス。拔牙ノ際往々耳下腺動脈前
後口蓋動脈ノ裂傷ヲ生スルヲアリ斯ル過失ハ常ニ鉗子ノ
滑脱ニヨリテ起ルモノナルカ故ニ注意ヲ以テセハ能ク之
ヲ防遏スルヲ得ヘシ。然レモ若シ其偶發ニ際セハ壓迫或ハ
捻轉、結紮等ノ處置法ヲ探ルヘク前後口蓋動脈ノ裂傷ニア
リテハ此等脈管ヲ通スル小孔ヲ栓塞スルノ必要ヲ見ル
展々之アリ

拔牙後繼發スル疼痛

〔庚〕拔牙後ニ繼發スル疼痛 拔牙後疼痛ヲ生スヘキ原因
ハ左ノ如シ

拔牙術ノ不完全

〔一〕拔牙術ノ不完全 ニシテ殊ニ其殘根部ニ暴露齒髓ヲ
存スル時

齒槽窩口ノ迅速ナル癒合

〔二〕齒槽窩口ノ迅速ナル癒合 拔牙後速ニ其創口相癒合
スル時ハ窩底ニ於ケル肉芽表面ヨリ天然剝離スヘキ
腐肉ヲ生シ若クハ剝離セスシテ其部ニ停滯シ周圍組
織ノ腫脹ニ依リテ局所的外傷焮衝ヲ誘起スヘシ

齒槽窩ノ腐敗

〔三〕齒槽窩ノ腐敗 ハ第一不潔ナル鉗子ノ使用ニ歸シ有
毒ナル外傷ノ一ニ位ス。之ヲ診査スル時ハ帶綠色腐敗
膿ノ存在ヲ見ルヘク。此際周圍組織ハ甚シキ焮衝ノ狀
態ヲ呈シ其部ハ限局シテ直チニ腐肉ヲ來スヘキ傾向
ヲ有スヘシ。實ニ斯ル病態ハ病院看護人或ハ醫學生ニ
於テ散見スル所ニシテ之レ不潔ナル勤務ニ從事シ其
傳染ニ基スルヤ敢テ疑ヲ容レサルナリ
齒槽窩ノ腐敗ハ劣等ナル生活組織ヲ有スルモノニ於

硬軟組織ノ劇シキ裂傷

齒槽ノ腐骨疽

傷口内異物ノ存在

テ生シ或ハ慢性或ハ急性焮衝ノ如キ局處原因ニ因テ起リ殊ニ齒根膜ヲ救治センカ爲メ拔齒スル際ニ於テ多キヲ見ル。其他全身衰弱、微毒、瘰癧并ニ營養不給ヲ將來スヘキ全身病ヲ患フル者等ニ於テモ亦生ス

〔四〕硬軟組織ノ劇シキ裂傷 齒槽窩近部ノ硬軟組織ノ劇甚ナル裂傷及ヒ

〔五〕齒槽ノ腐骨疽 ハ拔齒后ニ繼發スル痛楚ノ最大原因ナリ

〔六〕傷口内異物ノ存在 此奇ナル一例ハ數年前嘗テ公示セラレタリ即チ一患者アリ其左側第一大臼齒拔除ノ際忽然齒冠ノ一部ヲ失踪セリ是ニ於テ乎充分ノ搜索ヲ遂ケタリト雖モ所在ヲ認ムル能ハズ故ニ恐ラ

神經ノ損傷

ク口内合嗽ノ際驅除セラレタルモノナラントノ判定ヲ下セリ。然レトモ后チ三週間絶ヘス齒槽窩ニ鈍痛ヲ覺ユルヲ以テ以前ノ記憶ヲ喚起シ再ヒ精密ナル檢査ヲ施シタリト雖モ亦其原因ヲ認メサリシ。時ニ偶然患者ハ齒槽窩ヲ充塞シタル肉芽上ニ齒冠ノ碎片ヲ留ムルヲ發見シタルノ例之ナリ。又他ニ一例ヲ記録セラレ其障害ノ原因タル蓋シ充填シタル「アマルガム」ノ一破片ニテアリキ。而シテ鉗子刃嘴ノ一破片モ亦其原因トナルコトアリ

〔七〕神經ノ損傷 神經本幹ノ損傷ハ他齒ニ比シ下顎智齒拔去ノ際ニ於テ生スルヲ多ク又拔齒后繼發スル疼痛ノ不明ナル原因ハ概ネ齒槽窩ニ於ケル神經ノ刺戟或

處置法

ハ露出ニ歸因スルヲ多シトス。茲ニ其興味アル一實踐
 ハストラー、ベンネット氏ニ依リテ報告セラレタリ即
 チ患者ハ二十三才ノ貴女ニシテウード氏開口子ノ裝
 用ニ由リテ轉位シタル上顎第三大白齒ヲ有シ到底舊
 位ニ復スルノ望ミナキヲ以テ遂ニ之ヲ拔去シタリシ
 ニ敢テ困難ヲ感セサリシト雖、術后十二日間絶ヘス
 痛楚ヲ覺ヘタリ而シテ齒槽深底ヲ除クノ他ハ健全ニ肉
 芽ノ新生ヲ來セリ然レモ口中鏡并ニ探針ノ援ケヲ藉
 リテ精密ナル検査ヲ遂クルニ方リ殆ト帽針頭大ノ腐
 肉アルヲ發見シ之ニ觸接スル時ハ劇甚ナル疼痛ヲ惹
 起シタリ依テ其神經ヲ切斷シ永遠ノ安態ヲ獲タリト
 處置ハ其原因ノ如何ニ由リテ自ラ方法ヲ異ニセサルハ

非沸湯一巴中ニ鹽粟
 ノニ等ヲ投シ之ヲ半
 巴ニ拂煮シタルモノ

齒槽窩口ノ迅速ナル癒
 合ノ處置

カラサルハ論ナシト雖、凡須ラク口鏡及ヒ探針ヲ以テ齒槽
 内ノ完全ナル検査ヲ施シ若シ其原因不完全ナル手術ニ歸
 スル時ハ更ニ之ガ拔齒ヲ企ツヘク之ニシテ再ヒ不結果ニ
 終ラハ鎮痛藥ヲ以テ槽内ヲ洗滌シ。又齒牙ノ殘留部ニ露出
 髓ヲ有スル時ハ發烟硝酸或ハ強石炭酸ヲ貼付スヘシ。而シ
 テ此際更ニ患者ニ命シ器粟ノ温湯法ヲ施サシムルヲ可ト
 ス

齒槽窩口ノ迅速ナル癒合 新ニ癒合シタル表面ハ切開
 チ加ヘ槽内ヲ洗滌シタル後チ殆ント二時間綿撒糸ノ小球
 チ以テ之ヲ栓塞シ次テ防腐的合嗽劑ヲ投與スヘシ。但シ既
 ニ膿膿シタル時ハ傳染ノ性質ヲ生スルカ故ニ槽内ハ充分
 ナル消毒劑即チ千倍昇汞水或ハ四十倍石炭酸水ヲ以テ注

射洗滌シ綿球ヲ用ヒ注意シテ其部ニ拭乾シタル後子格魯兒亞鉛ノ少量ヲ貼シ之ヲ溶融セシメ又防腐的溶劑ヲ以テ屢々點滴法ヲ施サ、ルヘカラス

其膿膜ハ上顎ニ比シ下顎齒拔去後ニ於テ來ルチ多シトス之レ全ク其齒槽窩ハ孤立スルニ因ル故ニ防腐液ヲ蘸シタル綿毛ヲ以テ緊密ニ齒槽窩ヲ栓塞スルノ必要ヲ見ルヘシ。蓋シ是ハ其刺戟ノ原因ヲナスヘキ碎爛物ノ滯留ヲ防クニアリ。而シテ體質衰弱セル者ニアリテ膿膜シタル時ハ宜シク強壯劑ヲ投與シ且ツ一日ニ三回槽内滯留物ヲ除去シテ充分ナル洗滌ヲ施スヘシ

神經ノ接近シタル槽内ニ腐蝕劑ヲ貼用スルニ方リテハ潛心注意スルヲ要ス殊ニ密偪シタル下顎第三大白齒ニ於

*梅毒膿膜起層六氏
阿爾仿設
括失亞發劑
之ニ水ヲ加ヘテ八等
トナシ食后一日三回
ニ食匙ヲ與フ

テ然リトス。而シテ此等ニ關スル二箇ノ實驗ハコライヤ氏ニ依リテ表示セラレタリ即チ其一ハ慢性齒槽膿腫ニ罹ル下顎第二小白齒ヲ拔去シタルニ疼痛ヲ繼發セルヲ以テ充分槽内ヲ洗滌シ格魯兒亞鉛ノ少量ヲ貼附セリ然レモ疼痛益々増進シ凡テノ鎮痛劑ヲ使用シタリト雖モ毫モ其効ヲ奏スル能ハズ。其二ハ密偪下顎第三大白齒ヲ拔去セル后子槽窩ハ膿ヲ醸生シ且ツ微痛ヲ誘起セシヲ以テ第一ト同法ヲ施セルモ又不良ノ結果ニ終レル等之ナリ是ニ於テ氏ハ爾后神經本幹ノ近接シアリト考定スル際ハ無刺戟性防腐劑ヲ以テ洗滌シ且ツ阿芙蓉丁幾ニ蘸セル綿球ヲ槽内ニ栓塞シ常ニ満足ナル効績ヲ收メタリト

豫メ患者ニ諭告スルニ拔齒後概ネ痛楚ヲ感スルコトアル

*左ノ處方ハ最モ有
効ナリ
硼酸皮利酸林 各
香水 四〇
クラメリ丁 四〇
再溜酒精 四〇
右口洗劑トシ水ニ混
シテ使用ス然レモ使
用前之ヲ濾過セサル
ヘカラス

◎處方
硫酸亞鉛 八氏
格魯兒亞鉛 六氏
酢酸莫爾比涅 八氏
水 八氏
右口洗劑トシ水ニ混
シテ使用ス

チ以テスヘシ殊ニ齒根膜或ハ齒槽膿腫ニ陷レルモノニ於
テ然リ而シテ多數ノ齒牙ヲ拔去シタル時ハ口洗劑ヲ與フル
ヲ可トス然ルルキハ假令疼痛ヲ有セサル際ト雖モ能ク槽内
ノ腐敗ヲ未萌ニ防クヲ得ヘキナリ

齒槽膿腫ニ起因スル疼痛ニハ無臭防腐劑ノ洗滌ヲ施
シ硬軟部ノ基シキ裂傷ニハ鎮痛的口洗劑ヲ使用スヘシ又
原因不明ナル際ニ於テハ阿芙蓉丁幾或ハ古加乙涅ノ如キ
局部鎮痛劑ヲ槽内ニ貼附シ併セテ鎮痛的口洗劑ヲ投與セ
サルヘカラス

第四章 麻酔ヲ施シ拔齒スル際ニ生 スル困難偶發症并ニ繼發症

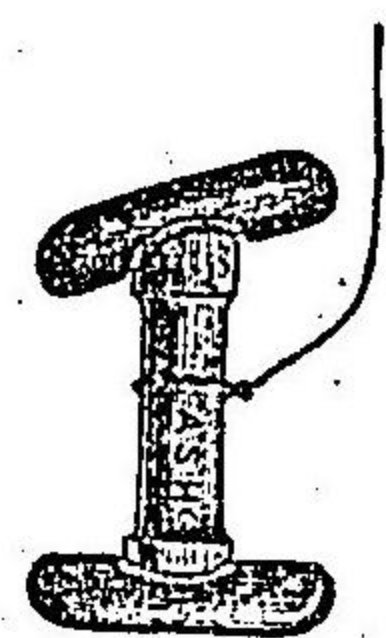
舌ノ退却

支柱

[甲] 舌ノ退却 麻酔ニ依リテ拔齒スルノ際舌ハ意識ノ命
ニ隨ハサルヲ以テ喉頭上ニ退却シ或ハ術者ノ手指ニ依リ
後方ニ壓迫セラルヘシ斯ル災害ハ概ネ呼吸困難及ヒ窒息
ノ徵候ヲ伴フ者ニシテ此際唯ニ胸壁ヲ撿スルノミチ以テ
充分之ヲ診定スルヲ難シトス是レ其呼吸運動ハ肺中ニ吸
入スヘキ空氣ナキ時ト雖モ繼續シ得ルモノナルカ故ナリ
而シテ此カ救治法ハ適當ナル器械ヲ採リ舌ヲ強ク前方ニ
牽引シ且ツ頭部ヲ脊梁ニ壓迫スルニアリ

[乙] 支柱 或ハ開口子ニ因リ齒牙ノ轉位 斯ル過失ハ
弛緩齒上ニ支柱(第七十圖)ヲ裝定シ或ハ齒牙ノ強度ヲ超ヘ
テ不當ノ壓迫ヲ加フルヨリ生ス蓋シ是ハ支柱ヲ前部齒上
ニ駐メ過度ニ開口セシムルニ由ルヲ多シトス實ニ斯ル狀

支柱ノ圖



第七圖

態下ニ在テハ齒軸ト直角ニ於テ上顎齒ノ口蓋面上ニ不當ノ壓力ヲ加ヘ屢々齒牙ヲ外方ニ壓出セシム。又マソン氏開口子使用ノ際ニ起ル過失ハ多ク之カ操作ノ拙劣ナルニ歸スルカ故ニ同器械ヲ使用スルニ方リテハ須ラク潛心注意ヲ要ス。而シテ若シ齒牙ニシテ外方ニ壓出セラレタル時ハ可成的迅速ニ之ヲ舊位ニ整復セシメサルヘカラス。

〔丙〕咽喉内異物ノ通過 齒牙、鉗子ノ碎片或ハ支柱ノ如キ異物ハ咽喉ヲ通過シ氣管若クハ食道内ニ於テ停滯セラル、トアリ即チ

氣管ニ於テハ(一)喉頭口(二)喉頭内(三)氣管或ハ氣管支内ニ宿ル

咽喉内異物ノ通過

氣管

食道ニ於テハ(一)咽頭内(二)食管(三)胃ノ幽門ニ宿ル

氣管……喉頭口或ハ喉頭内ニ滯ル異物ハ患者ノ大ナル咳嗽ニ因リテ驅逐スルヲ得ヘシト雖モ若シ之ヲ行ハサル時ハ假死ノ徵候ヲ將來スヘシ。而シテ斯徵候ヲ呈セハ直チニ頭ヲ前方ニ傾ケ指ヲ口ノ一側ニ沿フテ食管ニ達セシメ以テ異物ヲ前方ニ拽出スヘシ。蓋シ異物ノ舌後部ニ止ル際ニ於テ此方法ヲ施サハ容易ニ驅除スルヲ得ヘシト雖モ若シ其績ヲ呈セサル時ハ可及的俯臥セシメ強ク脊部ヲ打搏スルヲ可トス。但シ此等ノ方法ヲ行フモ尙ホ未タ驅除スル能ハスンハ直チニ氣管切開法ヲ施サ、ルヘカラス。此手術ヲ施スニ臨ンテハ躊躇因循セサルヲ要ス之レ逡巡其手術ヲ遲延セハ隨テ患者ノ生命ヲ救フノ期ヲ失セシムルナシト

セサレハナリ

氣管或ハ氣管支内ニ異物ノ停滯スル時ハ直チニ其徵候ヲ呈スルモノニアラス。然レハ劇シキ咳嗽ニ次テ假死ノ状態ニ陥リ此徵候漸々減少シテ間歇性ノ咳嗽ヲ發シ終ニ肺或ハ兩肺衰弱ノ徵ヲ顯ハスニ至ル

ウキルリヤム、マツク、コルマツク氏ノ報告ニ依レハ上顎小臼齒拔去ノ際鉗子ノ口蓋嚙ハ交叉點ニ於テ折斷シ失踪セリ。后チ患者ハ直チニ呼吸困難ニ陥リ將ニ死ニ頻セントセシモ此徵候漸次ニ減退シ其后六週間患者ノ状態ハ敢テ大ナル懸慮ヲ有セサリキ。然レハ血痰ヲ伴フ刻々タル咳嗽ニ因リテ苦悶シタリ後三週日ヲ經テセントトーマス病院ニ就キ其困難ヲ由來セシ異物ヲ右氣管支ヨリ驅除シ以テ

食道

健康状態ニ快復スルヲ得タリト

異物ノ一氣管支内ニ滯ル時ハ偏側ノ肺全部或ハ一部上ニ於テ呼吸ノ顯徵ナク他側ノ肺上ニ太キ音(小兒ノ呼吸音ノ如キ)アルヲ以テ鑑察スルヲ得ヘシ。其處置法ハ氣管切開術ヲ施シ異物ヲ驅除スルニアリ

食道……咽頭内ニ異物ノ停滯シタル時ハ痛楚ヲ誘起シ嚥下并ニ呼吸ノ困難ニ陥リ又深刻ナル咳嗽ヲ發スルヲ常トス

異物ノ咽頭内ニ停滯スル時ハ常ニ指頭ノ抵觸ニ依リテ之ヲ斷定シ得ヘシ若シ斯ル方法ヲ以テ診定スル能ハスンハ宜シク咽頭鏡ノ扶ケヲ籍リテ洞内ヲ検査セサルヘカヲズ

此處置法ハ先ツ指頭ヲ以テ異物ノ驅除ヲ企圖スヘシ然レモ若シ此法ニシテ其續ヲ奏スル能ハサルハ咽頭鉗子ヲ使用セサルヘカラス。但シ或際ハ異物ノ停滯ヲ明カニ斷定シタル后チ咽頭切開術ヲ施スノ必要ヲ見ルコトアリ

異物ノ食管内ニ停滯スル時ハ嚥下困難并ニ持久性ノ疼痛ヲ惹起スルヲ常トシ食管ノ上部ニ位スル時ハ概ネ呼吸困難ヲ併發スヘシ。其診斷ハ食管上ニ聽診器ヲ裝定シ患者ヲシテ液體ヲ嚥下セシムルニアリ然ル時ハ迸聲ヲ聞クヘク又或ハ其部ニ消息子ヲ送入シテ此カ存否ヲ確知スルヲ得ヘシ。蓋シ此等ノ方法ハ異物ノ存在セル部位ヲ斷定スルニ方リテ最モ適當ナルモノトス

異物ノ食道口ニ停マル時ハ其處置法トシテ須ラク咽頭

鉗子ヲ以テ撮出スヘク。若シ不結果ニ終ラハ宜シク食道切開術ヲ加ヘサルヘカラス

胃ノ噴門ニ接近シテ存スル時ハ消息子ヲ以テ異物ヲ胃腑内ニ推進セシムヘク。若シ之ニシテ不良ノ結果ヲ呈セハ胃切開術ヲ施スヘシ

胃ノ幽門ニ於テ停マル時ハ腹部ノ膨脹ヲ來スヘシ斯際ハ可及的胃腑ヲ空虚ナラシメ次テ胃切開術ヲ施スヘシ。或場合ニ於テ常食ヲ禁シ數日間馬令薯及ヒ綿毛ノミヲ食セシムル時ハ綿毛ハ能ク異物ヲ包裹シ糞ト共ニ排泄セラルコトアリ

咽頭ヲ通過シ得ヘキ物體ハ概シテ食道ヲ通過シ胃中ニ達スルヲ得ヘク敢テ之カ爲メ甚シキ障害ヲ惹起スヘキモ

ノニアラス
 胃、食道、及ヒ氣管切開手術等ノ詳説ニ至テハ普通外科書ニ就キ之レカ研究ノ勞ヲ探レ
 上記ノ如キ不慮ノ變事ニ對シ豫メ其準備ヲ究ムルハ難シ宜シク機ニ臨ミ變ニ應シテ之ヲ處置セサルヘカラス然レモ全身麻醉ヲ施スノ際ニハ豫メ氣管切開術ヲ加フルニ必要ナル凡テノ器械ヲ整頓シ置クナ上策ナリトス。蓋シ此等ハ寔ニ稀ニ要スルノミニシテ麻醉法ヲ施スナクンハ寧ロ斯ル不慮ノ變事ニ遭遇スルコトナク直チニ拔齒術ヲ結了シ得ヘシ故チ以テ吾人ハ最モ此方則チ遵守スルノ肝要ナルヲ見ル

子宮痛

第六章 雜種ノ困難偶發症并ニ繼發症

〔甲〕子宮痛 拔齒後子宮ノ疼痛ヲ繼發セシ踐例ハセルコソ
 ンブ氏ニ依リテ報告セラレタリ而シテ同氏ハ其處置ニ方
 リ固拗ナル白帶下ノ療法ヲ襲用セリト

〔乙〕震盪 拔齒後震盪症ヲ發スルハ屢々目撃スル所ニシテ其震盪ノ度ハ概ネ微弱ナリト雖モ身體虛弱ナルモノニ於テハ往々然ラサルコトアリ。蓋シ此繼發症ハ拔去スヘキ齒數ノ如何ニ關スルモノニアラズシテ其身體ノ健否ニ係ルト謂ツヘシ故ニ強壯ナル體質ヲ有スル者ニアリテハ多數ノ拔齒ニ耐ユルヲ得ヘシト雖モ之ニ反シ虛弱ナルモノニ於テハ然ラサルコト常ニ心裡ニ銘スルヲ要ス。又一時ニ全數齒牙ノ拔去ヲ施スハ敢テ妨ケナシ然レモ身體衰弱ノ度

震盪

ニ應シテ劇甚ナル震盪症ヲ惹起スルコトアリ
 卒倒ハ往々發スル所ニシテ若シ手術間ニ起ル時ハ其恢復
 スルニ至ルマテ手術ヲ中止セサル可ラス。此處置法ハ膝ニ
 向ヒ頭部ヲ垂下セシメ同時ニ頸部ニ纏ヘル諸物ヲ緩解シ
 鼻口ヨリ安母尼亞精ヲ嗅カシムルヲ以テ最良ナリトス。又
 劇シキ症ニアリテハ患者ヲ床上ニ仰臥セシメ且ツ胸部ヲ
 裸露シ冷水ニ蘸漬シタル手拭ヲ以テ之ヲ打搏スヘシ。其尤
 モ劇シキ際ニ臨マハ依的兒或ハ龍腦丁幾阿列布油ノ十乃
 至二十%溶液ヲ皮下ニ注射シ併セテ武蘭垓ノ如キ衝動劑
 ナ投與セサルヘカラス
 拔齒時ニ繼發シタル致命ノ卒倒ハ千八百八十一年マル
 セール市ニ於テ實驗シタルソームス氏ニ依リテ報告セラ

癲癇

歇私的里亞

レタリ。即チ患者ハ婦人ニシテ拔齒セントスルノ前遽ニ卒
 倒ヲ發セリ故ニ暫ク手術ヲ中止シ其恢復ヲ待チ再ヒ手
 術ヲ施シ否寧口施サントセシ瞬間ニ於テ致命ノ卒倒ヲ將
 來セル是ナリ。而シテ之ヲ剖見スルニ腦充血ノ外何等ノ異狀
 ナモ發見スル能ハサリシト
 [丙] 癲癇 ノ習慣ヲ有スル者ニアリテハ拔齒后本症ヲ繼
 發スルコトアリ。蓋シ之カ發作ニ際セハ患者ヲ手術臺ヨリ下
 シ床上ニ仰臥セシメ緊迫セル衣服ヲ脱シ木片或ハ適當ナ
 ル材品ヲ齒間ニ挿入シテ楔トナシ舌ノ傷害ヲ豫防スヘシ
 [丁] 歇私的里 拔齒后往々本症ノ發現ヲ見ルコトアリ然レ
 凡普通療法ノ外敢テ特殊ノ處置法ヲ施スノ要ナシ
 [戊] 腐敗并ニ傳染 拔齒后ニ繼發スル腐敗并ニ傳染毒ハ

往々齒科書上ニ散見スル所ニシテ此等ノ原因ハ必シモ手術ノ結果ニアラス其多クハ拔去スヘキ齒牙ノ怠慢ナル状態ニ基スト言ハサルヘカラス。然レハ傳染毒ニ至リテハ時トノ手術ノ結果ニ因ルヤ亦疑ヲ容レサルナリ但シ此原因ヲシテ防衛的處置ヲ施ササルノ故ニノミ據ル能ハス

齒槽ノ醗膿及ヒ其適當ナル處置法ハ既ニ百三十六頁ニ於テ説明シタルヲ以テ茲ニ多言ヲ須ヒス

梅毒ノ傳染ハ汚穢シタル鉗子ノ使用ニ歸因シ其他敗血症蜂窩織炎骨炎骨膜炎骨髓炎膿血症強直症等又拔齒后ニ繼發スルコトアリ其處置法ニ至テハ素ト斯書ノ趣旨ニアラス加之此小兎冊ノ敢テ悉シ得ヘキニアラサルナリ

4/35

明治三十二年十二月廿五日印刷
同 年十二月三十日發行

定價金一圓

編纂者 荒木盛英
東京市芝區田村町八番地

發行者 清水卯三郎
東京市日本橋區本町三丁目二十番地

印刷者 足助房太郎
東京市京橋區宗十郎町十五番地

印刷所 國文社
東京市日本橋區本町三丁目二十番地

發行所 瑞穂屋書籍店
東京市日本橋區本町三丁目二十番地

1-10-25

發賣所

東京市日本橋區通三丁目
丸善株式會社

同

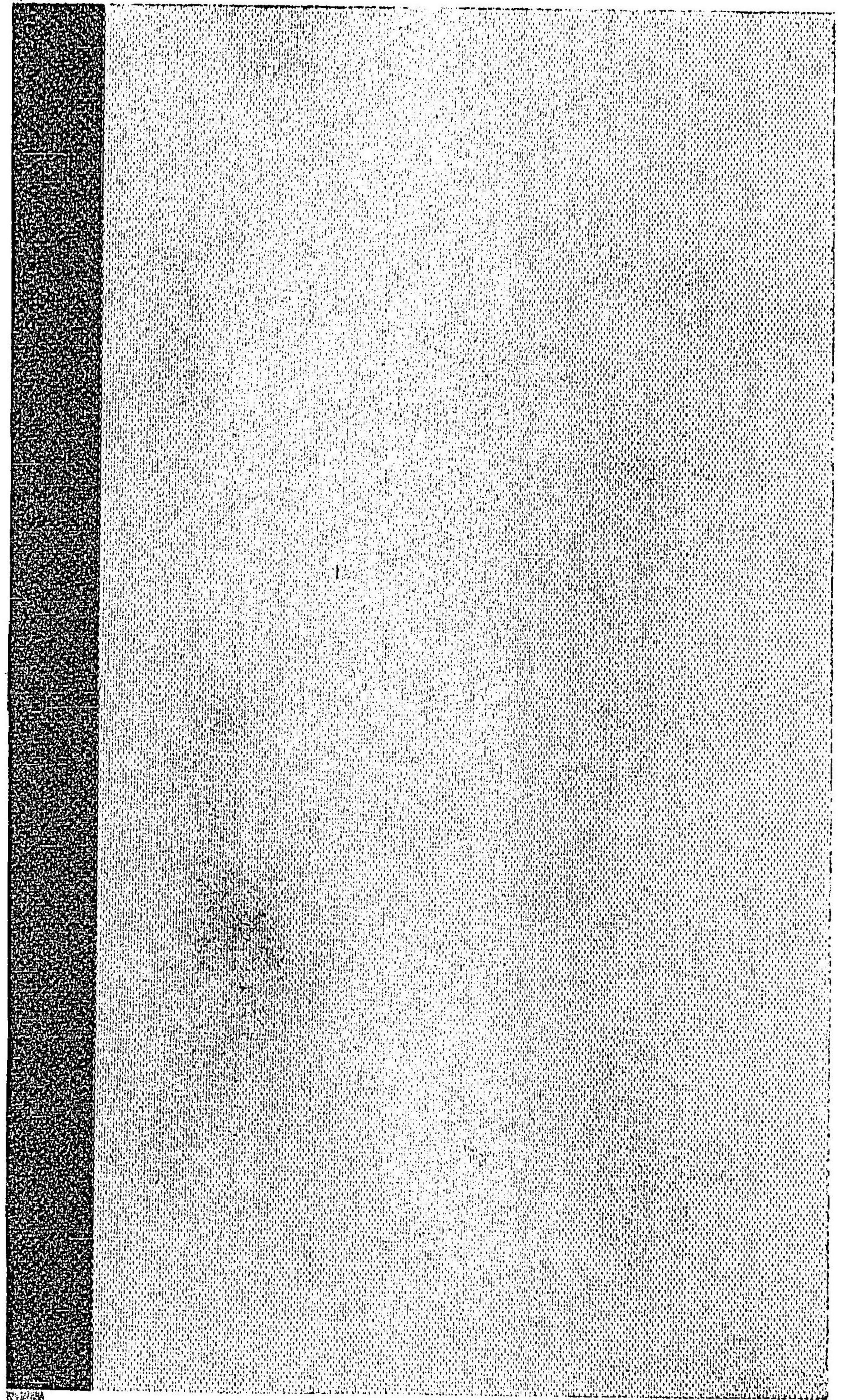
大坂市博勞町四丁目十三番地
瑞穗屋支店

同

京都市御幸町通蛸藥師下北東側
瑞穗屋出張所

同

名古屋市本重町三百九十六番戶
瑞穗屋出張所



58

1